

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Distribution and Classification of Himalayan Languages (Part I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西, 義郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004290

ヒマラヤ諸語の分布と分類 (上)

西 義 郎*

The Distribution and Classification of Himalayan Languages (Part I)

Yoshio NISHI

This paper first presents a short introduction to the distribution and classification of "Himalayan languages", a group of non-Tibetan Tibeto-Burman languages, most of which are still found only to the west of Bhutan and Assam, as defined by S. Konow (*Linguistic survey of India*, Vol., Pt. I). In the first two sections (Part I) the distribution and the state of the art of their studies will be dealt with. In the rest of this paper (Part II), the subgroupings of these languages and some of their phonological and grammatical features, typological and areal, which have recently aroused considerable interest of TB scholars will be discussed in detail.

0. 本稿の目的	地
1. ヒマラヤ諸語の範囲	2.2.2.2. 東ネパール
2. ヒマラヤ諸語の分布	2.2.3. インド東北部
2.1. 概説	2.2.3.1. シッキム州と西ベンガル州
2.2. 詳説	3. ヒマラヤ諸語研究の現状と資料
2.2.1. インド北西部	3.1. 1960年代前半までの概観
2.2.1.1. ヒマチャル・プラデシュ州	3.2. 1960年代後半以降の研究概観
2.2.1.2. ウッター・プラデシュ州	3.3. 1960年代後半以降のヒマラヤ諸語の
2.2.2. ネパール	資料
2.2.2.1. 西ネパールとカトマンズ盆	

0. 本稿の目的

ヒマラヤ地域のチベット・ビルマ諸語の研究は、いまだ十分というにはほど遠い現

* 神戸市立外国語大学, 国立民族学博物館研究協力者

状であるが、それでもここ4半世紀ほどにおける進展状況をそれ以前と比べれば、隔世の感があるといえる。また、この地域で1960年代後半以降に発見された言語も多い。このような事実を踏まえて、この論文では、ブータン及びインドのアッサム地方以西のチベット・ビルマ語系言語、通称ヒマラヤ諸語の分布状況、研究現状、系統的分類及び現在この地域の研究者の関心が寄せられている幾つかの問題等の紹介を目的としている。

なお、本稿は、1986年度の『国立民族学博物館研究報告』（11巻4号）に掲載された「現代チベット語方言の分類」の続編というべきものである。いずれは、ブータンとアッサム地方のチベット・ビルマ語系言語についてはやはりその分類を論文にまとめ、ヒマラヤ地域全体のチベット・ビルマ語系言語の分布状況を多少とも明らかにしたいと考えている。又、上掲論文には多少補筆ないし訂正すべき箇所があり、それらは本稿の注及び付記に記してある。

1. ヒマラヤ諸語の範囲

ここでいうヒマラヤ諸語は、チベット語方言を除き、中国以南、アッサム以西の、ネパールとその以西の北西インドを含むヒマラヤ地域で話されているチベット・ビルマ語系の諸言語の包括的名称であり、1903年(第Ⅱ部)、1904年(第Ⅲ部)と1909年(第Ⅰ部)に出版された『インドの言語調査』(*Linguistic survey of India*) (以下第Ⅰ部を *LSI* と略称)の第Ⅲ巻の大部分の実際の編纂者であった S. Konow が用いた意味での用語である。しかし、ネパールの東の言語としては、トト語と東ネパールにもその話者がいるレプチャ語を除けば、すべてネパールとその以西の言語である(後で述べるように、多くのネパールの少数民族が当時も既にインド北東部に住んでいた)。*LSI*以降、H. Maspero [1952] が Konow の「ヒマラヤ諸語」と同じ範囲の諸言語を“*groupe himalayen*”と呼んでおり、西田龍雄 [1970] の「ヒマラヤ語系」も Konow のヒマラヤ諸語にほぼ相当するものと思われる(ただし、西田 [1987] のチベット・ビルマ語族の分類では、「ヒマラヤ語系」は使用されていない)。この“*Himalayan*”は、C. F. Vogelin & F. M. Voegelin [1977] では、アッサム地方のチベット・ビルマ語系言語も含めた、一層包括的な名称として使用されている。

これと類似の用法や用語を挙げると、Konow 以前に、言語を始め、さまざまな分野でのヒマラヤ研究の先駆者といえる B. H. Hodgson [1928 等] が主にネパールのチベット・ビルマ語系言語を話す民族及び言語を指す名称として“*Himalayan*”, “sub-

Himalayan”等の呼称を使用している。また、初めてチベット・ビルマ諸語の分類を試みたとされる M. Müller [1861] も、この地域のチベット・ビルマ語系言語を“sub-Himalayan”と呼称している。更に、*LSI* 以後に、R. Shafer [1950 等] がネパール以西のヒマラヤ南面の多くのチベット・ビルマ語系下位語群に、“Himalayish”（「ヒマラヤ語系」）を使用するが、この用語は、その後 Shafer のそれと同じかそれに準ずる意味で R. A. Miller [1969]（ただし、“Himalayish”を“Himalayan”と
いい換える）や W. W. Glover [1974] 等に使用されている。一方、P. K. Benedict [1972] は、この“Himalayish”をインド北西部で話されているチベット・ビルマ語系の言語群に限定して使用しており、S. Egerod [1973-74] も彼の用法に従っている。

以下に述べるところから明らかなように、現在では Konow の使用した範囲の言語全体を指すヒマラヤ諸語の名称は、系統的分類や類型的分類の観点からは必ずしも妥当な名称ではないが、地域的分類の名称として、または、チベット・ビルマ語派の系統的分類に、特に下位語群と上位語群との関係に完全な合意がみられない現状を反映するものとして、十分正当化できるといえよう。加えて、言語学以外の分野の人々にとってはかなり馴染みのある名称であるともいえる。

2. ヒマラヤ諸語の分布

2.1. 概 説

上述のように、ヒマラヤ諸語の定義を Konow に従って、中国国外で、アッサム以西（実質的にはネパール以西）のヒマラヤ地域で話されているチベット語方言以外のチベット・ビルマ語系言語とした場合、現時点でどのような言語 (language) がそこに含まれるかをまず示しておく必要がある。Konow は、方言 (dialect) の意味を通時的な意味で言語 (daughter language) を指すのに使用したり、共時的な意味で地域方言を指すのに使用したりしている。その上、後者の意味で用いた場合も、それほど厳密に言語と方言を区別していないので、*LSI* にヒマラヤ諸語として挙げられている正確な言語数ははっきりといえないのである。厳密さを無視して、項目数のみを問題にすれば、44 種となるが、そのうちクスンダ語 (Kusunda) は実際には未だ系統の確定していない言語 (死語; 『エスノログ (Ethnologue)』 (1984) でもチベット・ビルマ語派の言語とされているが、チベット・ビルマ語派の言語ではなく、系統不明である) であり、カンブ語 (Khambu=*LSI*) とライ語 (Rai; *LSI* Rāi) は、個別言語名というより民族全体またはその民族の言語全体を指す名称であり、たまたま

Konow のもとに送られて来た言語資料に冠せられていた名称に過ぎない(ただし, Shafer がこれを個別言語名としてその分類に記載して以来, 1970年代初期まで多くの分類で同じように取り扱われている)。従って, この3種を除き, *LSI* のヒマラヤ諸語には41種の言語・方言が含まれているといえよう。

LSI 以降, 特に1970年代以降, このヒマラヤ地域の言語調査が進展すると共に, 多くのチベット・ビルマ語系言語が発見されたが, 現在も言語と方言の区別の曖昧さが尾を引いており, ある変種 (variety) が〇〇語と呼ばれていても, XX 語と呼ばれるそれと近い関係にある別の変種と同じ言語の方言とすべきかそれとも別の言語とすべきかが十分に検討されていなかったり, またそれを行うだけの資料が提供されていないのが実情である。例外的に, ここで従った G. Hansson によるライ・リンブ語系 (Rai-Limbu) 【=キラント語系 (Kiranti)】の分類では, 言語学的基準に基づいて言語と方言が区別されているとされている(ただし, 具体的にどのような基準が適用されたのかは不明である)。ライ・リンブ語系の場合は, 同一語群の多くの言語の分布が錯綜しており, 言語同士の関係も複雑で, 他のネパールのチベット・ビルマ語系言語の場合にしばしばみられるように, 一般に言語名として通用している部族名や下位部族名をそのまま受け入れることができるほど単純でない。そこで, ハンソンの試みたように, まずなんらかの明確な言語学的基準に基づいた区分が必要であり, しかも, たまたま広範な言語資料が利用できたのでそれが可能となったといえよう。しかし, これも暫定的な結論であり, 今後多くの異論があり得る。一方, 言語と方言の区別には, 言語学的基準のみを適用するのではなく, 社会的, 文化的な背景も考慮すべきであるとする立場もあり得る。従って, ここに挙げる「言語」とは, そのすべてが厳密に同一基準が適用された結果分別されたものではない。ライ・リンブ語系以外の, 言語の場合は, ネワル語 (Newar) (ドラカ Dolakha 「方言」はネワル語の方言か別の言語か) やタマン語 (東部「方言」と西部「方言」は方言か別の言語か) の例のように, むしろ慣用に基づいている場合が普通である。

ヒマラヤ諸語は, 西はインドのヒマチャル・プラデシュ州 (Himachal Pradesh) から東はネパールを経てインドの西ベンガル州 (Wdst Bengal) までヒマラヤ山脈沿いに分布している (ヒマラヤ諸語分布概念図(1)と(2)を参照)¹⁾。

1) ヒマラヤ諸語の言語名は, 一般に, *-i~e/-yā/-iyā~li~le* 等の形容詞派生接尾辞を付したネパール語名またはネパール語化した名称やヒンディー語名またはヒンディー語化した名称で知られているが, ここでは, 東ネパールのヒマラヤ諸語を除いて, 原則として, その慣用的なローマ字転写形から派生接尾辞を取り去り, 更に補助記号を省いた語幹形を標準的言語名としてある。例えば, ¹²ダルマ語^L (Darma; *LSI* Dārmiyā) は, これまでの邦文文献では常にダルミヤ語とされていたが, この名称は, この言語が話されている地域名ダルマ (Dārma) に派

まず、インド北西部のヒマチャル・プラデシュ州では、ラホール・スピティ地方 (Lahaul-Spiti district) には ¹ブナン語^L (Bunan; *LSI* Bunān) 【=ガル語 (Gar; *LSI* Gāhri)】, チャンバ・ラホール語^L (Chamba Lahaul; *LSI* Chamba Lāhuṭi), ²マンチャト語^L (Manchad; *LSI* Manchāṭi) 【=パタン語 (Paṭan; *LSI* Paṭni)】, ³ティナン語^L (Tinan=*LSI*), ⁴ランロ語 (Ranglo; *LSI* Ranglōi) が話されている。チャンバ・ラホール語は通常マンチャト語の方言とされる。また、ティナン語とランロ語も同一言語の方言とみなせるが、土地の人々は区別するという。*LSI* では、ティノン語、ランロ語とゴンドラ語 (Gondhla; *LSI* Gōndlā) を同一言語の異名としているが、ゴンドラはティナン語域の一村落名である。

ヒマチャル・プラデシュ州のヒマラヤ諸語の分布は、ラホール・スピティ地方とキナウル地方 (Kinnaur district) に集中しているが、唯一の例外が、クル地方 (Kullu district) の ⁵カナシュ語^L (Kanash; *LSI* Kanāshī) である。

ヒマチャル・プラデシュ州の西端に位置し、南はウッタール・プラデシュ州 (Uttar Pradesh) に接するキナウル地方、かつてのカナウル (Kanaur; *LSI* Kanawar) 地方には、⁶カナウル語^L (Kanaur; *LSI* Kanāw^ari) 【=ミルチャン語 (Milchang; *LSI* Milchang/Milchanang)】, ⁷テボール語 (Thebor; *LSI* Tibarskad) と ⁸チトカル語 (Chhitkal) の3言語が分布している。

一方、ウッタール・プラデシュ州北西部のチベット・ビルマ語系言語としては、まずチャモリ (Chamoli) 地方の ⁹ランパ語 (Rangpa) があり、その西側で話されている言語として、*LSI* は ¹⁰ランカス語^L (Rangkas=*LSI*), ¹¹ダルマ語^L (Darma; *LSI* Dārmīyā), ¹²チャウダンス語^L (Chaudans; *LSI* Chaudāngsi), ¹³ビヤンス語^L (Byans; *LSI* Byāngsi) の4言語を挙げており、当時のこの地域の行政区分名を取り、アルモラ方言 (Almora dialects) と呼んでいる。現在では、この地域はピトラガル (Pithoragarh) 地方に入る。『エスノローグ (Ethnologue)』(1984) では、これらの言語は、いずれもウッタール・プラデシュ州と接するネパールの極西部のマハーカリ具 (Mahakali zone) の言語とされているだけでなく、インド側の資料である主に1961年の国

↘生接尾辞 (-iyā) が付せられたものである。ただし、ネパール研究者の間で広く知られたタカリ族 (Thakali) の言語はタク (Thak) 語とせずタカリ語としておく。東ネパールの諸言語の呼称は、主に Hansson [1988] に従い、例えば、ムガリ語 (Mugali) のように、地名ムガ (Muga) に派生接尾辞が付加されている例でも、そのまま言語名としてある。

言語名のカタカナ表記は、原名の発音にこだわらず、この標準的言語名に基づき、慣用も考慮に入れた表記である。同一言語に複数の名称がある場合、標準的と思われる方を選び、異名は標準名の次に【 】にいれて示してある。なお、⁶カナウル語^L のように、ヒマラヤ諸語の言語名には前に通し番号を付け、*LSI* の項目となっている言語・方言名には後ろに (L) を付けて示した。

勢調査の結果に基づいて作成された『国勢調査における母語に基づく言語の手引 (*Language Handbook on Mother Tongues in Census*)』(1972)にも記載されていない。

しかし、ランカス語については不明であるが、これらの言語は現在も確かにインドのその地域でも話されている。この地域は、LSI以降調査の空白地帯であり、これ以外のヒマラヤ諸語に入る言語が存在する可能性があるともいわれている。

なお、ビヤンス語以外の言語がネパールで話されているとする『エスノログ』の記述は疑わしい。

ヒマラヤ諸語としてLSIに記載されているインド北西部のいまひとつの言語は、ジャンガル語^L (Janggal; LSI Janggalī) であるが、現在この言語は、西ネパールの狩猟採集民の“Raute”または“Rautiya”の言語¹⁴ ラウト語 (Raut) [=ラジ語 (Raji)] と同一言語と考えられている。

ネパールのチベット・ビルマ語系言語の分布は、18世紀中葉以降のゴルカ (Gorkha) 王朝 [=シャハ (Shah) 王朝] によるネパール統一以来あるいはそれ以前から絶えず諸民族、諸部族の西から東へ、近年には東と南への移住が行われ、大きく変化して来ている。その結果、山間僻地を除く、ほとんど全土にわたってさまざまな民族・部族が混住している。更に、シッキム (Sikkim) 州、西ベンガル州 (West Bengal)、アッサム (Assam) 地方やその他のネパール周辺地域、ブータン (Bhutan) 等にも早くから移住した者も多い。また、ネパール中部の山岳・丘陵地帯の多くの有力民族は、グルカ兵として海外に住む者もいる。従って、以下に述べる諸言語の分布は、その故地を中心に示すものであり、その一部は歴史的な分布といえるものである。

リンブ族出身の言語学者 S. Subba [1984] は、「東部開発地域」のメチ県 (Mechi zone) のジャパ (Jhapa) とモラン (Morang) の両郡における「ネパールの言語調査」(1981~1983) (次節参照) では、グルン語とタカリ語を母語とする者が全く記録されていないにもかかわらず、国勢調査 (1981) ではこの両郡でこの両言語の話者が記録されていると述べている²⁾。このことは、国勢調査の結果に基づいて、少なくとも幾つかの言語の分布や母語人口を決定することができないことを示している。

2) S. Subbaによれば、ライ族、リンブ族、タマン族、マガル族やネワル族等は、故郷から別の土地へ移住しても、容易に自分の母語を捨てたりしないが、これは、自民族集団に対する連帯感が母語に対する忠誠心で象徴されるからであり、対照的に、タカリ族やグルン族は、自民族集団を強く支持しているにもかかわらず、故郷を離れるや否や、母語に対する忠誠心を示さないという。ライ族出身の言語学者 Rai [1985] は、ライ族の人々は、故郷を離れて他の【ライ系部族(?)】の土地に移住した場合、自分達の素性 (出身下位部族) は変わらないが、移住先のライ語系言語を母語とするようになるのが普通であると述べている。ライ自身もチャムリン (・ライ) 部族であるが、母語はバンタワ (・ライ) 語である。このライの陳述は、S. Subbaの主張する民族による母語に対する忠誠心の違いも程度の差に過ぎないことを示唆している。

ネパールのカトマンズ (Kathmandu) 盆地以西の極西部及び西部丘陵地帯【ネパール全体からみれば、むしろ中央部に当たる】と中央内タライ (Central Inner Tarai) の一部を含む地域のヒマラヤ諸語としては、¹⁵カム語 (Kham)、¹⁶カイケ語 (Kaike)、¹⁷チャンテル語 (Chantel)、¹⁸マガル語^L (Magar; *LSI* Māgarī, Magar, Mangar)、¹⁹タカリ語^L (Thakali) 【=タクシャ語 (*LSI* Thāksya)】、²⁰マルファ語 (Marpha)、²¹シャン語 (Syang)、²²グルン語^L (Gurung=*LSI*)、²³マナン語 (Manang)、²⁴ナル語 (Nar)、²⁵ガレ語 (Ghale)、²⁶チェパン語^L (Chepang; *LSI* Chēpāng)、²⁷ブラム語^L (Bhramu; *LSI* Bhrāmu)、²⁸タマン語^L (Tamang) 【=ムルミ語 (*LSI* Murmi)】等14の言語が知られている。

現在のカトマンズ盆地は、文字通りの民族の坩堝であり、ネパール全土からさまざまな民族が移住して来ている。その上、同盆地内には、ヒンズー教と仏教の巡礼の聖地がいくつかあるために、特に冬季には、周辺諸国からも多くの民族が訪れて滞在している。カトマンズ盆地は、早くからインド文明の影響下に独特な文明の栄えた地であるが、その文明の担い手であったネワル (Newar) 族は現在もこの盆地内の代表的な民族である。彼らの言語である ²⁹ネワル語^L (Newar; *LSI* Nēwāri) は、チベット語 (Tibetan) とビルマ語 (Burmese) につぐ、チベット・ビルマ語派における第3の文献言語で、既に14世紀から文献語として使用され始めるが、碑文中のネワル語の語彙の最古の記録は西暦1115年に遡るといわれる。ネワル語は、ゴルカ王朝によるカトマンズ盆地征服後、長い間被抑圧言語の地位に甘んじて来たが、漸く最近になって現代ネワル語、古典ネワル語の研究が盛んになり、文法書や辞書等も次々と出版されるようになった。

カトマンズ盆地以東で、東ネパールのスン・コシ (Sun Kosi) 川以東の丘陵地帯のヒマラヤ諸語の言語の大部分は、Hodgson [1858] が、伝説的なキラント (Kirant; Kirānt) 【=キラト (Kirat; Kirāt)】の地として、また、その民族をキラント (Kiranti; *LSI* Kirāntī) 族【=キラト (Kirāti) 族】として紹介して以来、一般にキラント諸語またはキラント語群の名で知られている。Hodgson は、更にこの地方を東から西へ、①アルン・ナディ (Arun Nadi) 川からシングレラ (Singilela) 山脈までのパロ(遠)・キラント (Pallo Kirant) (ほぼコシ (Kosi) 県とメチ県に相当)、②リク・コラ (Likhu Khola) 川からアルン・ナディ川までのマジ(中央)・キラント (Manjhi Kirant) (ほぼサガルマタ (Sagarmatha) 県に相当)、③スン・コシ川からリク・コラ川までのワロ(近)・キラント (Wallo Kirant) (ほぼバグマティ (Bagmati) 県の一部とジャナク

3) Hodgson [1858] とそれを引用した *LSI* [1909] では、パロ・キラントとワロ・キラントが逆になっているが、ここでは訂正してある。

プール (Janakpur) 県に相当) の3つの地域³⁾に分け、その地域に住むとされる諸部族名(同時に言語名)として、①にはリンブ族 (Limbu; *LSI* Limbu) とヤカ【=ヤッカ】族 (Yakha; *LSI* Yakha) 等の4部族、②にはボンタワ【=バンタワ】族 (Bontawa; *LSI* Bontāwā) 等の13部族、③にはチョーラシャ【=チョーラセ】族 (Chourasya; *LSI* Chouraśya) を挙げ、更に、それを総括して、①を「リンブ族の」地、②と③を「カンブ族の」地としている。このカンブ族は、現在ではその首長達に与えられた敬称ライ (Rai; *LSI* Rāi) を取り、ライ族として一般に知られている部族の地方名であるが、ライ族には、それ以外にもジムダル (Jimdar; *LSI* Jimdār), ジミ (Jimi) 等の地方的な呼称があるという⁴⁾。ヤッカ族は、ライ族の一部とする者とそれとは別個の部族とする者がいる。また、伝説的なキラント族とこの地域のライ族とリンブ族のみとの同定を否定する者やライ族のみあるいはリンブ族のみに比定する者もあり、キラントの名称の妥当性には問題がないわけではなく、両部族またはその言語群の総称としては適当でないとする者もいる。

東ネパールには、*LSI* のカムブ族 (=ライ族)、ヤッカ族、リンブ族の言語以外のチベット・ビルマ語系言語として、上述のタマン語の外にもいくつかの言語が存在するが、その分布域はほぼこの地域の周辺部に位置している。更に、ヒマラヤの他の地域と同様に、中国との国境沿いには、カガテ (Kagate) 方言、ジレル (Jirel) 方言、シェルパ (Sherpa) 方言、ロミ (Lhomi) 方言、ワルンチュン (Walungchung) 方言等のチベット語方言が一部でヒマラヤ諸語と入り組んで分布している。

現在、タマン語以外のこの地域のヒマラヤ諸語としては、次の40言語が挙げられる。

³⁰タミ語^L (Thami; *LSI* Thāmi), ³¹ハユ語 (Hayu)^L 【=ヴァユ語 (Vayu; *LSI* Vāyu)=ワユ語 (Wayu)】, ³²スンワル語^L (Sunwar; *LSI* Sunwār/Sunuwār), ³³チョーラセ語^L (Chourase; *LSI* Chouraśya) 【=ウンブレ語 (Umbule)】, ³⁴バヒン語^L (Bāhīng; *LSI* Bāhīng) 【=バイン語 (Baing)=ルムダリ語 (Rumdali)】, ³⁵トゥルン語^L (Thulung; *LSI* Thūlung), ³⁶カリン語^L (Khaling; *LSI* Khāling), ³⁷ジェルン語 (Jerung), ³⁸ティルン語 (Tilung), ³⁹ドゥミ語^L (Dumi; *LSI* Dūmi), ⁴⁰コイ語 (Koi), ⁴¹クルン語^L (Kulung; *LSI* Kūlung) 【ソタン語 (Sotang) を含む】, ⁴²ナチエリン語^L (Nachhering; *LSI* Nāchherēng), ⁴³チュクワ語 (Chukwa), ⁴⁴西メオハン語 (Western Meohang), ⁴⁵東メオハン語 (Eastern Meohang), ⁴⁶チャムリン語^L (Chamling; *LSI* Chāmling) 【=ロドン語 (Rodong; *LSI* Rōdōng)】, ⁴⁷ポルマチャ語 (Polmacha), ⁴⁸プマ語 (Puma), ⁴⁹サンパン語^L (Sangpang; *LSI* Sāngpāng), ⁵⁰バンタワ語 (Bantawa; *LSI* Bontāwā), ⁵¹ドゥンマリ語^L (Dungmali; *LSI* Dūngmāli), ⁵²ワリン語^L

4) ヤッカ族とリンブ族の敬称はそれぞれデワン (Dewan) とスッバ (Subba) である。

(Waling; *LSI* Wāling), ⁵³ヤンプ語 (Yamphu), ⁵⁴ヤンベ語 (Yamphe), ⁵⁵北ロルン語^L (Northern Lorung [*Lohorong*; *LSI* Lōhōrōng]), ⁵⁶南ロルン語^L (Southern Lorung [*Lohorong*; *LSI* Lōhōrōng]), ⁵⁷ヤッカ語 (Yakkha)^L [=ヤカ語 (Yakha; *LSI* Yakhā)], ⁵⁸ルンバ・ヤッカ語 (Lumba-Yakkha), ⁵⁹チンタン語^L (Chhingtang; *LSI* Chhingtāng), ⁶⁰ムガリ語 (Mugali)^L [=ランビチョン語 (Lambichhong; *LSI* Lambichhōng)], ⁶¹ベルハリヤ語 (Belhariya), ⁶²アトパリヤ語 (Athpariya), ⁶³パンドウワリ語 (Phangduwali), ⁶⁴チュルン語 (Chhulung) [=パンジュ語 (Phanju)], ⁶⁵チャッタレ・リンブ語 (Chhatthare Limbu), ⁶⁶リンブ語^L (Limbu=*LSI*), ⁶⁷サーム語 (Saam), ⁶⁸リンキム語 (Lingkhim), ⁶⁹ディマール語^L (Dhimal; *LSI* Dhimāl)。なお、この外にチョスクレ語 (Choskule), ドルンケチャ語 (Dorungkecha) とカンドン語 (Khandung) も挙げられるが、前の2言語はティルン語の、最後の言語はダウンマリ語の下位方言に過ぎないかもしれないとされ、ソタン語もその話者は独立した言語であると主張するが、一般にクルン語の方言とされている。

Hansson は、ワリン語を別個の言語に数えているが、現在のワリン語は完全に「バンタワ語化」され、その方言となってしまう（つまり言語としては死滅している？）という。Hodgson のワリン語資料 (= *LSI*) は、それがダウンマリ語に近い言語であり、当時バンタワ語との「2変種併用 (Diglossia)」状況を示唆していると述べている⁵⁾。

LSI には、カンブ語方言として、この外にバラリ語^L (Balali; *LSI* Bālāli) とルンチェンブン語^L (Rungchhenbung; *LSI* Rūngchhēnbūng) が挙げられているが、ハンソンは、前者は西メオハン語に、後者はバンタワ語の北部方言に相当する可能性があるとしている。N. K. Rai も、彼の記述したバンタワ語方言が Hodgson (= *LSI*) のルンチェンブン語に近いと述べている。

Hodgson 及び *LSI* は、ボンタワ [=バンタワ] をルンチェンブン、チンタン、ワリンとランビチョンの4下位部族またはその言語の総称として挙げているが、1970年代以降、別個の言語、それもライ族の間で共用語 (lingua franca) として広く使用されている言語として取り上げられるようになった。

ライ語域の西辺で話されているタミ語、スンワル語とハユ語の話者は、伝統的にはライ族と認められていない。しかし、現在ではスンワル語はライ諸語に数えられてい

5) C. A. Ferguson [1959] の用語では、「2変種併用」とは、同じ言語社会において同じ言語の2つの変種（通常は高変種と低変種）が異なる社会的機能で使い分けられている状況を指すものである。J. A. Fishman [1971] は、これを拡大して、2つの言語の場合にもこの用語を使用している。ここでは、後者の、「2言語併用」の意味で使用されている。

る。また、ハユ語も、チェパン語との共通要素の存在が指摘されるが、ライ語群の言語と近いかにそれに属する言語とされるようになっていく。歴史的には、タミ語とハユ語はライ語域の辺縁部で話されていた非ライ語系言語の数少ない残存言語であるとも考えられる。

伝統的に「キラント族の10部族」(Das Kiranti) とされるが、現在のライ族には、遙かに多くのサブ・カースト (sub-caste=thar) または下位部族 (ライ族出身の言語学者 Rai は103の下位部族名を挙げている) が知られており、従来ライ語の諸方言あるいはライ語群の言語とされた変種名はいずれもこのいずれかの部族名であった。しかし、ライ族の言語数については一定せず、Hodgson と LSI は16種を挙げ、その後、10種ほど、30種ほど⁶⁾ といった数字が挙げられていた。ここでは、この地域の広範な方言調査の結果を分析整理した Hansson の見解⁷⁾ に従っているが、ライ族の下位部族として知られていても、その居住地も言語も未調査のものがあり、また、ハリセダダ (Halisedanda) 連丘地帯にはまだ未知の言語が話されている可能性があるとして Hansson は述べている。その上、彼の挙げた言語中サム語、チュクワ語、リンキム語とチンタン語は “nearly extinct(?)” と、ワリン語とボルマチャ語は “extinct?” との注記があるが、文字通りに解釈すると、少なくとも後の2言語はその存在自体に疑問があることになる。彼の言語認定基準についても今後異論の出る可能性がある。従って、ここで挙げた言語数は流動的であるといわざるを得ないのである。

一方、リンブ語は、伝統的にパンタレ (Panthare) (標準的方言)、ヤングロッケ (Yanggroke), ペダッペ (Phedappe), チャッターレ (Chhatthare), タプレジュン (Taplejung) の5方言 (A. Weidert & B. Subba [1985] はヤングロッケ方言をパンタレ方言に分類している) からなる比較的均質な言語とされており、その主要分布域も伝統的なリンブ語域 (アルン川の東のコシ県とメチ県) に限られている。Hansson は、チャッターレ方言を他のリンブ語とは別の言語とし、更に、チンタン語、ムガリ語等の10種のライ族の言語及びヤッカ語をリンブ語と同じ下位語群に分類している。

歴史的には、おそらく19世紀の初頭頃までは、ライ族も今より少ない下位部族に分

6) Rai [1985] は、これまでにライ語系言語数に関する言及を列挙しているが、それによれば Northey, W. B. and C. J. Morris, *The Gurkhas, their manners, customs and country* (London, 1928) は10種とし、Dahal, B. M., *A description of Nepali, literary and colloquial* (Ph. D. dissertation, Univ. of Poona 1974) と W. Winter (私信) (註7参照) は三十数種としているという。しかし、一般にライ語系言語に言及する場合には、言語数について具体的な数字を挙げない方が多いようである。

7) Hansson のライ・リンブ【=キラント】語系言語の分類について、Winter は、書簡中で彼の見解に「幾つかの細部の除き、全面的に賛成である」と述べている。幾つかの細部はどこを指すのか不明であるが、Winter が Hansson の分類 (と言語認定) を支持していることは明らかである。

かれ、その居住地域もほぼ下位部族毎にほぼ一定の範囲内に収まっていたという状態(一部の下位部族名は同時に地名でもある)が想定されるが、その後主として南と東への移住が繰り返された結果ライ族の下位部族の分布は現在のように極めて錯綜したものとなり、その移住先でリンブ語も含む周辺言語の影響を受け、あるものは大きく変化し、あるものは周辺の有力言語に吸収されて消滅したといった事態が想定される。

ライ語群とリンブ語群以外の言語は、タミ語とディマール語の2言語である。

ヒマラヤ諸語とされる最後の2言語は、インド北東部、シッキム(Sikkim)と西ベンガル(West Bengal)両州の⁷⁰レプチャ語^L(Lepcha=LSI)【=ロン語(Rong; LSI Róng)】と⁷¹トト語^L(Toto; LSI Tōtō)である。

2.2. 詳 説

2.2.1. インド北西部

2.2.1.1. ヒマチャル・プラデシュ州(Himachal Pradesh)

2.2.1.1.1. ラホール=スピティ地方(Lahaul-Spiti district)⁸⁾

ラホール=スピティ地方は、1960年にラホールとスピティの両地方が合併されてきたものである。この地方は、東から西へスピティ・テヘシル(tahsil)、ラホール・テヘシルとウダイプール・サブテヘシル(Udaipur sub-tahsil)の3つの行政区分からなり、その総面積12,210 km²で、総人口32,063人(1981)で、人口密度は1km²当たり僅か2人に過ぎない。この地方は、北は、バララチャ(Baralacha)山脈を隔てて、ジャンム=カシミール州(Jammu and Kashmir)のラダク(Ladakh)地方と接し、東は、中国チベット自治区と、南から西にかけては、同じヒマチャル・プラデシュ州のキナウル(Kinnar)、クル(Kulu)、カンラ(Kangra)及びチャンバ(Chamba)の諸地方と接しているが、周囲はいずれも峻険な山脈群で他の地域と隔てられている。この地方に入る整備された道路は、クル地方からロタン(Rohtang)峠(海拔3,915m)を越える道路しかなく、ラホール・テヘシルからスピティ・テヘシルへ抜けるにはクンザム(Kunzam)峠(海拔4,500m)を更に越えなくてはならないという。このような地理的環境のから1年のうち半年は雪に閉ざされるため、この地域の現地調査の可能な期間は極めて短い。

スピティ川流域に分布するチベット語スピティ方言を除けば、この地方のチベット・ビルマ語系言語は、いずれもラホール地方を北から南へ流れ、ついで大きく湾曲

8) ラホール・スピティ地方のチベット・ビルマ語系言語に関する情報は、主に、S. R. Sharmaの諸論文及び私信と『ラホール・スピティ地方の村一覧』(1981年の国勢調査に基づいた資料であるが、出版年不明)と[D. D. SHARMA 1982]を参照する。

して東から西へ貫流するチャンドラ (Chandra) 川流域 (地域名: ランロ Ranglo), 北から南へ流れ, タンディ (Tandi) でチャンドラ川を合流するバガ (Bhaga) 川流域 (地域名: ストット Stod [ダルチャ (Darcha)→ケロン (Keylong, Kyelong, Kelong)] とガラ Gara [ケロン→タンディ]), この合流点から下流のバガ=チャンドラ川【=チェナブ (Chenab) 川】流域 (地域名: パタン Paṭan, Paṭtan, Pattan) 及びその支流流域で話されている。

2.2.1.1.1.1. ブナン語 (Bunan, Bunnan, *LSI* Bunān; Gahar, Gāri, Gār, Gar, *LSI* Gāhri)

ブナン語は, チベット語のトット方言域に接し, バガ川下流域のガハル (Gahar, Gār) 谷と呼ばれる地域の39カ村 (上ケロン村, 下ケロン村, ゴザン Gawzang 村, カルダン Kardang 村等) で話されている言語である。この地方の行政上の中心地はケロンである。この言語域は, ラホール・スピティ地方のラホール・テヘシルに入る。D. D. Sharma [1982] は, 現地の地名を取って, この言語をガル語 (Gāri) と呼んでいる。【母語人口: 3,581人 (1981)】⁹⁾

2.2.1.1.1.2. マンチャト語 (Manchad, Manchaṭi, *LSI* Manchāṭi; Paṭni, Paṭtani, *LSI* Paṭni):

マンチャト語は, バガ川とチャンドラ川の合流点にあるタンディからチェナブ川沿いにティロット (Thirot, Tirot) までのパタン谷 (Paṭan Valley) (幅1.5哩から4哩) と呼ばれる地域の66カ村 (タンディ村, ジョブラン Jobrang 村, ジャハルマン Jahalman 村等) で話されている言語で, この言語域は, ラホール・スピティ地方のラホール・テヘシル (計45カ村) とウダイプール・サブ・テヘシル (22カ村) に入る。この言語は, この地方の公用語 (lingua franca) でもあるという。この言語の話者は, トット方言の話者からは “Manchad” と, ラダク方言の話者からは “Karjap” と, ブナン語の話者からは “Melokpa” と呼ばれている。なお, D. D. Sharma [1982] によれば, この同じ地域でインド系 (Indic) の言語であるダグ語 (Dāgi) が話されているという。また, “Suangla” と自称するヒンドゥー教徒 (ブラーマン) の言語と仏教徒の言語には音韻・文法・語彙のすべての面で多少の差異が認められるという。S. R. Sharma によれば, この地域のマンチャト語の話者は, ほとんどが仏教徒で, Suangla は僅かであるが, 逆に, チャンバ・ラホール語域 (下記) では, Suangla

9) 以下各方言域または言語域の村の数には, 人口零の村は含めていない。また, 人口の項にはその地域の村の人口の単純合計を挙げてある。実際には, 当該言語以外の言語を母語とする者がその中に含まれている場合もあり得る。

が多数を占めているという。従って、チャンバ・ラホール語は、マンチャト語の地域方言 (regional dialect) というより、社会方言 (social dialect) であるという。【母語人口：7121人 (1981)；ただし、この中にダグ語を母語とする者が含まれていれば、この数字をそのままマンチャト語の母語話者数とすることはできない】

チャンバ・ラホール語 (Chamba Lahaul, *LSI Chamba Lāhūḷi*) は、ティロットからウダイプールまでの地域の47カ村で話されている言語であるが、S. R. Sharma も D. D. Sharma も、マンチャト語の一変種としている。この地域は、かつてチャンバ藩王国に所属していたことからこの名称が付けられたという。【母語人口：4,687人 (1981)】

2. 2. 1. 1. 1. 3. ティナン語 (Tinan=*LSI*, Tinnan, Tinnani; Gondhla, Gundhla, Gondla, *LSI Gōndlā*)

ティナン語は、ランロ語域に接し、チャンドラ川沿いにタンディに至るまでの地域の15カ村(ダラン Dalang 村, トラン Thorang 村, ゴンドラ Gondhla 村等)で話されている言語である。この言語域は、ラホール・スピティ地方のラホール・テヘシルに入る。Tinan は、「水瓶」の意味で、この地域を指す名称であるという。【母語人口：1833人 (1981)】

2. 2. 1. 1. 1. 4. ランロ語 (Ranglo, Rangloi, *LSI Ranglōi*)

LSI は、Tinan, Gōndlā と Ranglōi を同一言語の異名としているが、Gōndlā はティナン語域の一村名に過ぎず、Ranglōi, 即ち、ランロ語は、実質的にティナン語の方言とみなせるが、土地の人々は両者を区別しているという。従って、もし言語学的規準のみに照らせば、両言語は同一言語の方言とされる可能性がある。

ランロ語は、チベット語のコクサル方言域に接するチャンドラ川の下流域の4カ村(コリン Khawling 村, シャシン Shashin 村, ゴムパタン Gompathang 村及びロプサン Ropsang 村)で話されている言語である。ランロ語域は、ラホール・スピティ地方のラホール・テヘシル (Lahaul Tahsil) に入る。Ranglo は、「峠の近く」を意味する地理的名称である。【母語人口：330人 (1981)】

このヒマラヤ諸語地域の北側と東側では、次のチベット語方言¹⁰⁾が話されている。

1. スピティ (Spiti; 現地名 Piti) 方言：スピティ川流域の47カ村。
2. ラホール【=ラフル】 (Lahaul, Lahul) 方言¹¹⁾：

10) パトナム方言を除いたヒマラヤ地域のチベット方言全体については、[西 1986]を参照されたい。

11) この方言を Konow [1909] 及び G. de Roerich [1933] は、いずれもラフル【=ラホール】方言と呼んでいる。西 [1986] は、この方言をチベット語の西部改新的方言 (Western Innovative Dialects) のひとつに分類している。

1. トット (Tod, Tod Bhoṭi, Bhoṭi) 方言=コロン (Kolong, Kulong, Kulang) 方言 (本来のラホール方言): バガ川の上流域のトット谷 (Tod Valley) 地域のコリン (Kawring) 村, ティヌー (Tinoo) 村, コロン (Kolong) 村, ケレド (Keled) 村等19カ村 (ラホール・テヘシル); この方言域の北では、やはりチベット語ラダク方言が、バガ川下流域では、ブナン (Bunan) 語が話されている。【母語人口: 1714人 (1981)】
2. コクサル (Khoksar, Koksar) 方言¹²⁾: ロタン峠の北側, チャンドラ川下流域 (チェナブ川との合流点寄り) のコクサル村及び周辺のタリン (Talling) 村, ダンプグ (Dampug) 村とヤリコクサル (Yarikhoksar) 村の3カ村 (ラホール・テヘシル); この方言域の東ではスピティ方言が、西ではランロ語が話されている。【母語人口: 658人 (1981)】
3. パトナム (Patnam, Patnam Bhoṭi) 方言: ウダイプール (Udaipur) でチェナブ川と合流するミヤル・ナラ (Myar Nalah)【=ミヤッド・ナラ (Miyad Nala)】川を 30km ほど遡った地域のカンジャル (Khanjaru) 村, チャリン (Chhaling) 村, ティンラット (Tingrat) 村, カルパット (Karpat) 村, チムラット (Chimrat) 村, ガリ (Ghari) 村, シリン (Sliling) 村とトゥムル (Tumru) 村の8カ村 (ウダイプール・サブテヘシル) で話されている¹³⁾。なお、この地域の住民の一部はラダク (Ladakh) から移住して来たとのことである。従って、暫定的にラダク方言に分類しておくが、この方言の資料は全く公刊されていない。【母語人口: 1,155人 (1981)】

2. 2. 1. 1. 2. クル地方 (Kullu/Kulu district)

北はラホール=スピティ地方に東はキナウル地方に接するこの地方のチベット・ビルマ語系言語は、つぎのカナシュ語だけである。

2. 2. 1. 1. 2. 1. カナシュ語 (Kanash, Kanashi, LSI Kanāshī; 自称 Malani, Mālani, Malāni)

A. H. Diack [1896] と LSI に記録されているこの言語は、ビヤス (Beas/Bias) 川沿いの深い谷間にある孤立した一小村, マラナ (Malana, LSI Malāna) 村で現在も話されている。上記『言語の手引』(1972) では、“Malani” と “Kanashi” の2つ

12) Konow [1909] は、この地域の方言も含めてラフル方言としているが、Roerich は、この方言にラフル方言の下位区分としてコクサル方言の名称を与えている。S. R. Sharma によれば、トット方言とは近いが、幾つかの音声的な差異が認められるとのことである。また、両方言話者間の日常的な接触はないという。

13) この方言名は [西 1986] には記載されていない。

の言語名で登録されている。標高約 3,200 m に位置するマラーナ村は、その最も近いジャリ (Jari) 村からも 20 km 程離れており、1 年のうち半年は雪に閉ざされてしまうといわれる。また、地理的に周辺地域と隔絶しているだけでなく、この村の風俗習慣も全く独自のものであるといわれる。1989年発行の『ザンスカル=ラダクまでのトレッキング・ルートを含むクル=マナーリへの観光客用ガイド (*Tourist Guide to Kullu-Manali, including Trekking Routes to Zaskar-Ladakh*)』(Nest & Wings (India), New Delhi) によれば、村の人口は、1,004人となっているが、この数字が同時にカナシュ語の母語話者数を表すものか否かは不明である。【母語人口：563人 (1961)】

2. 2. 1. 1. 3. キナウル地方 (Kinnaur district)¹⁴⁾

キナウル地方は、東から西へハンラン (Hangrang, Hungrang)・サブテヘシル、フー (Poo, Pooh [fu:])・テヘシル、モラン (Morang, Moorang)・テヘシル、カルパ (Kalpa)・テヘシル、ニチャル (Nichar)・テヘシルとサンラ (Sangla)・テヘシルの6行政区分からなっている。この地方の77カ村 (無人村を除く) の村々は、140 km ほどにわたって、この地方を分断して流れるサトラジ (Sutlej, Satlaj, Satluj) 川とその支流であるスピティ川、ロパ (Ropa) 川やバスパ (Baspas) 川等の流域に点在している。

1981年の国勢調査によれば、キナウルの全人口は59,547人となっている。このうちで、そのほとんどがインド語系 (Indic) (インド=ヨーロッパ語系 Indo-European) を話すと考えられる下層カースト集団 (*District Census Handbook* では“指定カースト (Scheduled Castes)”) に分類されている) は、全人口の10.63%であるので、おそらくこれを除いた残りの53,200人の大部分がカナウル語群の言語を話し、その一部がチベット語のニャム (カット) 方言を話すものと思われる。参考までに、1961年の人口調査に基づく母語人口統計をみると、この州全体のカナウル語話者は、45,379人で、そのうちの42,515人がキナウル地方の住民である。ちなみに、チベット語話者数は州全体で12,661人に上るが、キナウル地方のチベット人は552人に過ぎない¹⁵⁾。一方、T.G. Bailey [1909] は、「カナウル地方は、バジャール州にあるが、同州は3800平方

14) カナウル地方のチベット語名について、[CUNNINGHAM 1844] には、“Kunu is the ordinary Bhootee for Kunawar, and Kunupa or Kunpa means Kunawaree, or a man or thing of Kunawar” と記されているが、[NEETHIVANAN 1976] には、チベット語でこの地方が“Kuni, K'una” または “K'unu” と呼ばれるとされている。H. A. Jaschke の『チベット語・英語辞典』にも張 (主編) の『蔵漢大辞典』にも、“Khu-nu” しか記載されていない。Jaschke の辞典では、“Khu-nu” は、“Kunawar, also Bissáhar [=Bushahr], country on the upper Sutledj, bordering on Tibet, and inhabited in the northern part by Tibetans” と説明してあるが、『蔵漢大辞典』では、「(2)昆論, 庫陸, 阿里地区一地名」と記載されている。多分、“Khunu” は、チベット自治区の西部を含めたかなり広い地域を指す地名であったのであろう。

哩の面積と84,000の人口がある。カナウル人はほぼ20,000人を数える」と述べている。この数字をみると、キナウル語話者の比率が4分の1以下であるが、当時キナウル地方はバシヤール (Bashahr) 藩王国の一部に過ぎなかったからであろう。

D. D. Sharma [1988] によれば、このキナウル地方の言語は、チベット・ビルマ語系のチベット語のニヤム (カット) 方言及びヒマラヤ諸語の外に、インド系の言語のさまざまな変種 (variety) が下層カースト集団であるハリジャン (Harijan) により話されているという。この変種は、シムラ地方の同様な下層カースト民のそれに近く、その話者であるハリジャンは下キナウル地方に多く、上キナウル地方、殊にロパ、ギャボン (Gyabong) とスンナム (Sunnam) のハリジャンは、テポール語 (Thebor) か、その地方の上層カースト集団の言語の地方変種 (方言) を話す。他方、下キナウル地方では、ハリジャンは標準カナウル語を上手に話せるが、自分達の間ではインド系言語の変種を常用するという。

この地域のチベット語方言以外のチベット・ビルマ語系言語は、従来この地方の名称がカナウル【Kanaur, Kānāwār, Kanor, Koonawur, Kunāwar, Kunawar, Kanānar, *LSI* Kanawar】であったことからカナウル語【Kanaur; ヒンディー語/コチ語では, (Bailey) Kānaurī; (*LSI*) Kanāwārī; (その他) Kanāwari, Kunawaree, Kanauri; (現在) Kinnauri; カナウル語では, (Bailey) Kānōriñ, Kanoring; Knorin または Bailey Kānōriñ Skad, Kānōreanū Skad; Kanoreanu Skad, Kanoring Skadd: (現在) Kinnaurayanuskad】と呼ばれて来た。ここでも、この呼称を採用しているが、いずれは、インドでの慣用に従って、キナウル語と呼ぶべきであろう。

Bailey は、このカナウル語を本来のカナウル方言、下カナウル方言、テポール方言とチトカル方言 (Bailey はこの方言に名前を付けていない) の4方言に分けている。一方、D. D. Sharma [1988] は、サラハン (Sarahan, Sārāhāñ) の3 km 先からモランまで、即ち、ニチャル・テヘシルと、チトカル (Chhitkal) 村、ラクチャム (=ラクチャム) (Rakchham, Rākshām) 村の2カ村を除くサンラ、カルパとモランの諸テヘシルの大部分及びフー・テヘシルの数カ村で話されている言語をキナウル語または

15) 同州の他の地方におけるチベット語話者数は、カンラ地方: 2,864人, クル地方: 2,439人, シルモール (Sirmaur) 地方: 1,581人, チャンバ地方: 1,555人, ラホール・スピティ地方: 1,448人, シムラ (Simla) 地方: 1,122人, マハス (Mahasu) 地方: 574人, マンディ (Mandi) 地方: 555人, ビラスプール (Bilaspur) 地方1人となっている。『言語の手引』(1972) によれば、1951年の国勢調査までは、チベットのチベット語方言はインド国外の言語に分類されていたが、1961年の国勢調査でインドの言語に含めるようになったという。また、中国とインド国境地帯のインド側の一部のチベット・ビルマ語系言語は、まとめてボティア語-不特定 (Bhotia-unspecific) に分類してある。ニヤム (カット) 方言や後述するピトラガル地方のランカス語, ダルマ語等は、言語名を特定せずに、すべてボティア語に分類されているのであろう。

標準キナウル語とし、Bailey の本来のカナウル方言 (Kanaur proper) 【=上カナウル方言 (Upper Kanaur)】と下カナウル方言 (Lower Kanaur) を区別しない。両者は、音韻構造及び形態構造に幾つかの目立った差異があるが、基本的にはひとつのグループであるとしている。また、チトカル語は、下キナウル語の別の変種であり、モラン・テヘシルのネサン村、クノ村及びチャラン村で話されている変種と近い関係があると述べられている。一方、テボール語について、「このグループの地域は、カナム (Kanam) からフー (いずれもフー・テヘシル) まで、殊に、リップパ、ジャンギ、アスラン、ラバン (Labang, Labrang)、カナム (フー・テヘシル)、サンナム (=シャンナム)、ナムギャ (Namgya, Namgia) (フー・テヘシル) とシャソの諸村である」[D. D. SHARMA 1988] と述べ、更にこの言語が語彙的にも構造的にもその地域のチベット語方言にもっと近いとしている。一般に、D. D. Sharma や S. R. Sharma の論著にはしばしばこのような表現がみられるが、マンチャト語にせよ、カナウル語にせよ、少なくとも文法 (統語・形態) 構造や基礎的語彙はチベット語方言とはかなり異なっている筈である。

2. 2. 1. 1. 3. 1. 標準カナウル語 (Standard Kanaur)¹⁶⁾

サラハン (シムラ地方) の2哩先 (現在のシムラとキナウルの両地方の境界) からジャンギ (Jangi, Jāngī) (モラン・テヘシル) までのサトラジ川の流域で話されているが、タランダ (Taranda, Tārāṇḍā) (ニチャル・テヘシル) までは川の南岸でのみ話されている。

下カナウル (Lower Kanaur, Lower Kinnauri) 方言は、タランダまでのサトレジ川の北岸で話されている。この方言は標準カナウル語とあまり違わないが、コチ (Kochi) 語 (インド語系) の単語 (借用語?) をもっと使用するといわれる。

2. 2. 1. 1. 3. 2. テボール語 (Thebor, Thëbör skad, Thebarskad; Theborskad, Theburskud, LSI Tibarskad)

リップパ (Lippā, Lippa) (モラン・テヘシル)、アスラン (Āsrañ, Asrang) (モラン・テヘシル)、カナム (Kānām, Kanam) (フー・テヘシル)、サンナム (Sunnam, Shunnām, Sannam) (フー・テヘシル) とシャソ (Shāsō, Shaso) (フー・テヘシル) の村々で話されている。この地域から10哩以内に住むカナウル人がこの方言を聞いても、半分以上理解できないという。テボール語域より更にサトラジ川を遡ると、チベット語のニャム (カット) 方言域に至る。

16) キナウル地方のヒマラヤ諸語については、主に、[BAILEY 1909, 1915], [NEETHIVANAN 1976], [K. NEGI 1982] と [D. D. SHARMA 1982] を参照する。

2.2.1.1.3.3. チトカル語 (Chhitkal, Chitkal, Chītkhūli, Chitkuli, Chhitkuli, Chitkali)

バスパ川流域のラクシャム村とチトカル村で話されている。カナウル語であることは確かであるが、標準カナウル語とは相当に異なっており、普通のカナウル人には全く理解できないといわれている。

この地方のチベット語方言として既に *LSI* に挙げてあるニヤム (カット) 方言 (Nyam [skad], Nyamskad, *LSI* Nyamkat) があるが、この方言は、ハンラン村 (ハンラン・サブテヘシル)、クノ (Kuno) 村、チャラン (Charang) 村、ネサン (Nesang) 村 (以上モラン・テヘシル) 及びその他の数カ村で話されている。

2.2.1.2. ウッター・プラデシュ州

ウッター・プラデシュ州北西部のチャモリ地方とピトラガル地方及び隣接するネパールのマハー・カリ県等の辺境地帯に住むヒマラヤ諸語の話者は、一般にボティア (Bhotia) 【=ボテ (Bhote)】族に分類され、その言語もボティア語 (方言) と呼ばれている。『言語の手引』(1972) でこれらの言語名が別項目として挙げていないのは、おそらく全部をまとめてボティア語に分類したためであろう。

2.2.1.2.1. チャモリ地方

2.2.1.2.1.1. ランパ語 (Rangpa)¹⁷⁾

チャモリ地方を北から南に流れてガンジス (Ganga) 川に流入するアラクナンダ (Alaknanda) 川とその上流及びアラクナンダ川とジョシマツト (Joshimath) で合流するダウリ・ガンガ (Dhaulī-Ganga) 川の流域で話されている。ランパ族の居住村は夏村と冬村に分かれている。夏村は、アラクナンダ川の上流のマーナー (ランパ語 /ma:na:/; ガルワル語 Mānā) 村とダウリ・ガンガ川上流のソンサ (ランパ語 /sōsa/; ガルワル語 Nīti) 村、シャシャグ (ランパ語 /syəsyag/; ガルワル語 Gamshāli) 村及びブワン (ランパ語 /bwā/; ガルワル語 Bāmpā) 村の4カ村で、いずれも海拔 3,200 m~3,400 m に位置する。夏村よりも高度が低く、ずっと南にある冬村は、12カ村に分かれ、両川の合流点とアラクナンダ川とピンダル (Pindar) 川の合流点の中間に位置している。ブワン村の冬村はひとつであるが、他の村には複数の冬村がある¹⁸⁾。

17) [ZOLLER 1983] による。

18) ランパ語も、次のランカス語等と共にボティア語、その話者はボティア族とされる。Sherring [1906] は、この地域のボティア族について、「バドリナット (Badrinath) の聖なる寺院にほど近いマナ (mana) 【=マーナー】峠近くの者達とニティ (Niti) 【=ニーティ】峠近くの者達はトルチャ (Tolcha) とマルチャ (Marcha) として知られているが、ジョハールのウンタドゥラ (Untadhura) 峠近くの者達はショカ (Shoka) で、その中にトルチャとマルチャも幾らかいる。ボティア族の西部支族はこれらの人々からなっており、…」と書いている。

2. 2. 1. 2. 2. ビトラガル地方

次のランカス語、ダルマ語、チャウダンス語及びビャンス語の4言語については、*LSI* 以後言語学者による記録はない。しかし、ランカス語を除いた3言語のインド側における分布状況については、R. P. Srivastava [1967] 等の文化人類学者によりかなり詳細に記録されており、*LSI* の記述がほぼ裏付けられている。ランカス語については、既に死語となっていないまでも、消滅寸前であろうと思われる。ネパール側に関しては、ビャンス語を除き『エスノローグ』(1984) の記述は信頼できるとは思われない。ビャンス語は [FÜRER-HAIMENDORF 1975] 及び [MANZARDO, DAHAL & RAI 1976] でその分布域が明らかにされている。後者では、「ビャンシは、【カルナリ (Karnali) 県】フムラ (Humla) 郡と【セティ (Seti) 県】バジャン (Bhajan) 郡だけでなく、クマオン (Kumaon) 丘陵一帯に住む民族集団の一部である」とされているが、前者では、フムラ郡のビャンス族について、その本拠地は【マハー・カリ県】バイタディ (Baitadi) 郡【ダルチュラ (Darchula) 郡の誤り】のティンカル (Tinkar)、チャンル (Changru) 等の村々にあり、ティンカル村とチャンル村のビャンス族はフムラ郡と伝統的な繋がり【同郡のナッラ (Nalla) 村を祖先の地とし、彼らの信仰する地方神の廟が存在】があると述べられている。また、ナッラ村にほど近いシャンダ (Syanda) 村とサンタ (Santa) 村にはビャンシのコミュニティがあり、下フムラ地方にも幾つかのビャンシの村があるという。Fürer-Haimendorf の陳述が正しければ、マハー・カリ県以外のビャンシは、その多くが彼らの主要生業である交易や巡礼等の理由で一時的に滞在しているに過ぎないということになる¹⁹⁾。

LSI にも示唆されているように、ランカス語を除く3言語、特にチャウダンス語とビャンス語は同じ言語の方言である可能性がある。

Srivastava [1967] は、この地域全体のポティア族の人口を約20,000人と推定しているが、既にランカス語を話さなくなったジョハールの約10,000人を除き、残る10,000人ほどがヒマラヤ諸語を母語とすると推定できよう。

これらの言語のインド側での分布状況は主に *LSI* と Srivastava [1967] に依拠するものである。

2. 2. 1. 2. 2. 1. ランカス語 (Rankas=*LSI*; *LSI* Saukiyā Khun/Khan)

LSI では、上ジョハール (Malla Johar/Juhár) と上ダンプール (Malla Danpur/

19) Zoller [1983] は、「クマオン地方のウツタル・プラデシュ州の最北東端には、彼らが居住する谷の名を取って呼ばれる3つのポティア、ダルミア、チャウダンスとビャンシが住んでいる」と述べている。また、S. R. Sharma (私信) は、これらの4言語が今もこの地域で話されているという。なお、この地域全体はボット (Bhot) と呼ばれるという。

Dánpur)【ジョハールの南西】の数カ村(当時5カ村)【Srivastava はこれにジョハールの南のゴリパット(Goriphat)を加える】で話されているとされる。この地域は、北と西は同州のガルワル(Garhwal)地方に、東はチベットとダルマ語域に接する。[ATKINSON 1882]では、上ダンプールはクマオン(Kumaon)地方のダンプール・パルガナ(parganah)の8つのパッティの1つで、上ジョハールはジョハール・パルガナの3つのパッティの1つである。しかし、Srivastava が1953年に調査した際には少なくともジョハールではこの言語は既に話されておらず、ほとんどの人々がジョハールでそのような言語が話されていたとは信じなかったという。一人の老人だけがかつて移住の途中でゴリパットを通過する際に父親がそのような言語を話すのを聞いたと認めたと述べている。一方、M. S. Randhawa [1970]は、この地域のボティア(Bhotia)族に関するC. A. Sherring [1906]の記述が、多少訂正するだけで、今でも通用すると述べ、Sherring から該当箇所をそのまま引用しているが、言語に関してRandhawaの情報がどれほど信頼できるかは疑問である。従って、ランカス語は、該当地域のどこかで話されている可能性もあるが、既に死滅している可能性もあるとしておく。

2.2.1.2.2.2. ダルマ語(Darma, Dárma, Darmia, Darmiya, *LSI* Dārmiyā)

*LSI*では、上(Malla)ダルマ地区と下(Talla)ダルマ地区で話されているとされている。イルグナジュン(Yirgnajung)山を最高峰とする連山に隔てられたこの地域の東側がビャンス語域とチャウダンス語域である。Atkinson [1882]では、上と下ダルマはいずれもクマオン地方のダルマ・パルガナの4つのパッティの1つである。

2.2.1.2.2.3. チャウダンス語(Chaudans, Chaudáns, Chaudangs, Chāudansi, Chaudangsi, *LSI* Chaudāngsi)

*LSI*では、ダウリ(Dhauri)川とカリ(Kali)川に挟まれ、その合流点の北に位置する南北約12哩、東西約8哩の地域のパッティ・チャウダンス(Patti Cháudans)の村々(当時約11ヶ村)で話されているとされている。Atkinson [1882]では、この地域はクマオン地方のダルマ・パルガナの4つのパッティの1つである。

2.2.1.2.2.4. ビャンス語(Byans, Byānsi, Byanshi, Byangsi, *LSI* Byāngsi)

*LSI*では、ガルワル地方の北東隅に位置するパッティ・ビャンス(Patti Byángs)の村々(当時7カ村)で話されているとされている。また、既述のように、ネパールのマハーカリ県の北西隅に位置するダルチュラ郡のビャンス(Byans)とラプラ(Rapla)の両行政村及び同郡に隣接するフムラ郡とバジャン郡でも話されている。インド側の地区は、北はチベットに、東はチベットとカリ川に、南はカリ川に、西はイルグナジ

ヒマラヤ諸語名

【言語名の後に (L) の付せられた言語は、LSI にその資料が含まれている言語である。しかし、実際には、同一言語と認められても、ここに挙げた言語は必ずしも LSI での名称と一致しない。】

(1) インド北西部のヒマラヤ諸語

1 ブナン語 (Bunan; LSI Bnnān)

【=ガル語 (Gar; LSI Gāhri)】

2 マンチャト語 (Manchad; LSI Manchāṭi)

【=パタン語 (Paṭan; LSI Paṭni)】

3 ティナン語 (Tinan=LSI)

4 ランロ語 (Ranglo; LSI Ranglōi)

5 カナシュ語 (Kanash; LSI Kanāshi)

【=マラナ語 (Malana; LSI Mālāni)】

6 カナウル語 (Kanaur; LSI Kanāwāri)

【=ミルチャン語 (Milchang; LSI Milchang/Milchanang)】

7 テボール語 (Thebor; LSI Tibarskad)

8 チトカル語 (Chhitkal)

9 ランバ語 (Rangpa)

10 ランカス語 (Rangkas=LSI)

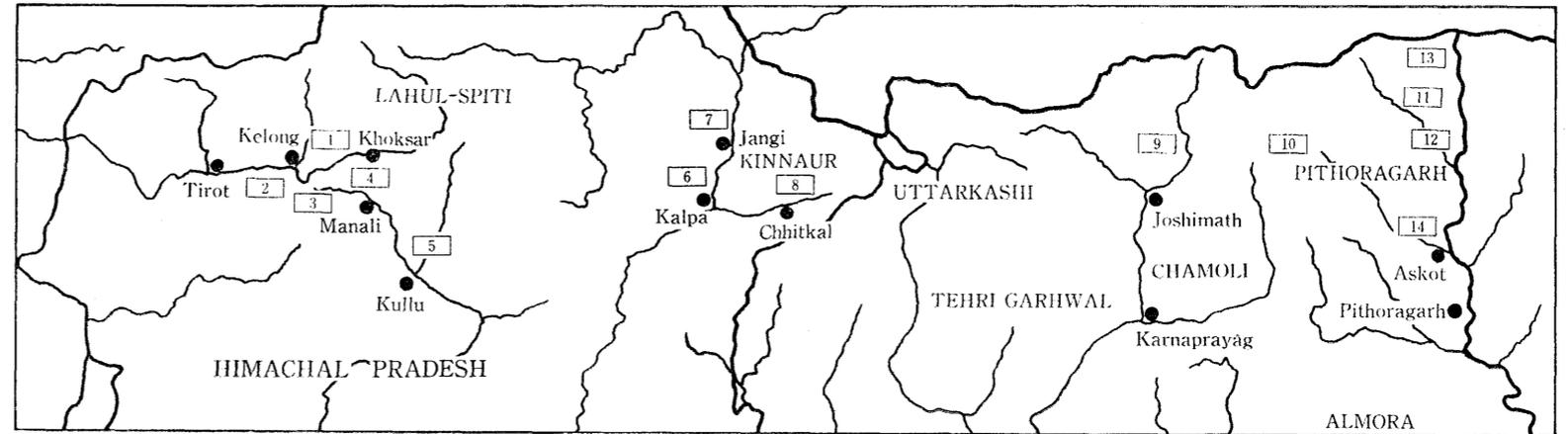
11 ダルマ語 (Darma; LSI Dārmiyā),

12 チャウダンス語 (Chaudans; LSI Chaudāngsi)

13 ビヤンス語 (Byans; LSI Byāngsi)

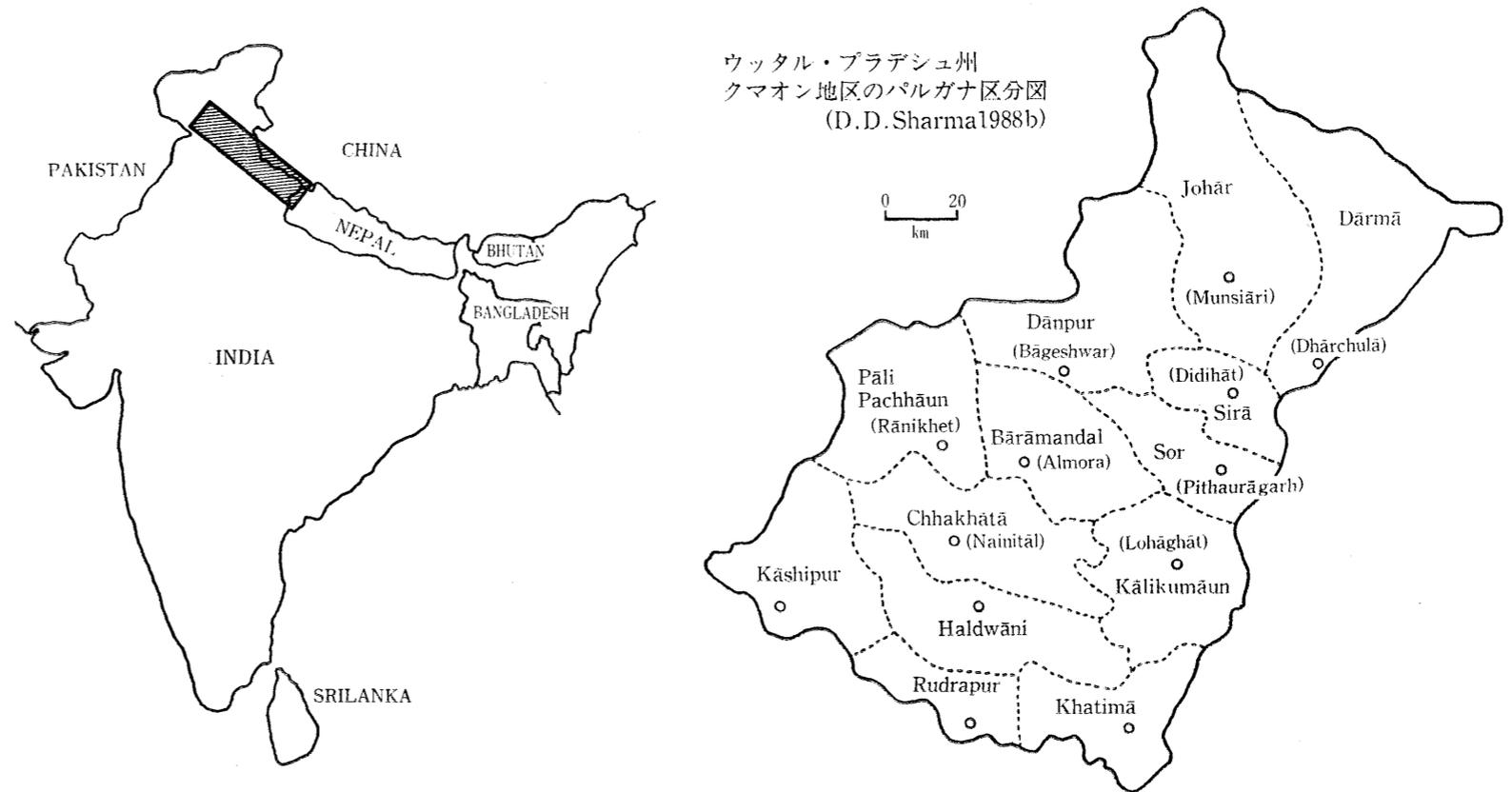
14 ラウト語 (Raut)

【=ジャングル語 (Janggal; LSI Janggali)/ラジ語 (Raji)】



ヒマラヤ諸語の分布概念図(1)

【インド北西部：ヒマチャル・プラデシュ州及びウッタル・プラデシュ州】



ウッタル・プラデシュ州
クマオン地区のパルガナ区分図
(D.D.Sharma1988b)

ユン山に連なる連山とチャウダンス地域にそれぞれ接する。Atkinson [1882] によれば、この地域は、クマオン地方のダルマ・パルガナの4つのパッティの1つである。ネパールのビヤンスの人々はビヤンス行政村のティンカル村とチャンル村を中心に住んでいるが、この行政村は、夏村であり、冬には村全体が行政・教育機関共々南のカランガ (Khalanga) 行政村へ移り住むという。

2. 2. 1. 2. 2. 5. ラウト語 (Raut, Raute, Rawati; Jangali, Janggali, *LSI* Janggali; Raji, Rāji)²⁰⁾

LSI にジャングル語と記録されたこの言語は、「アスコット・マッラ (Askot Malla) 【ピトラガル地方】のチプラ (Chhipula) の森に住む未開のバンマヌシュ (Banmanush), つまり『森の人』の話す」言語とされている。Atkinson [1882] によれば、この“Banmanush” が “Rāji” とされている。上記の『言語の手引』では “Rawati” を “Jangali” の別名として挙げている。この “Rawati” は、ネパール極西部丘陵地帯 (Far Western Hills) から西部内タライ (Western Inner Tarai) にわたる起伏に富む広い地域 (D. B. Bista [1972] によれば、セティ, カルナリ, ベリ (Bheri), ダウラギリ (Dhaulagiri) とラプティ (Rapti) の5県に跨る地域) を移動して暮らす狩猟採集民の “Raute” または “Rautiya” と同一民族であり, *LSI* のジャングル語はラウト語 (Raut) 【=ラジ語 (Raji)】と同一言語と考えられている。【母語人口: (インド) 104人 (1961)】

2. 2. 2. ネパール

2. 2. 2. 1. 西ネパールとカトマンズ (Kathmandu) 盆地

2. 2. 2. 1. 1. カム語 (Kham, Nepal Kham, Kamkura (「語」))²¹⁾

カム語は、ダウラギリ山脈の南西斜面のサニ・ベリ (Sani Bheri) 川, バリガド (Barigad) 川及びラプティ (Rapti) 川の支流の上流域に沿って散在する村々で話されている言語である。その分布域は、ダウラギリ及びラプティ両県に跨っている。Kham は、まさに言語名であり、カム語話者はマガル族のブダ (Bhuda), ガルティ (Gharti), プン (Pun) 及びロカ (Rokha) 等の下位部族 (支族) に属している。なお、このうちでもブン族が最も著名であるところからこの北部4支族を代表する呼称とし

20) 主に, [ATKINSON 1882], [REINHARD 1974] と [BISTA 1972, 1976] を参照する。

21) [WATTERS 1971a, 1975等] と [WATTERS & WATTERS 1973] による。なお、カム語 (“kamkura”) に最初に言及したのは、英国国防省刊のグルカ兵を徴募する際の手引といえる *Nepal and the Gurkhas* (London: His Majesty's Stationary Office, 1965) である。この本は、いわゆる学術書ではないが、当時としてはおそらくネパールの諸民族分布に関する最も正確な記述を含んでいたと思われる。1969年筆者がネパールを訪れた際に最も役に立った著書であった。

て使用されることがよくあるが、ブン族にはカム語話者はほとんどいないという。カム語は主にタカ (Taka) 方言で知られているが、その方言は、その分布域が地理的にカム語域の中心に当たるだけでなく、「威信の」方言と認められているという。その他にも、タカ方言の下位方言であるマイコット (Maikot) 及びルクム (Lukum) の両方言やブジ (Bhuji), マイ (Mhai), シェシ (Shesi), ガム (Gam), ニシ (Nisi) 等の諸方言が報告されている。Watters は、1973年当時のカム語話者数を約40,000人と推定している。

D. E. Watters は、これらの方言は、3つか4つの主要方言区分に分類できるとしている。この主要方言区分間の同源形式の共有率は高いが、動詞の人称接辞を含む接辞類が非常に異なるほか、動詞の一致体系等にも極めて大きな差異があり、相互に疎通しないといわれる。

2.2.2.1.2. カイケ語 (Kaike)²²⁾

カイケ語 (Kaike) は、ダウラギリ (Dhaulagiri) 県ドルパ (Dolpa) 郡のティチュロン (Tichurong) 地方のベリ (Bheri) 川左岸にあるタラコット (Tarakot) 村で話されている言語である。この村は、ゴンバ (Gompa), タランガ (Taranga), ゾン (Dzong) とトゥルパ (Turpa) の4つの主要部落と2つの小部落からなっているが、その中のゴンバ部落の住民は、チベット語方言 (おそらくティチュロン方言に近い方言であろう) を話す。

残る5部落の住民は、カイケ族と自称するが、外部の者にはタラリ族 (Tarali) として知られている。なお、対岸のベリ川右岸の丘陵の3部落にもチベット族が住み、カイケ語は、チベット語地域の中の言語島といえるものようである。カイケ族は、外部の者に対しては、近隣の有力なチベット・ビルマ語系の民族であるマガル族の係累であると主張するという。

2.2.2.1.3. チャンテル語 (Chantel)²³⁾

チャンテル語は、西ネパールのダウラギリ県ミャグディ (Myagdi) 郡のグルジャカニ (Gurjakhani), マルカバン (Malkabang), クイネカニ (Kuinekhani) 及びマンガレカニ (Mangalekhani) の4ヶ村で話されている言語であるとされているが、詳細は不明である。チャンテル語話者もマガル族を自称するという。この地域はダウラギリ山脈の南西に位置しているが、これまでのところ判明しているタマン語群の言語圏の西限は、ダウラギリ山脈の東側のカリ・ガンダキ川上流域である。

22) 主に, [SNELGROVE 1961], [FÜRER-HAIMENDORF 1975] と [FISHER 1987] を参照する。

23) B. Michaelovsky からの伝聞として [MAZAUDON 1978] の註に記されている。この言語の実例は, [HALE & WATTERS 1973] に挙げてある “sar-si-wa naku” (殺す-動作主-派生接辞【形容詞化】犬)「殺された犬」しかない。

2. 2. 2. 1. 4. マガル語 (Magar, *LSI* Māgarī, Magar, Mangar; チベット語 Mākra 「マガル人」)²⁴⁾

マガル族は、元来ルンビニ (Lumbini) 県のパルパ (Palpa) 郡とナワル・パラシ (Nawal Parasi) 郡北部一帯を伝統的な故郷とするが、1981年の国勢調査に基づけば、現在では、ルンビニ県の北部、ガンダキ (Gandaki) 県のシャンジャ (Syangja) 郡とタナフ (Tanahu) 郡、ダウラギリ県とラプティ県の一部や東ネパールの中部丘陵地帯から南の地域、殊にジャナクプール (Janakpur) 県のシンドゥリ (Sindhuli) 郡とサガルマタ (Sagarmatha) 県のウダヤプール (Udayapur) 郡を中心にした地域等、ネパール全土に広がっている。マガル族には、マガル語を母語としない者も多く、従来パルパ郡以西のマガル族はマガル語を話さないとされている。

マガル語の方言としては、ヤンチョック (Yanchok), リシン (Rising), シャジュ (Syaju), ラフ (Rahu) 等の方言名が記録されているが、いずれも村名に過ぎない。R. C. Caughley は、マガル語の方言を東部方言と西部方言に区分しているが、詳細は不明である。マガル族が古くから西ネパールの有力民族であったところから周辺の小部族にマガル族を僭称するものがあった²⁵⁾。

1961年のインドの国勢調査によれば、“Magari” 21人と“Mangari” 1136人の合計1157人のマガル語話者が西ベンガル州とアッサム地方で登録されている。【母語人口：212,681人 (1981)】

2. 2. 2. 1. 5. タカリ語 (Thakali, Thakāli, Thākāli, Thakāli; Thaksya, Tháksya, *LSI* Thāksya; 自称 /topaŋ¹/~tamhāŋ; チベット語 Thag-pa 「タカリ人」)²⁶⁾

24) 主に, [HITCHCOCK 1966], [SHEPHERD & SHEPHERD 1971], [S. SUBBA 1972], [CAUGHLEY 1981] と [南 1989] を参照する。

25) 上述のカム語, カイケ語とチャンテル語の話者は, マガル族であると称しており, 今でも文献中で区別されていない場合がある。

26) 次のマルファ語とシャン語も含めて, 主に [BISTA 1972], [MAZAUDON 1973a, 1973b, 1975], [FÜRER-HAIMENDORF 1975], [GURUNG 1980], [GAUCHAN & VINDING 1977] と [飯島 1982] による。

Mazaudon [1975] は, マルファ語とシャン語もタカリ語とし, ここでいうタカリ語をトゥクチェ方言としている。しかし, これは相互理解度テスト等の客観的資料に基づいた結論ではないようである。マルファ族及びシャン族の人々は外部の者にタカリ族であると称し, 自分達の言語はタカリ語であるというが, いわゆる正統タカリ族の人々は決してこれを認めなかった。1970年初頭, 筆者が, 当時多くの日本人登山者が宿泊したカトマンズのホテル・ラリ・グラス (Lali Guras) に滞在していた際に, ホテルの使用人であったマルファ族のヒラチャン (Hirachand) 氏族の若者が, 筆者に自分の言葉がタカリ語であるといったと聞いて, そのホテルの経営者であり, タカリ族の長老でもあった Indraman Sherchan 氏が顔色を変えて否定したのを覚えている。日頃温厚な人であっただけに筆者の方が驚いたほどであった。

マルファ語及びシャン語は, 音韻面ではタカリ語と幾つかの際立った違いがある。これについては, 『言語学大辞典』(第2巻)の「シャン語」と「タマン語群」の項を参照されたい。この2言語がタカリ語の方言か否か客観的に判断が下せるまでは別々の言語として扱う方がよいであろう。

タカリ族は、元来中部ネパールの一少数民族でありながら、チベット（中国）—ネパール—インドと続く交易路の中継地点という地理的条件をうまく利用し、一時はチベットから輸入される岩塩の専売権を保有するなどして、次第に資本を蓄積して来たが、チベットとの交易の衰退（特に1959年以降）と共に、ネパールの都市部に次第に進出し、商業民族として大きな成功を収めて来た。元来宗教的、文化的にチベットの影響下にあったタカリ族は、ネパール国内における自分達の立場を有利にすべく、脱チベット化、ヒンドゥー化を熱心に進めて来た。こういった意味で、タカリ族は、ネパールの少数民族の中で最も社会の変化に適応した民族であるといえ、文化変容という観点から多くの人類学者の注目を集めて来た民族である。

タカリ族の本来の居住地は、アンナプルナ (Annapurna) 山脈とダウラギリ山脈の間を割って流れるカリ・ガンダキ (Kali Gandaki) 川上流域のタク・コラ (Thak Khola) 地方南部のタクサトサエ (Thaksatsaye 「タクの700戸」) の地であり、ダウラギリ県ムスタン (Mustang) 郡の南端に位置している。伝統的にタカリ族が居住していた村は、下流のガサ (Ghasa) (標高 2,010 m) から上流のトゥクチェ (Tukche) (標高 2,586 m) に至る谷間の地域で、トゥクチェとコバン (Kobang) がその中心的な村である。現在では、大小併せて20以上の集落からなっている。この地域の北側は、やはりタク・コラ地方の一部であり、マルファ語及びビジャン語域のパンチガウン (Panchgaun) とチベット語域のバラガウン (Baragaun) が続く。既述のように、近年タカリ族が都市部に移住すると共にこの地域からタカリ族は年々減少しつつあるという。

他の少数民族同様に、他地域へ移住した家族の若い世代には、タカリ語を話せない者が増えつつあるようである。従って、タカリ族であっても、タカリ語を母語としない者も多いようである。タカリ族に詳しい人類学者には、タカリ族の総数は1万人ほどであろうという者がいるが、これはタカリ語を母語としない者も加えた数字であろう。【母語人口：5289人(1981)】

2.2.2.1.6. マルファ語 (Marpha, Mārphā)

マルファ語は、ダウラギリ県ムスタン郡のカリ・ガンダキ川上流域のパンチガウン地方で話されている言語である。マルファ族は、近隣の有力部族であるタカリ族であると称するが、タカリ族とは異なる。マルファ族は、周辺の者からプンタン (Puntan) またはプネル (Punnel) と呼ばれており、文献中では、プンティ (Punti) の名で現れるという。しかし、マルファ族自身は、この呼称が蔑称であるとして使用しない。マルファ語は、元来タカリ語域とビジャン語域の間にあるマルファ村の言葉であった。

近年タカリ族の都市部への転出に伴い、マルファ族は、タカリ族居住地の中心であるトゥクチェ村(Tukche)から更に下流の都市ポカラ周辺にまで移り住んでいる。

2.2.2.1.7. シャン語 (Syang, Syāng, Shyang, Shyāng)

シャン語は、ダウラギリ県ムスタン郡のカリ・ガンダキ川上流域のパンチガウン地方で話されている言語である。シャン語域は、元来この地方の北端に近いティニ (Thini (gāon), Thināng, Thin), シャンとチム (Chim (gāon), Chimang) の3ヶ村を含む地域に限られていた。この地域は、北は、かつてチベット交易の基地としてタカリ族により開かれたジョムソム (Jomosom) 村を越えて、チベット語のガンダキ (Gandaki) 方言域に接し、カリ・ガンダキ川沿いに、南は、タマン語群の言語であるマルファ語域、タカリ語域へと続く。東は、アンナプルナ山脈に遮られているが、ヒンズー教の聖地ムクティナート (Muktinath) を過ぎ、トルン (Thorung) 峠 (海拔 5,416 m) を越えるとガンダキ (Gandaki) 県マナン (Manang) 郡に入るが、この地方は、タマン語群の言語であるマナン語地域である。シャン語話者は、この地方以外からの者には、タカリ族であると主張するが、近隣の村人達からは、ティン (Thin), シャーサン (Shāsang) 及びチムタン (Chimtan) と呼ばれ、また、彼らには、自らもそう呼称するという。

2.2.2.1.8. グルン語 (Gurung=*LSI*, Gūrung, Gurungkura (「語」); 自称/tamū¹ kyui¹/; チベット語 Ghu-rin 「グルン人」)²⁷⁾

グルン語は、ガンダキ県のラムジュン (Lamjung) 郡を中心に、マナン郡のネシャン (Nesyang) 及びナル・プー (Nar-Phu) 地方とゴルカ郡の南部とダロンディ・コラ (Darondi Khola) 川以東を除き、この3郡とタナフン (Tanahun), カスキ (Kaski), パルバット (Parbat), シャンジャ (Syangja) の4郡の併せた7郡で主に話されている言語である。T. Hagen [1971³] は、伝統的なグルン族とタマン族の領域の境界をブリ・ガンダキ (Burhi Gandaki) 川の支流アंक・コラ (Ankhu Khola) 川とするが、筆者は、むしろブリ・ガンダキ川の本流がその境界であったとしたい。

現在グルン族は、東ネパールやタライ地方に居住する者も多いが、先に触れたように、民族的素性ははっきりしていても、既にグルン語を母語としない者が相当数に昇るものと思われる。

D. Snellgrove [1961] は、ゴルカ郡クタン (Kutang) 地方 (ブリ・ガンダキ川上流域) のニャク (Ngyāk [gNyag], Nyak) 村以南の地域の住民をグルン族と呼び、彼

27) 主に, [PIGNÈDE 1966], [BISTA 1972], [MESSERSCHMIDT 1976], [GLOVER & LANDON 1980], [H. GURUNG 1980] と [西 1981] を参照する。

らの言語をグルン語と呼んでいる。確認されていないが、言語はおそらくガレ語であり、住民にも少数のガレ族が混ざっている可能性が高い。クタン地方から北のラルケ (Larke, Lārke, Larkya; Nupri) 及びシアル (Shiar, Siār; Tsum) 地方は、チベット語域で、住民もチベット人である。クタン地方からブリ・ガンダキ川を更に下り、ジャガート (Jagat) 以南のシヤムラン・ベシ (Syamrang Besi) までの地域の村は確かにグルン族の村であるが、ガレ語域である。なお、下記三角地帯を除く、グルン語地域では、ガレ族は、グルン語を話し、グルン族の上位4氏族 (Char jāt) の1氏族に数えられている。

グルン語は、特にガチョック (Ghachok) 方言が知られているが、その外にも多くの方言が記録されている。グルン語方言には、東部、中部、西部の3つの方言区分が認められるが、それぞれダドゥワ (Daduwa) 方言、シクリス (Siklis) 方言、シルバリ (Sirubari) 方言で代表される。

1961年のインドの国勢調査では、旧シッキムでグルン族 (82人) が登録されている。
【母語人口：174,464人 (1981)】

2. 2. 2. 1. 9. マナン語 (Manang/mənəŋ¹/, Manāng; チベット語 Nyesyang, Nyeshang, Nyishang; ネシャンは、マナン郡のピサン (Pisang) 以西の地域を指す名称である。)²⁸⁾

マナン語は、ガンダキ県マナン郡のネシャン (Nyesyang) 地方の、マルシャンディ (Marsyandi) 川上流の細長い盆地及びその辺縁の丘陵に点在する6カ村、ピサン (Pisang/phisəŋ¹/, Pisāng; Pi) 村、ギャル (Ghyaru, Ghyāru [rGyaru], Gyaru/khyar⁴/) 村、ンガワル (Ngawal, Ngāwal; Bangba/pəŋpa³/) 村、ブラガ (Braga/prəka³/ Brāga 【Brag-dkar】) 村、マナン村、カンサル (Khangsar, Khāngsar; Ngaba, Ngache/nəce¹/) 村とテンギ (Tanki, Tengī [sTeng-skyes]/təkii³/) 村 (【 】内は、[SNELLGROVE 1961] 所載のチベット文字による綴字形、/ / 内は、[HOSHI 1984] によるブラガ村での地名の発音の音素表記) で話されている言語である。この地方は、南はアンナプルナ (Annapurna) 山脈によりラムジュン、カスキ (Kaski) の両郡と、北はペル (Peru) 山脈により中国 (チベット自治区) と隔てられている。この地方を東西に流れるマルシャンディ川沿いの唯一つの街道は、東はトルン峠を越え、ダウラギリ県ムスタン郡のムクティナートへ、西はギャスマド地方の郡庁所在地のツァメ (Chame) を抜け、南のラムジュン郡へ通じている。ネシャン地方のいずれの村も、

28) 主に、[SNELLGROVE 1961], [H. GURUNG 1980], [N. J. GURUNG 1976] 及び [HOSHI 1984] を参照する。なお、筆者は1980年10月にマルシャンディ川沿いにマナン村まで歩き、帰途にラムジュン郡をポカラまで横断した経験がある。

3,300 m 以上 (3,300 m~3,700 m) の高地に位置している。マナン郡の西に隣接するバラガウン (Baragaun) 地方のチャイレ (Chaile), タンベ (Tangbe), テタン (Tetang), チュサン (Chusang), ギャク (Gyaku) の5カ村の言語もタマン語群の言語と考えられているが、タンベ村の住民は、マナン地方から移住して来たと伝えており、この5カ村の言語はマナン語である可能性がある。

マナン族の人々 (Manangba, Chhachhumthē) には、外部の者にグルン族であると称する者が多く、一般に個人名もマナン語化したチベット語名と別に、最後にグルンという姓を付けたネパール語名を持つ者が多い。マナン族の男性には、既に1世紀ほど前から交易に従事する者も多く、近年では遠く東南アジア諸国にまで交易の手を広げている。現在は、カトマンズに家族と一緒に住む者が増えている。

マナン語は、ブラガ方言、ギャル方言とンガワル方言 (いずれも村名) で知られている。

マナン語を母語とする者の正確な人口は不明であるが、1971年の人口調査でマナン郡の全人口7,436人中ネシャン地方の住民数は4,802人となっており、この大部分がマナン語を母語とする者と考えられる。

2.2.2.1.10. ナル語 (Nar)²⁹⁾

ナル語 (Nar) は、中央ネパールのガンダキ県マナン郡西部、ナル・プー地方のナル (Nar) とプー (Phu) の2ヶ村の住民に話されている言語である。この人々は、この地方の住民からナル・プーテン (Nar-Phuthē) と呼ばれている。ナル村は、この地方を割って流れるナル・コラ川上流域で、北東からこの川に流入するプー・コラ川の合流点の北に位置し、プー村は、合流点からプー・コラ川沿いにずっと北に遡った地点にある。この地方は、北と北東ではペル山脈を境に中国 (チベット自治区) と境を接し、西北は、ダモダル山脈によりダウラギリ県ムスタン郡と隔てられており、この地方の西と南に位置するマナン郡の他の地方、ネシャン及びギャスムドや東に続くゴルカ郡のラルケ地方のいずれとも 5,000 m~6,000 m 級の山々に遮られている。

この地方は、隣接するネシャン地方と同様に、今でも文化的にも宗教的にもチベット文化圏に入る。英国の人類学者 Ch. von Furer-Haimendorf [1983] によれば、この地方の住民のほとんどがチベット語を知っており、男性の多くは、チベット語が読めるといふ。【母語人口：850人 (1971)】

29) 主に、[SNELGROVE 1961], [N. J. GURUNG 1977] と [FÜRER-HAIMENDORF 1983] による。Mazaudon [1975] は、ナル語をタマン語群【=グルン語支】に入れるが、筆者の立場については、『言語学大辞典』(第2巻)の「ナル語」の項を参照して頂きたい。

2. 2. 2. 1. 11. ガレ語 (Ghale, Ghale Gurung)³⁰⁾

ガレ語は、ガンダキ県ゴルカ郡の北西隅、西はダロンディ・コラ川を境にグルン語域と、東はブリ・ガンダキ川を隔ててタマン語域と接し、北はマナスル・ヒマール (Manaslu Himal) の切り立った山並みに遮られた狭い三角地帯で、人口5,600人(1974年)ほどのバルパック村 (Barpak) を中心とする三十数ヶ村で話されている言語である。この地域は、西はマナスル・ヒマールとダロンディ・コラ川によりグルン語地域と隔てられ、東はブリ・ガンダキ川を挟んでタマン語域と境を接している。ブリ・ガンダキ川の峡谷沿いに北に上ると、チベット族との混住村落を経て、ヌプリ、クタン、ツムのチベット語方言地域に入る。この地域の南に続く村には、ネパールの中部丘陵地帯の他の村と同様に様々な民族が混住しており、ネパール語を共用語としている。ガレ語地域の民族構成は、カムやスナルといったアーリア語系の低いカーストの者が少数みられる外はガレ族 (リラ lila と自称するというが確かでない) とグルン族からなり、いずれもガレ語を話す。しかし、ガレ族は、グルン族よりも数が少なく、そのほとんどがバルパックとウイヤの両村に集中している。また、同じ村の中でも、両部族は伝統的に別々の集落に住んでいる。成年男性は、ほとんどの者がネパール語も話すようであるが、これは、この地域の成年男性の多くがグルカ兵や警官として外国へ赴いたり、カトマンズへ出て行くためと思われる。女性や子供の間ではネパール語はまだ十分に普及していないようである。ガレ語を母語とする者の総数は、1974年当時で約1万人と推定されている。なお、ガレ族は、グルン語地域、マナン語地域やタマン語地域にも居住しているが、それらの地域のガレ族は、それぞれの地域言語あるいはネパール語を話す。特に、グルン語地域では、ガレ族はグルン族の上位4氏族中の1氏族とされている。代表的な方言は、バルパック (Barpak) 方言であるが、音声的にはウイヤ方言 (Uiya) がより古い特徴を留めている。この地域のグルン族には自分達の言語 (ガレ語) がグルン語であると主張する者がいる。

2. 2. 2. 1. 12. チェパン語 (Chepang; LSI Chēpāng)³¹⁾

チェパン族の居住地は、カトマンズ盆地 (Kathmandu Valley) の西南、中央ネパール南部のマハーバーラト (Mahabharat) 山地で、ガンダキ県 (Gandaki zone) のゴルカ郡 (Gorkha district) とダーディン (Dhading) 郡の南部及びナラヤニ (Narayani) 県マクワンプル (Makwanpur) の西部とチトワン (Chitwan) 郡の北部を含む東西約 64 km、南北約 24 km のほぼ長方形の森林地帯 (面積約 1,500 km²) であ

30) 主に、[SNELLGROVE 1961] と [西 1981] による。なお、筆者は1981年3月にガレ語地域のほぼ全域を徒歩旅行した経験があり、[西 1981] はその報告である。

31) [CAUGHLEY 1981] による。

る。この地域は、北はトゥリスリ (Trisuli) 川、西はナラヤニ川、南はラプティ (Rapti) 川を境とし、東はカトマンズーインドを結ぶ公路がその境界となっている。この地域は、海拔 300 m 以下から 2,400 m 以上に及ぶ高度差があるが、チェパン族の村落は主に海拔 600 m~1,200 m ほど山の傾斜面に集中しており、1,500 m 以上の高地に住む者は僅かである。マラリヤの撲滅と共にここ 20年ほどで 600 m 以下の土地に住む者も増えて来ている。Hodgson や C. Jest は、チェパン族がこの地域の最も古い居住者であると主張している。元来この地域は、チェパン族以外の民族はあまり居住していなかったようであるが、ここ数世代の間にタマン族、マガル族、ネワル族やアーリア語系 (Aryan) のブラーマン (Brahman)、チェトリ (Chhetri)、カミ (Kami) 等のカーストの者が移住して来たため、現在では、チェパン族だけの村落はほとんどなくなっているという。文化面や言語面でチェパン族に最も影響を与えたのは、このうちマガル族であるという。また、全体的なネパール化が進んでおり、マハーラト山脈の北側の幾つかの村のチェパン族は、チェパン語をいくらか知っているが、もはや話せないと主張するといわれる。【母語人口：9,174人 (1961)；約15,000 (1981 [推定])】

ナラヤニ川の西側に住み、マガル族を称するブジュリ (Bhujeli) 族の話すガルティ語 (Gharti) もチェパン語の方言 (西部方言) である。

2. 2. 2. 1. 13. ブラム語 (Bhramu; *LSI* Bhrāmu)³²⁾

今や絶滅寸前といわれるブラム語は、カトマンズ盆地の西辺に住むダヌワル (Danuwar) 族 (ダヌワル・ライ Rai 族とも呼ばれるが、その言語は、チベット・ビルマ語系でなく、インド・アーリア語系である) の幾つかの村でまだ話されているとされている。

2. 2. 2. 1. 14. タマン語 (Tamang, Tāmag, Tāmāng, Tamāng, Tāmāng Bhōṭiā; Thamang; Tamar; Mūrmi, Moormi, *LSI* Murmi; Lama; Ishang; Nishung; Sain)³³⁾

外国人学者の間でタマン語の名称が一般化するの、1960年代に入ってからである。Tāmāng, Tāmag, Tamāng 等はネパール語での変異形であろうが、現在では、Tāmāng が一般的である。

ネパールのチベット・ビルマ語系民族中最大の人口を擁する民族であるタマン族の

32) [HANSSON 1988] による。

33) 主に、[FÜRER-HAIMENDORF 1956; BISTA 1972; MAZAUDON 1973b, 1975] と [MACDONALD 1984] を参照する。

主要分布地域は、東部丘陵地帯 (Eastern Hills) と東部内タライ (Eastern Inner Terai) の西部、西部丘陵地帯の東部 (Western Hills) 及び中央内タライ (Central Inner Terai) の西北部にわたっている。地図の上では、東側に偏ってはいるが、カトマンズ盆地を中心にちょうどその周囲を取り囲む形をした広い地域であり、行政区分上は、カトマンズ、バグマティ県 (Bagmati zone) の全域 (カブレ・パランチョク (Kabra Palanchok), シンドゥ・パルチョック (Sindhu Palchok), スワコット (Nuwakot), ラスワ (Raswa), ダーディン (Dhading の諸郡), ナラヤニ (Narayani) 県北部のマクワンプール (Makwanpur) 及びチトワン (Chitwan) の両郡, ジャナクプール (Janakpur) 県北部のドラカ (Dolakha), シンドゥリ (Sindhuli), ラメチャップ (Ramechhap) の3郡にわたる地域である。現在では、グルン族との伝統的境界と考えられるブリ・ガンダキ川を越えて西側や、東部丘陵地帯一帯にも広がっている。伝統的には、タマン族の集落は、ほぼ海拔 1,500 m~2,000 m の高度地帯に多くみられるという。

タマン族中心の集落がみられるのは、スン・コシ (Sun Kosi) 川とリク・コラ (Likhu Khola) 川に挟まれた地帯からその南部に延びるスン・コシ川の南側のドゥリケル (Dhulikhel) とシンドゥリ・ガリ (Sindhuli Garhi) の間の丘陵地帯にかけての地域であるという。

グルン族とタカリ族は、一般にネパール語名で知られているが、グルン族もタカリ族もその内部で用いる自称はそれぞれ /tamū¹/ (ガチョック方言形 /tamū¹ kyui²/「グルン語」) と /təpaŋ¹/~təmhāŋ である。これは、タマン族の自称 /tamaŋ¹/ (リシャンク Risiangku 方言形); (/tamaŋ¹ tam¹/「タマン語」) と明らかに同源語であり、このことは、グルン族とタカリ族が本来タマン族と同一民族集団であったか、あるいは極めて近い関係の民族集団であったことを示すものといえよう。

タマン語は、主にサフ (Sahu) 方言とリシャンク方言で知られている。タマン語方言は西部、中央、東部の3方言に区分され、サフ方言とリシャンク方言はそれぞれ西部方言と東部方言に入る。中央方言としてはタグルン (Taglung) 方言が知られている。

1961年のインドの国勢調査には、旧シッキムと西ベンガル州で4,939人のタマン語話者が登録されている。【母語人口：522,416人 (1981)】

2. 2. 2. 1. 15. ネワル語 (Newar, Newari, Newāri; *LSI* Nēwāri; Nepal bhāṣā; 自称 newā : bhāe; チベット語 bal-po-pa 「ネワル人」, bal-po'i skad 「ネワル語」)³⁴⁾

34) 主に, [MALLA 1982b; GENETTI 1987b] と『言語学大辞典』(第3巻)【1991年刊行予定】の「ネワール【=ネワル】語」の項(石井溥執筆)による。

西 ヒマラヤ諸語の分布と分類 (上)

ネワル語は、カトマンズ盆地で主に話されているが、盆地外の周辺地域に点在するネワル族の村やネパール各地のバザールに住むネワル商人によっても使用されている。現代ネワル語の標準的方言は、カトマンズ方言とされるが、その外のネワル語方言として、カトマンズ盆地の南西地域（シンドゥ・パルチョック郡）で話されているパハル語¹(Pahar; *LSI Pahrī*) が古くから知られている。これ以外にもバクタプール(Bhaktapur)【=バドガオン (Bhadgaon)】方言や盆地外のドラカ方言（ジャナクプール県ドラカ郡）等が知られているが、実情は明らかでない。また、カトマンズ方言内でもかなりの変異が観察されるというが、これは標準化の遅れを示唆するものであろう。

1959年のチベット動乱以前には、ラサを中心に多数のネワル族がチベットに居住していたという。

1961年のインドの国勢調査には、旧シッキムと西ベンガル州で234人のネワル語話者が登録されている。【母語人口：448,746人（1981）】

2.2.2.2 東ネパール

東ネパールの言語の分布に関しては、一部の言語を除き、Hansson [1988] に依拠せざるを得ない。Hansson は、ライ・リンブ語系の主要言語については、主要分布域 (main area) と主要分布域外 (outside the main area) に分け、分布と方言分類に触れている。その全体を引用すると非常に長くなる上、ここでは主として各言語の分布の中心地域を示すのが目的であるので、そのような例では主要分布域に限定してその分布を述べてある。なお、ライ・リンブ系の一部の言語の分布と方言分類の詳細は、『言語学大辞典』（東京、三省堂）(1988～) の該当項目を参照されたい³⁵⁾。

ライ・リンブ語系言語の言語別話者数は、一部を除いて不明である。これは、1971年以降のネパールの国勢調査で一部の「主要」言語を除き、言語別に話者数が報告されなくなったというだけでなく、この語系の言語については、ここに挙げたような詳細な言語区分が未知であったことによる。ライ・リンブ語系の場合、1981年の国勢調査でライ語またはキラト (Kirati) 語とリンブ語といった区分で、それぞれ221,353人と129,234人の母語話者が報告されているが、この区分では、スワル語はライ語に入れられていない。『エスノログ』(1984) には、幾つかのライ・リンブ語系言語の母語人口について数値を挙げているが、ここではそれを引用していない。

なお、1961年のインドの国勢調査には、旧シッキムと西ベンガル州でライ語話者

35) 特に註に示さないが、以下に示す諸言語の分布は、いずれも [HANSSON 1988] を参照している。註にはそれ以外の文献のみを記してある。

3,313人, カンプ【=ライ】語話者25人とリンブ語話者5,418人が登録されている。

2.2.2.2.1. タミ語 (Thami; *LSI Thāmi*; 自称 *thami kura, thangmi kham* (「語」))

タミ語の主要分布域は, ジャナクプール県ドラカ (Dolakha) 郡とシンドゥリ郡である。なお, ネワル族の村とされるドラカ村にもタミ族が混住し, 特定の職種を担当しているといわれる。【母語人口: 9,046人 (1961)】

2.2.2.2.2. ハユ語 (Hayu, *LSI Hāyu*; Hai; Vayu, *LSI Vāyu*; Wayu, 自称/wa:-ju da:bu/(「語」)³⁶⁾

ハユ語の分布域は, バグマティ県カブレ・パラチョック郡, ジャナクプール県ラメチャップ郡及びシンドゥリ郡で, スン・コシ川の支流ロシ (Rosi) 川とスン・コシ川流域沿いに, 40 km にわたって広がる地域で主に話されているが, タライ地方のサガルマタ県シラハ (Siraha) 郡にも幾つかのハユ族の村があるという。このハユ語は現在急速に消滅しつつある言語のひとつである。

現在のハユ語はムラジョル (Murajor) 村の方言で知られている。

上記3郡のハユ族の人口は, 1551人 (1974) と推定する者がいるが, ある調査に従えば, ハユ語を母語とする者の数は僅か233人 (1953~1954) に過ぎないとされている。

2.2.2.2.3. スンワル語 (Sunwar, Sunuwar, Sunwari, Sunuwāri, *LSI Sunwār*, Sunuwār; Mukhiya; 自称 *kwoico lo, kwoic lo; mukheke lo* (「語」)³⁷⁾

主要分布域は, ジャナクプール県ラメチャップ及びドラカの両郡とサガルマタ県オカルドゥンガ (Okhaldhunga) 郡北西部 (リク川とキムティ *Khimti* 川の流域と両川に挟まれたラメチャップ以北のほぼ 24 km² の地域) である。

第3節で述べるように, 現在スンワル語はライ・リンブ語系に分類されているが, スンワル族は今でもライ族に数えられていない。

Hodgson [1847] は, 「スンワル族はほとんどが大盆地【=カトマンズ盆地】の西, マガル族とグルン族の北で, ヒマラヤのこちら側のボティア (Bhotia)【チベット族等】の間またはその近くにみられる」とか, 「第3の, 即ち, ガンダキ川流域は, スンワル族, グルン族とマガル族の居住地である」とか述べている。今日スンワル語域の内部とその周辺地域で話されているチベット・ビルマ語系の言語は, 主にタマン語, チベット語のジレル方言とカガテ方言, ライ・リンブ語系のバヒン語, カリン語にハユ

36) [MICHAILOVSKY 1980] も参照する。

37) [HODGSON 1847] と [BISTA 1972] も参照する。

語などであり、この地域は本来のグルン語域、特にマガル語域のはるか東に位置している。カトマンズ盆地の西で、チベット語域の南、グルン語域の北で、しかもガンダキ水系に位置するという Hodgson の、言葉を文字通りに取ると、中央ネパールのガンダキ県の西部かダウラギリ県の東部のどこかということになる。Hodgson の陳述の妥当性はともかくとして、その後も H. Risley [1891] がスンワル族の伝承として西ネパール原住説を紹介している。19世紀までマガル語やグルン語がスン・コシ川の東で話されていたとは考えられないので、これらの説が正しければ、スンワル族は19世紀中葉以降にネパール中央部から現在の居住地へ移住したことになる。一方、Bista [1972] は、やはり伝承として、逆に東タライ地方からの移住説を挙げている。

スンワル族は、この地域の北東部で、キムティ・コラ川の支流であるジリ・コラ (Jiri Khola) 川とシクリ・コラ (Sikri Khola) 川の流域のジリ (Jiri) とシクリ (Sikri) を中心に居住するジレル族と兄弟部族 (ただし、社会的には、スンワル族は自分達の方が上位部族と考えている) であるとか、後者はスンワル族とシェルパ族との混血者の子孫であるといった俗説もあるようである。しかし、ジレル族の言語は、スンワル語と異なり、明らかにチベット語の中央方言に属し、やはりチベット語方言であるシェルパ語とも異なる方言である。居住地が隣接したり、混住したりしており、相互に婚姻関係を結ぶことがあることからこのような俗説が生じたものと思われる。

1961年のインドの国勢調査では、西ベンガル州等で 297 人のスンワル語話者が登録されている。【母語人口：10,650人 (1981)】

- 2.2.2.2.4. チョーラセ語 (Chourase; Chaurasia, *LSI* Chourśya; 自称 couraser, courase yor (「語」); Umbule, Ombule, Ambule; 自称 ómburer, ómbule yor (「語」))

サガルマタ県オカルドゥンガ郡南東部とウダヤプール (Udayapur) 郡及びコタン (Khotang) 郡における両郡の隣接地域を主要分布域とする。この地域ではむしろウンブレ語で知られているが、東部へ移住した人々の間では今もチョーラセ語と呼ばれているという。

- 2.2.2.2.5. バヒン語 (Bahing, Báhinggyá, *LSI* Bāhing; 自称 bahing lo (「語」); Baing; Rumdali)³⁸⁾

サガルマタ県ソルクンブ (Solukhumbu) 郡の南東端及びオカルドゥンガ郡北東部のドゥド・コシ川とマウルン・コラ (Maulung Khola) 川の間狭い地域を主要言語域とする言語である。

38) [MICHAILOVSKY 1975b] も参照する。

オカルドゥンガを挟んで北西のランガディプ (Rangadip) 村と南東のアンデリ (Andheri) 村及びその中間地域の村々のことばは同じ方言で、アンデリ村から更に南のポンク (Ponkhu) 村のことばは別の方言であろうというが、全体的に方言差は小さいようである。

- 2.2.2.2.6. トゥルン語 (Thulung, Thulunge, Thulungye, *LSI Thūlung*; 自称 *thulu wa, toaku lwa, thulung la, thōlong lō, thulung jemu* (「語」)³⁹⁾

サガルマタ県ソルクンプ郡南西部の、ドッド・コシ川とソル (Solu) 川の合流点周辺の9行政村、オカルドゥンガ郡北東端とコタン (Khotang) 郡北西部 (ドッド・コシ川流域) を主要分布域とする言語である。この9カ村は、いずれもここ2, 300年の間にムクリ村から分村して村々であるという。

主にムクリ (Mukli) 方言とデワサ (Dewasa) 方言で知られている。

- 2.2.2.2.7. カリン語 (Khaling; *LSI Khāling*; 自称 *khäl bra, khaling bat* (「語」)⁴⁰⁾

サガルマタ県のソルクンプ郡の中心部で主に話されており、この地域のライ語系言語では最大の言語である。

現在カリン語は、ソルクンプ郡のカスタップ (Khastap) 村 (バサ Basa 行政村) の方言で知られている。S. Toba & I. Toba [1975] によれば、この方言が標準的方言とされているという。いずれにせよ、主要言語域内の方言差 (主に語彙面) は僅かなようであるが、これと主要分布域外の一部の方言との方言差は非常に大きいといわれる。

- 2.2.2.2.8. ジェルン語 (Jerung, Jerong; 自称 *jero mala* (「語」))

サガルマタ県オカルドゥンガ郡の南西地域とジャナクプール県シンドゥリ郡のラトナワティ (Ratnawati) 行政村で主に話されている言語である。

- 2.2.2.2.9. ティルン語 (Tilung, Tiling, Tilling; 自称 *tilung blama* (「語」))

主要分布域は、ドッド・コシ川とスン・コシ川の合流点に近いサガルマタ県コタン郡西辺部のハリセダダ連丘地帯のチャスマタル (Chasmitar) 及びディクワ (Dikwa) の両行政村である。

チョスクレ語 (Choskule) (サガルマタ県コタン郡のハリセダダ連丘地帯のチャ

39) [ALLEN 1975] も参照する。

40) [TOBA & TOBA 1975] も参照する。

スミタール行政村)とドルンケチャ語(Dorungkecha)(サガルマタ県コタン郡のハリセダング連丘地帯のディクワ行政村)の2言語はティルン語の方言に過ぎないかもしれないといわれる。

2.2.2.10. ドゥミ語(Dumi, Dumī, LSI Dūmi; 自称 dumi bro, bumi bo?o (「語」), ro?du 「ライ語」)⁴¹⁾

ドゥミ語域は、サガルマタ県コタン郡北部、ドゥド・コシ川の支流ラワ・コラ(Rawa Khola)川とタップ・コラ(Tap Khola)川の合流点とその上流域に点在するバクシラ(Baksila), サプテシュワラ(Sapteshwara), ササルカ(Sasarka), カルミ(Kharmi)とマクパ(Makpa)の5行政村にはほぼ限られている。ドゥミ族はこの地域の原住民であるとされるが、現在この地域にはチュトリを始めとするアーリア語系の人々、ネワル族、グルン族やタマン族も居住しており、数の上でも優勢であるという。このような事情からドゥミ語話者は中高年者を除けば、非常に減り、20代から30代の若者は実質的にネパール語しか話さないといわれる。

G. von Driem [1989] は、ドゥミ語を①両川の合流点周辺(例. チウリカルカ Chiurikharka 村)の方言、②タップ・コラ川の南側のササルカとカルミの両行政村の方言、③両川間のバクシラ山陵地域(例. ハルクム Halkhum 村)の方言(バクシラ方言)と④マクパ行政村の方言(マクパ方言)に分け、ナチェリン語域やトゥルン語域と繋がる地域(マクパ行政村)で話されているマクパ方言は他の方言と著しく異なると述べている。ドゥミ語は主にバクシラ方言で知られている。

ドゥミ語は、カリン語との基礎語彙の共有率が高く、カリン語の方言とする者がいるが、ハンソンは、両言語のテンス・アスペクト標識、動詞の人称接辞と否定辞や機能語(function word)に重要な違いがあり、その結果相互理解ができないようであるという⁴²⁾。ドゥリエムは、マクパ方言の資料(スワデッシュの基礎100語表)だけからも、ドゥミ語がカリン語、ナチェリン語またはサンパン語とよりコイ語とずっと近い関係にあることが分かると述べている。

2.2.2.11. コイ語(Koi, Koyu; 自称 koi bo?, koyu bo?o (「語」); Kohi, Kohī)

サガルマタ県コタン郡の北東端に位置するスンデル(Sungdel)行政村で話されている言語である。N. K. Raiによれば、LSIのライ語資料はコイ語と一致するとのことである。

41) [DRIEM 1989]も参照する。

42) Toba & Toba [1975]は、「ドゥミ方言は【カリン語の】カスタップ方言と僅かに異なるが、いずれも相互に理解できる」と述べている。

2.2.2.2.12. クルン語 (*Kulung*, *LSI Kūlung*; 自称 *kulu ring* (「語」)⁴³⁾

主要分布域は、ホング・コラ (*Hongu Khola*) 川とアルン・ナディ川 (上流域) の間の地域、サガルマタ県ソルクンブ郡の極東部及びコシ県ボジュプール (*Bhojpur*) 郡の北西部、コシ県サンクワサバ (*Sankhuwasabha*) 郡の北西部を含む地域である。

クルン族の間では、ソルクンブ地域のブン (*Bung*) 方言が共通語の一種の基準とされているようであるという。

ソタン語 (*Sotang*, *Satang*; 自称 *Sōtta ring* (「語」), *Sotang nacchering*) は、コシ県ボジュプール郡中央部 (ホング川下流域), 特にソタンとチェスカム (*Chheskam*) の両行政村 (主要クルン語域の南西) で話されている言語で、言語学的基準に照らして、一般にクルン語の方言とされるが、ソタン語話者自身はその言語をクルン語とは別の言語であると主張する。

2.2.2.2.13. ナチュリン語 (*Nach(h)ering*, *Nacchering*, *Nachhereng*, *LSI Nāchherēng*; 自称 *nach(h)iring ru*, *nach(h)iring rī*(「語」); *Nasring*; *Bangdale*, *Bangdile*; 自称 *bangdale tûm*)

サガルマタ県コタン郡北東部及び同郡のダラパニ (*Darapani*) 村とアイセルカルケ (*Aiselkharke*) 村周辺で話されている小言語である。

2.2.2.2.14. チュクワ語 (*Chukwa*; 自称 *C(h)ukwa ring* (「語」); *Pohing*; 自称 *Pohing ring* (「語」))

コシ県ボジュプール郡の北東部に位置するクルン (*Kulung*) 行政村で話されている言語であるが、この言語の話者は既に中高年齢層に限られており、ほとんど消滅しつつあるという。なお、「クルン」行政村と呼ばれるこの村の住民にはクルン語を話すものはいないようであるという。同じように、ゴルカ郡のガレガオン (*Ghalegaon* 「ガレの村」) 村にはガレ語の話者はいない。

2.2.2.2.15. 西メオハン語 (*Western Meohang/Mewahang*; 次の東メオハン語と共にこの言語の自称は, *meohang khanawa* (「語」)である)

コシ (*Kosi*) 県サンクワサバ (*Sankhuwasabha*) 郡の西辺部のバラ (*Bala*) とブムデンバ (*Bumdemba*) 村で話されている言語である。

Hansson は, *Hodgson* のバラリ語 (*Balali*; *LSI Bālāli*) がこの言語に相当するのではないかとしている。

Hansson は, この地域の変種は, 独立した文法をもつ別の言語としなくてはなら
43) [Ch. McDougal 1979] と [Hari 1972] も参照する。

西 ヒマラヤ諸語の分布と分類 (上)

ないほどに東メオハン語域の変種と文法構造と中核語彙の一部が異なっていると述べている。

2. 2. 2. 2. 16. 東メオハン語 (Eastern Meohang/Mewahang; 自称 meohang kha-nawa; Newahang 【ヤンペ語にも使用される名称】)

主要分布域は、アルン・ナディ川の西の地域でサガルマタ県サンクワサバ郡北西部、特にマンテワ (Mangtewa) とヤブ (Yaphu) の両行政村であるが、この地域の大多数のライ部族の言語はクルン語であり、東メオハン語の話者には、ネパール語かクルン語を受け入れ、母語を捨て去る傾向が強い。地域変種間には大きな差異がみられるという。

2. 2. 2. 2. 17. チャムリン語 (Chamling, *LSI* Chāmiling; 自称 camling la (「語」); Rodong, *LSI* Rōdōng)

主要分布域は、サガルマタ県コタン郡の中央部及び南部とウダヤプール郡北部であり、この地域のネパール化していないライ族集団の圧倒的多数の人々が話す言語である。主要地域内のディクテル (Diktel) 北東のネルパ (Nerpa), コタンとバラムタ (Balamta) (いずれも町村名) を結ぶ三角地帯の方言間には僅かな差異しかみられないという。

2. 2. 2. 2. 18. ポルマチャ語 (Polmacha)

この言語はメチ県タプレジュン (Taplejung) 郡の言語であるが、詳細は不明である。

2. 2. 2. 2. 19. プマ語 (Puma; 自称 puma pima, puma kala (「語」))

主要分布域は、サガルマタ県のコタン郡南部のディプラン (Diplang), チソパニ (Chisopani), マウワボテ (Mauwabote) とパスワスチェラ (Paswaschera) 行政村である。

2. 2. 2. 2. 20. サンパン語 (Sangpang, *LSI* Sāngpāng)

コシ県ボジュプール郡の北寄りの地域とコタン郡北東部を主要分布域とする言語であるが、Hansson は、この言語が「最も中心的」ライ語と呼べようと述べている。

コタン郡の方言と主要分布域外の一部の方言を併せたコタン方言または西部下位方言群 (Western subgroup) が比較的同質的であるが、一般に方言差が大きいといわれる。

2. 2. 2. 2. 21. バンタワ語 (Bantawa, Bantāwā, Bāntāwā, Bantava, Buntāwā; Bāntuwā; 自称 Bantawa dum, Bantawa yīng, Bantawa yōng, [稀] Bantawa

cepma (「語」); Bontawa, Bontāwā, *LSI* Bontāwā)⁴⁴⁾

主要分布域は、コシ県ボジュプール郡の南部及び中央部とそれに隣接するサガルマタ県コタン、ウダヤプール、コシ県ダクタ (Dhankuta)、スンサリ (Sunsari) の4郡にわたる小地域である。バンタワ語は、その地理的広がりからみて、最も重要なライ語であり、リンブ語域の様々なライ部族の混住地、ブータンとインドのダージリン周辺のネパール人居住地やシッキム等に住むライ族間の共用語でもある。現在は、これらの地域ではネパール語に置き換えられる傾向が顕著であるといわれる。

Hansson は, Hodgson【と *LSI*】の資料中のルンチェンブン方言 (Rungchhenbung, *LSI* Rūngchhēnbūng; Ruchhenbung) がバンタワ語の「(チャムリン語方言?の古い要素を含む) 北部方言 (Northern dialects)」に属するようであると述べている。

バンタワ語は多くの地域的、下位部族的変種(方言)に分かれるが、「共通バンタワ語」的要素を共有している部分に関しては、変種相互間で理解が可能なようであるという。バンタワ語は主にメチ県パンチタル (Panchthar) 郡のラビ (Rabi) 方言で知られているが、この方言は主要方言域外の言語であり、代表的な方言とはいえないであろう。

2.2.2.2.2. ドゥンマリ語 (Dungmali, *LSI* Dūngmāli; 自称 *Dungmali pūk* (「語」))

バンタワ語主要分布域の北東、コシ県ボジュプール郡のトゥロドゥンマ (Thulodungma), サノドゥンマ (Sanodungma), バスティム (Bastim), チャンレ (Chyangre), チャランビ (Charambi) 等の行政村で話されている言語である。この言語は、バンタワ部族との同族意識からバンタワ語の影響が強く、同源形共有率も約82%に達するという。この言語はしばしばバンタワ語の方言とされるが、両言語間の相互理解もある程度可能であると報告されているので、この見解は社会【言語】学的には妥当とされようと Hansson は述べている。

主要分布域内では幾つかの下位部族方言が知られているが、方言差は僅かであるという。

この言語域の北西、コシ県ボジュプール郡のヤンパン (Yangpang) 行政村で話されているカンドゥン語 (Khandung) もドゥンマリ語のケサン (Khesang) 方言群の一方言であるかもしれないといわれるが、カンドゥン語自体既に消滅寸前の言語である。

2.2.2.2.3. ワリン語 (Waling, *LSI* Wāling)

44) [RAI 1985] も参照する。

ドゥンマリ語域の南、コシ県ボジュプール郡のカイラン (Khairang) 行政村で話されている言語であるが、(Hodgson の資料中のワリン語と比較すると) 完全な「バンタワ語化 (Bantawaization)」が進行中であり、僅かな残存要素を除けば、現在はバンタワ語の方言化してしまっているという。従って、ワリン語に関しては、共時的観点から果してバンタワ語とは別の言語とすべきか否か問題であろう。

2. 2. 2. 24. ヤンプ語 (Yamphu; 自称 yamphu kha (「語」))

北ロルン語域の北端に位置するコシ県サンクワサバ郡のマツァヤボカリ (Mattsa-yapokhari) 行政村の小地域だけで話されている言語である。

2. 2. 2. 25. ヤンベ語 (Yamphe; 自称 yamphe kha, yakhaba kha, yakhaba khaṭe, yamphu kha (「語」); その他多くの地域的呼称があるが、多くは他の言語にも共通の呼称であり、yamphe だけがこの言語に独自の呼称である)

コシ県サンクワサバ郡北部、ハティヤ (Hatiya) の南のアルン・ナディ川上流域周辺の言語である。

2. 2. 2. 26. 北ロルン語 (Northern Lorung; Lohorong, *LSI* Lōhōrōng; 自称 lorung/lohorung khap/kha, lohorung khap/kha (「語」))

Hansson が北ロルン語と南ロルン語に分けるロルン語には、この他にも “Dewan”, “Yakhaba”, “Yakha”, “Yakhaba Lorung”, “Yamphu”, “Dangbami”, “Dangbami Khapung” 等の多くの異称があるが、いずれも地方的な呼称に過ぎないか、他の言語集団の呼称と同じものであり、ロ(ホ)ルン語の呼称がこの言語の方言に最も普通であるようであるといわれる。

コシ県サンクワサバ郡の中央部で話されている比較的まとまった言語である。Hansson はこの言語を Hodgson の資料中のロホロン語と同定している。

北ロルン語域の東に位置し、独自の特徴が幾つかみられるビクシ (Biksi, Biksit) 方言を除けば、残る方言の差異は僅かであるという。

2. 2. 2. 27. 南ロルン語 (Southern Lorung; Lohorong, *LSI* Lōhōrōng; 自称同上)

この言語は、主にコシ県ダルクタ郡のタモル・コシ川の南で話されている言語である。

マナブドゥケ (Manabuduke) 村のゲッシャ (Gessha) 方言を除けば、ダルクタ郡の諸方言は非常に同質的なようであるという。しかし、主要分布域外 (モラン郡の丘陵地域、イラム Ilam 郡南部等) の諸方言は非常に異なるという。

2.2.2.28. ヤッカ語 (Yakkha; 自称 *yakkha cea, yakkhaba cea, yakkhasala, yakkhabasala* (「語」); *Yakha, LSI Yākhā; Dewan Sala*)

“*yakkha/yakkhaba*”の自称は、上述のロルン語やヤンペ語にもみられた呼称である。“*Dewan*”⁴⁾の呼称もあるが、現在ヤッカ族は自らをライ族集団であると主張するという。

ヤッカ語の主要分布域は、コシ県サンクワサバ郡の南部とダンクタ郡の北部及び南東部とされる。

主要分布域外の方言を含め、地域変種間に僅かな差異があるが、全体としてこの言語の文法及び語彙構造にはほんの少しの相違がみられるだけであるという。

2.2.2.29. ルンバ・ヤッカ語 (*Lumba-Yakkha*; 自称 *yakkhaba cea* (「語」))

ルンバ・ヤッカ族は、ヤッカ族の一下位部族であるが、その「方言」は、純粋な言語学的観点からはむしろ別の言語とみなせるといふ。

この言語は、コシ県ダンクタ郡の北端のジットプール (*Jitpur*) 及びマレク (*Markrek*) 行政村で話されている。

2.2.2.30. チンタン語 (*Chhingtang, Chingtang, Chhingtage; LSI Chhing-tāng*; 自称 *Chintang rùng* (「語」); *Teli*)

コシ県ダンクタ郡のアンキサッラ (*Ankhisalla*) 行政村のアルン・ナディ川とタメル・コシ川の合流点に近いダンドガオン (*Dandagaon*) 村等に昔から住んでいるライ族集団の言語である。このチンタン・ライ族はバンタワ族の下位集団であると主張し、実際その言語は、バンタワ語の強い影響を蒙っているが、この影響は長期にわたるチンタン語—バンタワ語の「2変種併用」⁵⁾の結果であろうという。現在ほとんどのチンタン・ライ族の人々は、バンタワ語(またはネパール語)を取り入れ、チンタン語を捨ててしまったようであるという。この言語もほとんど消滅してしまった言語のひとつである。

2.2.2.31. ムガリ語 (*Mugali*; 自称 *mugali ring* (「語」))

この言語もヤッカ語と自称されることがあるという。

現在ムガリ語は、コシ県ダンクタ郡のムガ (*Muga*) 行政村でしか話されておらず、おそらく消滅寸前の言語のようである。この言語もバンタワ語の強い影響を受けているが、別起源の言語であることは明らかであると *Hansson* は述べている。

Hansson は、この言語が *Hodgson* の資料中のランビチョン語 (*Lambichhong, LSI Lāmbichhōng*) に相当するとしている。

2. 2. 2. 2. 32. ベルハリヤ語 (Belhariya; 自称 athpariya ring (「語」))

この言語は、コシ県ダンクタ郡のダンクタ・バジャール (Dhankuta Bajar) の真西のベルハラ (Belhara) 行政村に住むアトパリヤ・ライ族の言語で、その名前通り、ベルハラ村で話されている。アトパリヤ語と自称は同じで、分布域も近いが、両言語には、特に文法面で単なる方言差以上の差異があるという。

2. 2. 2. 2. 33. アトパリヤ語 (Athpariya; 自称 athpariya ring (「語」))

この言語は、コシ県ダンクタ郡のダンクタ・バジャールとダンクティル (Dhankutir) の東のバガオン (Bhagaon) 行政村で話されている「アトパリヤ」または「アトパレ (Athpare)・ライ」族の言語である。

ライ族の間でも、この言語は、最もリンブ語的ライ語とされているが、実際は、語彙と文法における類似の程度にはヤッカ語のような言語に対するのとリンブ語に対するのとで大きな違いはなく、殊に、文法的特徴ではリンブ語とチャッタレ・リンブ語とはっきりと区別されるという。

2. 2. 2. 2. 34. パンドゥワリ語 (Phangduwali; 自称 phangduwali potī (「語」))

コシ県サンクワサバ郡のパクリバス (Pakhribas) 行政村の孤立したパンドゥワ (Phangduwa) 村だけで話されている言語である。

2. 2. 2. 2. 35. チュルン語 (Chhulung; 自称 Chhúlung rûng (「語」); Chilling; Chholung)

コシ県ダンクタ郡のアンキサッラ行政村で話されているライ族の言語である。チリンは、アルン・ナディ川⁴⁵⁾の東に住む幾つかのライ部族集団全体を指す呼称である。この他にも、他の言語とも共通に“Lohorong”, “Teli”等と呼ばれるという。

やはり同郡で話されているパンジュ語 (Phanju, Phāju; 自称 phanju rêng (「語」))は、この言語の僅かに異なる方言であるという。

2. 2. 2. 2. 36. チャッタレ・リンブ語 (Chhatthare, Chhatthare Limbu; 自称 Chatthore Yakthungba pan, Chhattha pan, Yakthungba pan (「語」) [jakuthungba pa'n])⁴⁵⁾

コシ県テラトゥム (Terhathum) 郡南西部のダンガッパ (Dangappa), チャッタレ・ポカリ (Chhatthare-Pokhari), ハマルジュン (Hamarjung), オカルボテ (Okharbote) 等の行政村とダンクタ郡北東部のタンクワ (Tangkuwa), ハティドゥンゲ (Hatidhungge), ビルガオン (Bhirgaon), バンチャレ (Banchare) 等の行政村で話さ

45) [WEIDERT & SUBBA 1985] と [DRIEM 1987a] も参照する。

れている。この言語は、通常はリンブ語の一方言とされるが、他のリンブ語方言と互いに疎通せず、言語学的観点からは別の言語としなくてはならないと Hansson は述べている。Driem も、チャッタレ方言話者のリンブ語がタンプラ (Tamphula) 村のペダッペ方言話者に実質的に全く理解できないのを観察しており、タンプラの村人は遠くチャッタレ地区に住む親戚とはネパール語で話さなくてはならないほどであるという。Hansson は、この言語といわゆるリンブ語とは、同源形共有率は85%から90%に上るが、指示代名詞や疑問代名詞のような重要な機能語 (function word) の違いに加えて、音韻及び文法面 (接尾辞等) の違いが相互理解を妨げる原因のようであると述べている。

この言語の地域変種間の差異はリンブ語の場合に比べて大きいようであるが、相互理解ができないほどでないとされている。Driem によればこの言語は通常 (通俗的に) チャッタレ・ポカリとダンガッパト・ホモルジュン (Dangappat Homorjung) の2つの下位方言に分けられるという。

2.2.2.2.37. リンブ語 (Limbu=*LSI*; 自称 *yaktuŋba pa'ŋ, yaktuŋ pa'ŋ* (「語」))⁴⁶⁾

既述のように、リンブ語は、チャッタレ方言を除けば、伝統的にはパンタレ (Panthare, Pāthare) またはパンチタレ (Panchthare, Pacthare) 方言、ヤングロッケ (Yanggroke, Yānggroke) 方言、ペダッペ (Phedappe, Phedāppe) 方言とタプレジュン (Taplejung, Tāplejung) またはタモルコラ (Tamorkholea) 方言の4方言に分かれるとされるが、Weidert & Subba [1985] はヤングロッケ方言をパンタレ方言の下位方言とする。各方言の分布域は次の通りである。

① 標準的リンブ語であるパンタレ方言の主要分布域は、過去も現在もメチ県パンチタル (Panchthar) 郡であり、その西限はタモル・コラ川である。現在この方言は、ネパールと隣接するインドのシッキム州と西ベンガル州を含めたリンブ語域全体にわたる地域的で限定的な共用語の地位に一層近づきつつあるといわれる。

ヤングロッケ方言は、パンチタル郡の北部、インワ・コラ (Ingwa Khola) 川の支流のカベリ (Kabeli) 川の南の小地域の方言である。

② ペダッペ方言は、コシ県テラトゥム郡のテラトゥム・バジャール (Tehrathum Bajar) 周辺で話されている。

③ タプレジュン方言は、メチ県タプレジュン郡で話されている方言であり、メワ・コラ (Mewa Khola) 川流域の諸方言とタモル・コラ川流域 (特に、タッペタック Tappethak とイカブ Ikhabu の両行政村) 及び同郡の南部丘陵地帯の諸方言等から

46) [WEIDERT & SUBBA 1985] と [DRIEM 1987a] も参照する。

なり、全体的名称はタモルコラ方言であるともいわれる。

リンブ語は、インドの東ネパールとの隣接地方でも広く話され、シッキムでは、リンブ語は地方語として小学校段階で選択科目となっているほどであるという。

2. 2. 2. 2. 38. サーム語 (Saam)

サーム語は、『エスノログ』(1984)にコシ県サンクワサバ郡の言語として登録されている。しかし、Hanssonによれば、東部開発地域の言語調査では同郡にサーム語の名称の言語は見当たらなかったが、メチ県イラム郡やタライ地方の少数の高齢者から“Sama kha”, “Samakulung”, “Sambya”といった呼称の残存方言資料が収録されたという。更に、彼は、これらの諸変種が相互に近い関係にあったようであり、イラム郡のこの言語を話す部族集団がサンクワサバ郡西部かコシ県ボジュプール郡の北端部から移住した部族集団の末裔であると考えられると述べている。この言語も消滅寸前の言語である。

2. 2. 2. 2. 39. リンキム語 (Lingkhim)

この言語は、メチ県イラム郡のスンベック (Sumbek) 村で採録された僅かな語彙だけで知られる消滅寸前の言語である。

2. 2. 2. 2. 40. ディマール語 (Dhimal, *LSI Dhīmāl*)⁴⁷⁾

コシ県モラン郡からメチ県ジャバ郡にかけてのロハンドラ (Lohandra) 川とメチ川の間で27行政村で主に話されている言語である。ディマール族の住居は、チュレ (Chure) 山脈の山麓沿いに点在しているという。

1961年のインドの国勢調査では西ベンガル州で11人のディマール語話者が登録されている。インドのシリグリ (Siliguri) 及びジャルパイグリ (Jalpaiguri) 地方にも少数のディマール族がみられるという。R. R. Regmi [1985] の調査 (1981) では、主要分布域のディマール族人口は2,783人となっている。

2. 2. 3. インド東北部

2. 2. 3. 1. シッキム州と西ベンガル州

2. 2. 3. 1. 1. レプチャ語 (Lepcha=*LSI*; Rong, *LSI Róng*)⁴⁸⁾

インドのシッキム州と西ベンガル州のダージリン (Darjeeling) 周辺がこの言語の主要分布域であるが、西ネパールのメチ県の東部と南部にもレプチャ語話者がみられる。

47) [REGMI 1985] も参照する。

48) [GORER 1967²⁾] と『言語学大辞典』(第3巻)【1991年刊行】の「レプチャ語」(長野泰彦執筆)も参照する。なお、ダージリンも、1835年に英国の東インド会社に割譲されるまでは、旧シッキム王国の一部であった。



図1 ネパール行政区分(県・郡)

表1 ライ・リンブ語系【=キラント諸語】の分類表

未分類の⁴⁷ポルマチャ語 (Polmacha) (メチ県)を除く、ライ・リンブ語系の各下位語群の主要分布域は次の通りである。

① 西部ライ語群【=西部キラント語群】(No. 31~No. 40 及び No. 68)

主要分布域は、ハユ語の分布域がハグマティ県 (Bagmati zone) の西部にかかり、リンキム語のそれがとメチ県 (Mechi zone) である以外は、すべてジャナクプール県 (Janakpur zone) とサガルマタ県 (Sagarmatha) に含まれる。

³¹ハユ語 (Hayu), ³²スンワル語 (Sunwar), ³³チャーラセ語 (Chourase), ³⁴バヒン語 (Bahing), ³⁵トゥルン語 (Thulung), ³⁶カリン語 (Khaling), ³⁷ジェルン語 (Jerung), ³⁸ティルン語 (Tilung), ³⁹ドゥミ語 (Dumi), ⁴⁰コイ語 (Koi), ⁶⁸リンキム語 (Lingkhim)

② 東部ライ語群【=中央キラント語群】(No. 41~No. 52 【-No. 47】 及び No. 67)

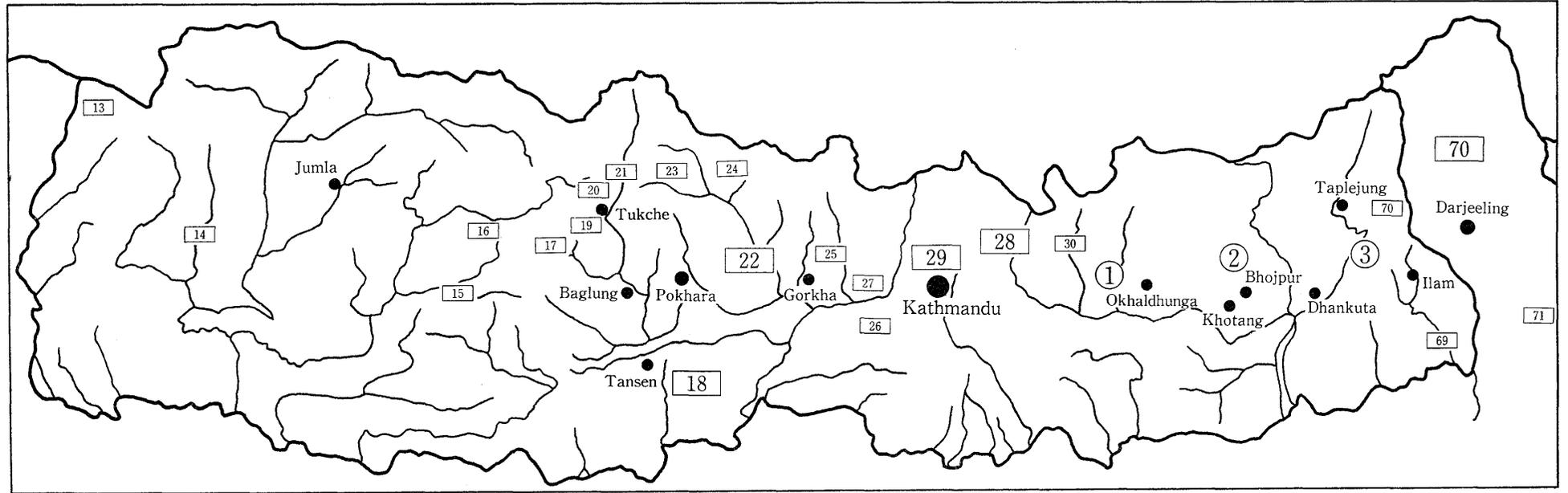
主要分布域は、サーム語の分布域が? コシ県とメチ県である以外は、すべてサガルマタ県とコシ県に含まれる。

⁴¹クルン語 (Kulung), ⁴²ナチェリン語 (Nachhering), ⁴³チュクワ語 (Chukwa), ⁴⁴西メオハン語 (Western Meohang), ⁴⁵東メオハン語 (Eastern Meohang), ⁴⁶チャムリン語 (Chamling), ⁴⁸プマ語 (Puma), ⁴⁹サンパン語 (Sangpang), ⁵⁰バンタワ語 (Bantawa), ⁵¹ドゥンマリ語 (Dungmali), ⁵²ワリン語 (Waling), ⁶⁷サーム語 (Saam)

③ リンブ語群【=東部キラント語群】(No. 53~No. 66)

主要分布域は、コシ県とメチ県に含まれるが、リンブ語のそれは、インドのシッキム州及び西ベンガル州の北西部も含む。

⁵³ヤンプ語 (Yamphu), ⁵⁴ヤンベ語 (Yamphe), ⁵⁵北ロルン語 (Northern Lorung), ⁵⁶南ロルン語 (Southern Lorung), ⁵⁷ヤッカ語 (Yakha), ⁵⁸ルンバ・ヤッカ語 (Lumba-Yakha), ⁵⁹チンタン語 (Chhingtang), ⁶⁰ムガリ語 (Mugali), ⁶¹ベルハリヤ語 (Belhariya), ⁶²アトパリヤ語 (Athpariya), ⁶³パンドゥワリ語 (Phangduwali), ⁶⁴チュルン語 (Chhulung), ⁶⁵チャッタレ・リンブ語 (Chhatthare Limbu), ⁶⁶リンブ語 (Limbu)



ヒマラヤ諸語の分布概念図(2)

【ネパール及びインド北東部：シッキム州及び西ベンガル州】

ヒマラヤ諸語名

【言語名の後に(L)の付せられた言語はLSIにその資料が含まれている言語である。しかし、実際には、同一言語と認められても、ここに挙げた言語名は必ずしもLSIでの名称と一致しない。なお、ライ・リンブ語系言語の分布に関しては、表1と2を参照せよ。】

(2) ネパール及びインド北東部のヒマラヤ諸語

- 15カム語 (Kham)
- 16カイケ語 (Kaiké)
- 17チャントル語 (Chantel)
- 18マガル語 L(Magar; LSI Māgari, Magar, Mangar)
- 19タカリ語 L(Thakali)
- 【=タクシャ語 (LSI Thāksya)】
- 20マルファ語 (Marpha)
- 21シャン語 (Syang)
- 22グルン語 L(Gurung=LSI)
- 23マナン語 (Manang)
- 24ナル語 (Nar)
- 25ガレ語 (Ghale)
- 26チェパン語 L(Chepang; LSI Chēpāng)
- 27プラム語 L(Bhramu; LSI Bhrāmu)
- 28タマン語 L(Tamang)
- 【=ムルミ語 (LSI Murmi)】
- 29ネワル語 L(Newar; LSI Nēwārī)
- 30タミ語 L(Thami; LSI Thāmi)
- 31ハユ語 L(Hayu)
- 【=ヴァユ語 (Vayu; LSI Vāyu)/ワユ語 (Wayu)】
- 32スンワル語 L(Sunwar; LSI Sunwār/Sunuwār)
- 33チャーラセ語 L(Chourase; LSI Chouraśya)
- 【=ウンブレ語 (Umbule)】

- 34バヒン語 L(Bahing; LSI Bāhing)
- 【=バイン語 (Baing)/ルムダリ語 (Rumdali)】
- 35トゥルン語 L(Thulung; LSI Thūlung)
- 36カリン語 L(Khaling; LSI Khāling)
- 37ジェルン語 (Jerung)
- 38ティルン語 (Tilung)
- 39ドゥミ語 L(Dumi; LSI Dūmi),
- 40コイ語 (Koi) L【=LSI Rāi】
- 41クルン語 L(Kulung; LSI Kūlung)
- 42ナチェリン語 L(Nachhering; LSI Nāchherēng)
- 43チュクワ語 (Chukwa)
- 44西メオハン語 (Western Meohang)
- 45東メオハン語 (Eastern Meohang),
- 46チャムリン語 L(Chamling; LSI Chāmling)
- 【=ロドン語 (Rodong; LSI Rōdōng)】
- 47ポルマチャ語 (Polmacha)
- 48プマ語 (Puma)
- 49サンパン語 L(Sangpang; LSI Sāngpāng)
- 50バンタワ語 (Bantawa; LSI Bontāwā)
- 【?=ルンチェンブン語 L(Rungchhenbung; LSI Rūngchhēn-būng)】
- 51ドゥンマリ語 L(Dungmali; LSI Dūngmāli)
- 52ワリン語 L(Waling; LSI Waling)
- 53ヤンプ語 (Yamphu)

- 54ヤンベ語 (Yamphe)
- 55北ロルン語 L(Northern Lorung 【Lohorong; LSI Lōhōrōng】)
- 56南ロルン語 L(Southern Lorung 【Lohorong; LSI Lōhōrōng】)
- 57ヤッカ語 L(Yakha)
- 【=ヤカ語 (Yakha; LSI Yākhā)】
- 58ルンバ・ヤッカ語 (Lumba-Yakha)
- 59チンタン語 L(Chhingtang; LSI Chhingtāng)
- 60ムガリ語 L(Mugali)
- 【=ランビション語 (Lambichhong; LSI Lāmbichhōng)】
- 61ベルハリヤ語 (Belhariya)
- 62アトパリヤ語 (Athpariya)
- 63パンドゥワリ語 (Phangduwali)
- 64チュルン語 (Chhulung)
- 【=パンジュ語 (Phanju)】
- 65チャッタレ・リンブ語 (Chhatthare Limbu)
- 66リンブ語 L(Limbu=LSI)
- 67サーム語 (Saam)
- 68リンキム語 (Lingkhim)
- 69ディマール語 L(Dhimal; LSI Dhīmāl)
- 70レプチャ語 L(Lepcha=LSI)
- 【=ロン語 (Rong; LSI Rōng)】
- 71トト語 L(Toto; LSI Tōtō)

表2 東ネパールのヒマラヤ諸語の主要分布域

Language Names (言語名)	Main Area of Distribution (主要分布域)	
	District(s) (郡)	Zone(s) (県)
³⁰ タミ語 L(Thami)	Dolakha, Sindhuli	Janakpur
³¹ ハユ語 L(Hayu)	Kabre Palanchok	Bagmati
	Ramechhap	Janakpur
³² スワル語 L(Sunwar)	Ramechhap, Dolakha	Janakpur
	Okhaldhunga	Sagarmatha
³³ チャーセ語 L(Chourase)	Okhaldhunga, Udayapur,	Sagarmatha
	Khotang	
³⁴ バヒン語 L(Bahing)	Solukhumbu, Okhaldhunga	Sagarmatha
³⁵ トゥルン語 L(Thulung)	Solukhumbu, Okhaldhunga,	Sagarmatha
	Khotang	
³⁶ カリン語 L(Khaling)	Solukhumbu	Sagarmatha
³⁷ ジェルン語 (Jerung)	Sindhuli	Janakpur
	Okhaldhunga	Sagarmatha
³⁸ ティルン語 (Tilung)	Khotang	Sagarmatha
³⁹ ドゥミ語 L(Dumi)	Khotang	Sagarmatha
⁴⁰ コイ語 (Koi)	Khotang	Sagarmatha
⁴¹ クルン語 L(Kulung)	Solukhumbu	Sagarmatha
	Sankhuwasabha, Bhojpur	Kosi
⁴² ナチェリン語 L(Nachhering)	Khotang	Sagarmatha
⁴³ チュクワ語 (Chukwa)	Bhojpur	Kosi
⁴⁴ 西メオハン語 (Western Meohang)	Sankhuwasabha	Kosi
⁴⁵ 東メオハン語 (Eastern Meohang)	Sankhuwasabha	Kosi
⁴⁶ チャムリン語 L(Chamling)	Khotang, Udayapur	Sagarmatha
⁴⁷ ポルマチャ語 (Polmacha)	Taplejung	Mechi
⁴⁸ プマ語 (Puma)	Khotang	Sagarmatha
⁴⁹ サンパン語 L(Sangpang)	Khotang	Sagarmatha
	Bhojpur	Kosi
⁵⁰ バンタワ語 (Bantawa)	Khotang, Udayapur	Sagarmatha
	Bhojpur	Kosi
	Sunsari, Dhankuta	Kosi
⁵¹ ドゥンマリ語 L(Dungmali)	Bhojpur	Kosi
⁵² ワリン語 L(Waling)	Bhojpur	Kosi
⁵³ ヤンプ語 (Yamphu)	Sankhuwasabha	Kosi
⁵⁴ ヤンベ語 (Yamphe)	Sankhuwasabha	Kosi
⁵⁵ 北ロルン語 L(Northern Lorung)	Sankhuwasabha	Kosi
⁵⁶ 南ロルン語 L(Southern Lorung)	Dhankuta	Kosi
⁵⁷ ヤッカ語 L(Yakkha)	Sankhuwasabha, Dhankuta	Kosi
⁵⁸ ルンバ・ヤッカ語 (Lumba-Yakkha)	Dhankuta	Kosi
⁵⁹ チンタン語 L(Chhingtang)	Dhankuta	Kosi
⁶⁰ ムガリ語 (Mugali)	Dhankuta	Kosi
⁶¹ ベルハリヤ語 (Belhariya)	Dhankuta	Kosi

62アトパリヤ語 (Athpariya)	Dhankuta	Kosi
63パンドゥワリ語 (Phangduwali)	Sankhuwasabha	Kosi
64チュルン語 (Chhulung)	Dhankuta	Kosi
65チャッタレ・リンブ語 (Chhatthare Limbu)	Terhathum, Dhankuta	Kosi
66リンブ語 ^L (Limbu)	Terhathum, Taplejung, Panchthar Sikkim, West Bengal	Kosi Mechi India
67サーム語 (Saam)	?Sankhuwasabha Ilam	Kosi Mechi
68リンキム語 (Lingkhim)	Ilam	Mechi
69ディマール語 ^L (Dhimal)	Morang Jhapa	Kosi Mechi

ネパール国内のレプチャ語の母語人口は、1961年の国勢調査で1,272人となっている。【母語人口：(インド) 23,706人 (1961)】

2.2.3.1.2. トト語 (Toto, *LSI T̄ōt̄ō*)

インドの西ベンガル州ジャルパイグリ地方で話されている言語である。【母語人口：383人(1961)】

既述のように、東ネパールのライ・リンブ語系の言語の分布は、極めて複雑であり、幾つかの言語についてはその方言分類も複雑である。次に、ライ語系言語の中でも最大の言語であるバンタワ語【Rai (1985) はその母語人口を約35,000人と推定】を例にとってその分布と方言分類をみると次の通りである。

I. 主要分布域の諸方言：

1. 東部またはダンクタ方言：コシ県スンサリ郡のムガ、チュンバン (Chung-bang), コク (Khoku), チンタン (Chhintang), アハレ (Ahale), ベデタール (Bhedetar), バラハチェトラ (Barahachhetra), パンチャカニャ (Panchakanya), ブディモラン (Budimorang) の諸方言, メチ県イラム郡のルンスン (Rungsung) 村のルバンチャ (Rubancha) 部族の方言等
2. 南部方言【特に東部への移住者の間で「ハンキム (Hangkhim) (部族名)」方言と呼ばれている】：
 - i. 西部下位方言群：コシ県ボジュプール郡の南西地域のバランカ (Balankha), バシコラ (Basikhora), ドゥムマナ (Dummana), ハサンプール (Hasanpur), パンチャ (Pangcha), パワラ (Pawala), テインディンカ (Thingdingkha) 等の行政村の諸方言

西 ヒマラヤ諸語の分布と分類(上)

ii. 東部下位方言群：

- a. ボジュプール郡南東地域のホムタン・シンドゥラン (Homtang-Sindrang), パトレパニ (Patlepani), ラニバス (Ranibas) (ソヤン Soyang 部族) 等の諸方言
- b. ウダヤプール郡北西地域のバサハ (Basaha), チャウダンディ (Chaudandi), カトゥンジェ (Katunje), モイナモイニ (Moinamoini) 等の諸村の方言 (東部方言と南部方言の中間的方言)

3. 西部方言：サガルマタ県コタン郡のほとんどの方言(カフレバンジャンKahule Bhanjyang, リクワ Likuwa (ディクパ Dikhupa 部族), オプルカ Oplukha, サワカタハリ Sawa Katahari 等の諸方言) とコシ県ボジュプール郡のオクレ (Okhre) 行政村のメク・レグン (Mekhu Legun) (部族名) 方言及び同郡のコット (Kot) 行政村のいわゆる「ヤンマ (Yangma)」(部族名) 方言 (この下位方言群の周辺の方言)

4. 中央方言：北部方言と南部方言の中間的方言

- i. 「より南部方言的」下位方言：バイクンテ (Baikunthe), ダルガオン (Dalgaon), ドドゥレカニ (Dodhlekan), コット及びレックカルケ (Lekharke) 等の行政村の諸方言 (「ワナ (Wana)」(部族名) 方言?)
- ii. 「より北部方言的」下位方言：バインシパンカ (Bhainsipankha), ボジュプール, ボキム (Bokhim) 等の行政村の「ボキム」(部族名) 方言

5. 北部方言【東部への移住者の間でしばしばディパリ (Dipali) (部族名) またはチナムケリ (Chhinamkheli) (部族名) と呼ばれる】：ボジュプール郡のアンナプルナ (Annapurna), チナマク, ヘラウンチャ (Helaungcha), グプテスウォール (Gupteswor), カワ (Khawa), ナギ (Nagi), シッデスウォール (Sidde-swor), ティンマ (Timmer) 等の行政村の諸方言

II. 主要分布域外の諸方言：

6. 「アムチョケ (Amchoke) (部族名)」方言：メチ県のイラム郡とパンチタール郡に散在する方言
7. 「ロンマハン (Rongmahang) ディパリ (部族名)」方言【「ルンマ (Rungma)」または「ルン (Rung)」(部族名) 方言とも呼ばれる】：パンチタール郡の方言

Hansson は、更に31部族名を挙げてこれらの部族が共通方言群と大差のないパンタワ語方言を話すと述べている。

さまざまな民族や部族が同じ地域、同じ村に共住し、ネパール語またはその地域の

主要民族の言語を公用語としながらも、複数の言語が同時に使用されているといった状況は、程度の差こそあれ、山間僻地を除き、現在のネパール全土にみられる状況であろうと思われるが、具体的な言語使用状況に関する社会言語学的研究は僅かである。この他にも、ネパールは、言語接触による言語の干渉、変化、消滅といった興味ある現象のいわば実験場の観があり、言語の語彙収集や音韻・文法の記述研究以外にこのような分野でも今後調査研究が行われることが望ましい。

既に述べたさまざまな理由からヒマラヤ諸語の話者人口の信頼できる数字を挙げることは不可能であるが、一応の目安としてこれまでに挙げた数字を単純に総計すると、約189万人となるが、1960年代以降にまたはそれ以前にも母語人口が不明の言語もあるので、全体として190万人ほどしておく。ネパールの少数民族言語の場合には、その話者数は常に減少傾向にあり、おそらくこの現象はインドの少数民族言語についても同じ傾向がみられるのではないと思われる。従って、現時点(1990年)では、1981年のインドとネパール両国の国勢調査当時よりもヒマラヤ諸語の母語人口はむしろ減少していると考えなくてはならないであろう。

3. ヒマラヤ諸語研究の現状と資料

3.1. 1960年代前半までの概観

19世紀初頭にヒマラヤ諸語の資料の広範な収集と研究が始まって既に1世紀半を越える年月が経った。しかし、1960年代までに公開されたヒマラヤ諸語の研究論文は、それに含まれる言語数に比してあまりにも少なく、いくつかの言語を除けば、収集された資料は、質量共に現在の言語学的基準からみれば、決して満足できるものではなかった。これは、ヒマラヤ諸語の言語が、ネワール語以外は「未開の(wild)」部族の言語であったというだけでなく、その多くが国境にほど近い大ヒマラヤ山脈の奥深い谷間で話されており、ネパールに至っては、1950年代まで鎖国状態であったという事情によるものであろう。

このような状況にもかかわらず、ヒマラヤ諸語についてある程度の情報が得られるようになったのは、19世紀にネパール及びネパール以東のヒマラヤ地域から中国にかけての広大な地域で話されている多くのチベット・ビルマ語系言語の資料を採録した B. H. Hodgson, マガル語の概説を著した J. Beams, リンブ語やレプチャ語の資料を残した A. Campbell, リンブ語の辞書の著者 H. W. R. Senior やレプチャ語の辞書と文法書を著した G. B. Mainwaring, 19世紀後半から20世紀初頭にかけてインド北

西部のヒマラヤ諸語を調査・研究した人々、A. H. Francke, H. A. Jäschke (この2人はむしろチベット語学者として著名)、J. D. Cunningham, A. Gerard, A. H. Diack, T. R. Joshi や T. G. Bailey 等 (いずれも本業は軍人、行政官、技術者あるいは宣教師) の努力によるものであった。また、この時期にネワル語研究やヒマラヤ諸語を含めた広範な通時的研究を行った A. Conrady と、S. Konow に先立ちインドのチベット・ビルマ語系言語の系統的分類を試みた E. L. Brandreth の名前も忘れてはならない。Konow の編纂になる *LSI* の第Ⅲ巻第Ⅰ部は、いわば、この第1期のヒマラヤ諸語研究の集大成といえるものであった。

これに続く、1960年代までのヒマラヤ諸語研究の第2期といえる数十年間は、資料の収集では、第1期と比べて、遙かに実りの少ない時期であった。S. N. Wolfenden がインドで採録した東ネパールのいくつかのヒマラヤ諸語に関する資料以外には、J. Burton-Page のグルン語の音韻に関する小論文位しかこの時期に公刊された資料はない。この時期は、むしろ R. Shafer のヒマラヤ諸語の系統的分類に関する優れた通時言語学的研究と H. Jørgensen の古典ネワル語の辞書や文法書の編纂で代表される時期であるといえよう⁴⁹⁾。

3. 2. 1960年代後半以降の研究概観

ヒマラヤ諸語研究のみならず、ヒマラヤ地域研究を大きく発展させた歴史的事を挙げるとすれば、それは1951年のネパールの王政復古であり、それに続くネパールの開国である。これを契機に、社会科学、自然科学の多くの専門家が研究のためにネパールを訪れるようになる。

1960年代以降の第3期のヒマラヤ諸語の本格的実地調査・研究は、現地語の文字化や聖書の現地語での翻訳を目標とする言語学者の世界的組織 Summer Institute of Linguistics (=SIL) がネパールのトリブワン大学 (Tribhuvan University) と共同して行った「ネパールの言語調査 (Linguistic Survey of Nepal)」プロジェクトに始まるといえよう⁵⁰⁾。

49) ここに挙げた諸学者の論著は、後でその内容に直接触れるもの以外は参考文献に含めていないが、[SHAFFER 1957, 1963; HUFFMAN 1986] または [HALE 1982] を参照されたい。

50) 1969年の12月、筆者がネパールを訪れた頃は丁度 SIL の調査が始まって間もない頃であり、トリブワン大学のキルティプール (Kirtipur) ・キャンパスでのワーク・ショップ等も大変活気に溢れていた。当時既に SIL のメンバーでカリン語を調査していた鳥羽季義氏、Chief Consultant であった E. A. Hale 氏等数名の SIL の研究者にお会いできたのもこの時であった。翌年3月にかけてのネパール滞在中、両氏にはいろいろとお世話になり、その後も資料等お送り頂いたことを記し、ここに改めて謝意を表したい。

1978年にこのプロジェクトは中止され、SILのネパール支部も撤収するが、1981年から1987年には同大学と西ドイツが提携して、新たな「ネパールの言語調査」プロジェクトが行われた。SILのプロジェクトは、ネパール全土のあらゆる系統の言語を調査対象としたのに対して、西ドイツのそれは、対象を「東部開発地域 (Eastern Development Region)」(東ネパール)の4区 (zone) 16郡 (district) の諸言語に限定したより肌理の細かい方言調査の形式を取った。

SIL所属の言語学者による最初のプロジェクトの成果は、既に数多くの論文・著書として発表されており、ヒマラヤ諸語研究の発展に大きく貢献して来た。現在も、当時ネパールで直接調査研究に当たった言語学者で、SIL撤収後も個人的にネパールを訪れ、調査研究を継続している人々がいる。西ドイツのプロジェクトの成果は、現在までに数編の論文と著書が公刊されたに過ぎない。このプロジェクトでは、新しい試みとして、調査者に西ドイツとネパールの言語学者に訓練されたいわば「素人の」ネパール人を採用して行われたが、その結果、不幸にして、採録された資料の質に問題のあるものもあるといわれる。しかし、そのプロジェクトで集められた資料の量は膨大であり、今後それを利用した多くの成果が期待される。また、この2つのプロジェクトを通して、数名のネパール人言語学者が育成されたことも特筆に値する。これまでにこの両プロジェクトに参加した言語学者以外の者も含め、ネパールを訪れた欧米諸国(特に、米国、英国、フランス、西ドイツ、オーストラリア)及びインド、ネパール、日本等の言語学者により多くのヒマラヤ諸語の調査研究が進められて来た。現在、言語学者の関心は、特に東ネパール地域のヒマラヤ諸語の「代名詞化」言語に寄せられている。

最後に、前二者とは異なり、文献学的色彩の強いものであるが、現在進行中のプロジェクトとして、「古典ネワル語辞典 (Classical Newari Dictionary)」プロジェクトが挙げられる。このプロジェクトは、ネパール人言語学者 K. P. Malla を代表者とする「ネワル語辞典委員会 (Nepal Bhasha (Newari) Dictionary Committee)」により1983年に始められた。当初 Amarasimha の編纂した『サンスクリット・ネワル辞典

カトマンズで鳥羽氏や Hale 氏に会うまでは SIL の調査について日本でも聞いていなかったので大変驚いた次第である。筆者は、ヒマラヤ諸語でも1つ2つ聞ければといった気持ちでデリーで購入したばかり LSI の第3巻の第1部(復刻版)だけを持ってカトマンズ入りをした。滞在中にせめてヒマラヤ諸語の分布を概念的にでも把握しようと努力したが、まずまともな地図がなかったことや多くの言語の分布域が当時まだはっきりしていなかったこともあり、結局あまり分からないまま帰国した。20年経った現在、幾つかの言語を除き、20年前までには全く知られていなかった言語も含め、その分布概念がほぼ正確に掴めるようになったことを思うと感慨深いものがある。本稿の始めに「隔世の感」があると述べたが、筆者にとってはこれは実感なのである。

『*Amarakośa*』の11種の写本(1381~1711)等を基に古典ネワル語辞典の編纂を行ったが、1985年にほぼ完了し、1986年以降は、第2段階として、文学、歴史、法律等のさまざまなジャンルの編年の明らかな25種の古文獻を選び、ネワル語彙の抽出編纂を行って来たが、1989年にはこれも完了する予定であるという。採録件数は、重複項目を除き、3万5千件以上に上るといふ。また、これと平行して、ネワル語の古文書の収集と保存の努力も行われており、今後言語だけでなく、社会、宗教、歴史といった幅広いネワル文化研究の進展が期待される。

一方、インド西北部でのヒマラヤ諸語の調査は、専ら2人のインド人言語学者 D. D. Sharma (マンチャト語, カナウル語) と S. R. Sharma (ブナン語, ティナン語, ランロ語, マンチャト語) により行われて来た。唯一の例外は、1977年~1978年にインドのウッタル・プラデシュ州のランパ語を調査し、博士論文にまとめたドイツ人言語学者 Zoller である。このランパ語域周辺からネパールの極西部にかけての地域は、言語調査の空白地帯といえる地域である。

3.3. 1960年代後半以降のヒマラヤ諸語の資料

上述のように、現在ヒマラヤ諸語として挙げられる言語数は71言語にのぼるが、この71言語中、音韻体系・語彙・テキスト等で信頼のおけるまとまった情報や資料が利用できる言語は、次の17言語に過ぎない(本節では、以下【 】内は1960年代以降の当該言語の主要研究者、論著の著者名であるが、必要に応じて()内に出版年を付してある)。

なお、1985年までに公刊された各々の研究者の論著は、E. A. Hale 著『チベット・ビルマ諸語に関する研究 (Research on Tibeto-Burman Languages)』(1982)の「参考文献」と F. E. Huffman の『東南アジア大陸部の言語の言語学書誌と索引 (*Bibliography and Index of Mainland Southeast Asian Languages and Linguistics*)』(1986)に挙げられているが、特に後者は詳しい。ただ、このような文献目録の常として、いずれもかなりの誤植や誤りに加え、当然加えられるべき論著が脱落していたりするので注意を要する。

マンチャト語【D. D. Sharma, S. R. Sharma】, カナウル語【D. D. Sharma】, ランパ語【C. P. Zoller】, マガル語【G. Shepherd, S. Subba】, タカリ語【A. M. Hari】, グルン語【W. W. Glover, J. R. Glover】, マナン語【星(実千代), 長野(泰彦)], チェパン語【R. C. Caughley】, タマン語【M. Mazaudon, D. M. Taylor, F. Everitt】, ネワル語【E. A. Hale, I. Sresthacharya, K. P. Malla, T. R. Kanskar, S. Lienhard, U. Kölver, B. Kölver, J. Tuladhar, S. K. Joshi, R. K. Sprigg, D. Hargreaves,

C. Genetti, R. L. Shrestha, K. Tamot】、ハユ語【B. Michailovsky】、スンワル語【D. Bieri, M. Schulze, Genetti】、バヒン語【Michailovsky】、カリン語【S. Toba (鳥羽季義), I. Toba, Michailovsky】、トゥルン語【N. J. Allen】、バンタワ語【Sprigg, N. K. Rai】、リンブ語【Sprigg, C. B. Hanneman, Michailovsky, A. Weidert, G. L. van Driem】⁵¹⁾。

この17言語中、タマン語、スンワル語、バヒン語を除く14言語には、ある程度まとまった文法記述もある。特に、ランバ語【Zoller (1983)】、チェパン語【Caughley (1981)】、グルン語【W. W. Glover (1974)】、ネワル語【U. Kölver (1976), Malla (1985a)】、ハユ語【Michailovsky (1980)】、リンブ語【(Weidert & Subba (1985), Driem (1987a)】には優れた記述文法がある。また、問題があるが、マンチャト語【D. D. Sharma (1982)】、カナウル語【D. D. Sharma (1988a)】やバンタワ語【Rai (1985)】(主に形態論)の記述文法も有用である。トゥルン語【Allen (1975)】の文法概要は著者が人類学者であることもあって、問題も多く、記述漏れや不完全な分析も多いが、1960年代以降において初めて複雑な代名詞化言語を記述したものであった。この他、タマン語【Mazaudon (1976)】とカリン語【S. Toba (改訂版: 1983)】の文法素描等も参考になる。マガル語【Subba (1972)】の記述文法とマナン語【星 (1986)】の文法概要は、有用ではあるが、観察や分析に誤りと思われる点が多く含まれており、資料として参照する際には注意が必要である。これらの資料の問題点については、三省堂言語学大辞典の第3巻の当該項に指摘してあるので参照されたい。

なお、D. D. Sharma [1982], Zoller [1983], Malla [1985a], Rai [1985] は、上記の文献目録から漏れている。

この他に、カイケ語【J. F. Fisher】(語彙)、カム語【D. E. Watters】(音韻、文法、語彙)、タカリ語【Hari, Mazaudon】(音韻、語彙)、シャン語【長野】(語彙)、ガレ語【L. L. Seaward, 西 (義郎)】(音韻、語彙)、クルン語【Andreas Holzhausen, Anna Holzhausen】(音韻、文法)、クルン語の方言とされるソタン語【Hari】(音韻)、ドゥミ語【Driem】(音韻、動詞の活用)⁵²⁾、チャムリン語【K. H. Ebert】(話法、人称接辞)、ロルン語【Weidert】(人称接辞)、レプチャ語【Sprigg】(文字、音韻)に関しては部分的な研究や語彙が利用できる。

51) ここでは各言語の研究者名は、一応本人単著の論文や著書のある学者のみに限定して挙げてあるが遺漏がないという確信はない。また、一部の研究者は当該言語の研究では既に現役でない者もいるであろう。

52) なお、Driem は、既に *Grammar of Dumi* (『ドゥミ語文法』) の執筆を終えており、本年中に Mouton Grammar Library series 中の1冊として、Mouton de Gruyter (Berlin) から出版される予定であるという(私信)。

グルン語【J. R. Glover & D. B. Gurung (1979)】とネワル語【Sresthacharya, J. N. Maskey & Hale (1971); 改訂版(2巻)第1巻(1987)】には、会話の手引や入門書も出版されている。

ネパールの東部開発地域の「ネパールの言語調査」プロジェクトは例外として、この地域の言語調査は、周辺の他の幾つかの方言も参考程度に調査されることがあっても、対象言語の1つの方言(特に、その言語の代表とされる方言)に限定されているのが普通であり、対象言語の主要分布域全体にわたって調査点を選んで方言調査を行った例は、グルン語【W. W. Glover & J. K. Landon (1980)】しかない。一方、東ネパールの言語調査は、本稿の第2節及び第3節で随所に紹介したように、最近漸くHansson [1988]により暫定的な形でまとめられた。この論文は当該地域の言語の分類を目的としたものであるが、それぞれの言語の分布域や方言分類がかなり詳細に述べられている。しかし、具体的な資料は含まれていない。

以上のほとんどの言語には、ある程度まとまった語彙が公刊されている。特に、GSDPSLN (1973) の Part IV (Hale 編) は語彙表で、グルン語 (ガチョック方言)、タマン語 (サフ方言)、タカリ語、マガル語 (ヤンチョック方言)、カム語 (タカ方言)、カイケ語、スンワル語 (サブラ Sabra【ジャナクプール県ラメチャップ郡】方言)、カリン語 (カスタップ方言)、ネワル語 (カトマンズ方言)、チェパン語 (マイセラン方言) の10種のヒマラヤ諸語の語彙が収録されている。収録語彙がほとんど名詞類に限られているカイケ語を除けば、各言語の収録語彙は1800項目ほどからなっている。更に、カム語【Watters & Watters (1973)】、グルン語【Glover, Glover & D. B. Gurung (1977)】、ネワル語【橋本(萬太郎) (1977), Sresthacharya (1963, 1981, 1987), T. L. Manandhar (1986)】、カリン語【Toba & Toba (1975)】、クルン語【K. P. Rai, Holzhausen & Holzhausen (1975)】には、別個に語彙集 (glossary) や辞書が出版されている。ネワル語を除けば、いずれも収録語数はそれほど多くない。

ヒマラヤ諸語の類型的研究は、ネパールの言語を(複)代名詞化言語とそれ以外の言語に分類した Hodgson に既に始まるといえる。しかし、現在までのところ、Hale & Watters [1973] と Weidert [1985] 等を除けば、形態法、統語法に関しては未だにまとまった類型的研究はなく、僅かに音韻に関してのみ、Michailovsky の優れた論文 [1988] があるだけである。

共時的研究に比べ、ヒマラヤ諸語の通時的研究は、全体的にみて、漸くその緒に着いたばかりであるといえよう。19世紀末期に既に優れた文法と辞書が利用できたレプチャ語は、チベット・ビルマ諸語の比較研究に重要な役割を果たして来ただけでなく、

そのアウストロアジア的要素を考慮した系統論【R. A. D. Forrest (1962)】を含め、借用語や系統的的位置づけに関する幾つかの研究【J. J. Bauman (1976), Sprigg (1984等), N. C. Bodman (1987)】が発表されている。『言語学大辞典』第3巻の「レプチャ語」参照)。ネパールのヒマラヤ諸語では、祖語の再構の容易なタマン語群に関する比較研究【R. S. Pittman & J. R. Glover (1970), Mazaudon (1973a等), Nishi (1972等)】が例外的に進展をみせている(『言語学大辞典』第2巻の「タマン語群」参照)。タマン語群以外の言語の通時の研究としては、ライ・リンブ語系の動詞接辞等に関する論文【Michailovsky (1985), Sprigg (1984等), Driem (1989)】がみられるのみである。

ヒマラヤ諸語の系統的分類に関しては、ヒマラヤ地域の言語に特定されないものも含め、1970年代以降にも幾つかの論文がある。上述の SIL による「ネパールの言語調査」プロジェクト以降の新発見の言語を含めた分類の試みとして、ネパールのチベット・ビルマ語系言語全体を対象とした W. W. Glover [1970c, 1971b, 1974], ロロ・ビルマ語系(Lolo-Burmese)【=Burmese-Yipho】を除いたチベット・ビルマ語系言語全体を対象とした Thurgood [1985] や「東部開発地域」のライ・リンブ語系の一部を対象とした W. Winter [1987] と全体を対象とした Hansson [1988] 等があるが、系統的分類はヒマラヤ諸語だけに関しても、まだ多くの課題を残している。詳細は次節【系統的分類】を参照されたい。

この地域の研究で現在特に関心を持たれており、共時・通時の両分野に跨るテーマを挙げるとすれば、代名詞化(pronominalization)や能格性(ergativity)といった問題であろう。チベット・ビルマ諸語に関しては、1970年代にこれらのテーマを最初に体系的に論じたのは Bauman [1975] であるが、その後ヒマラヤ諸語を中心に、Caughley [1981, 1982, 1983], Watters [1975], Weidert [1985] や S. DeLancey [1988等] がこの代名詞化の類型や代名詞化体系の発達を論じている。1970年代末から DeLancey [1980等] は、ヒマラヤ諸語も例に取り、チベット・ビルマ諸語全体にかかわるさまざまなテーマ(能格性、格標識、方向辞、モード、代名詞化、語彙素の文法化、順接形と離接形等)を取り上げ、いわばチベット・ビルマ諸語研究の活性化に貢献している。これらのテーマの幾つかは後で詳述する。

なお、1970年代末までのネパールのヒマラヤ諸語の研究状況やその系統的分類については、[HALE 1982] に詳説されている。

現在ネパールを中心とするヒマラヤ諸語やヒマラヤ語系諸民族・部族に関する論文は、特に次の3つの雑誌に多く掲載されている。

① *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* (略称: *LTBA*) (Berkeley, USA) は、1974年に創刊されたチベット・ビルマ語派の言語の専門雑誌(春・秋季刊)であるが、実際にはシナ・チベット語族の他の語派やアウストロアジア語族の言語に関する論文も数多く掲載されている。

② *Nepalese Linguistics* (略称: *NL*) (Kathmandu, Nepal) は、ネパール言語学会(1980年創設)の機関誌(不定期刊)である。

③ *Contributions to Nepalese Studies* (略称: *CNS*) (Tribhuvan Univ., Kathmandu, Nepal) は、Research Centre for Nepal and Asian Studies (略称: *CNAS*)【旧称: Institute of Nepal and Asian Studies (略称: *INAS*)】発行の学術雑誌(季刊)である。

この外に、(Series A) から (Series D) までに分かれて、論文だけでなく、単刊や論文集も出版される *Pacific Linguistics* (Canberra, The Australian National Univ.), ヒマラヤ研究の専門誌 *Kailash* (Kathmandu, Nepal), インド言語学会の機関誌 *Indian Linguistics* (略称: *IL*) (Pune, India), 上記研究者の所属機関の紀要、研究報告類や欧米の東洋学関係の専門誌等に掲載されるものもある。

また、この分野の論文が多く発表される学会(いずれも年1回開催)には、International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (略称: Sino-Tibetan Conference)「国際漢蔵学会」(開催地不定)とネパール言語学会の定期大会(開催地: Tribhuvan University, Kathmandu)がある。後者は、常に多くの外国人発表者や講演者の参加する国際色の強い学会である。

付 記

1987年3月『国立民族学博物館研究報告』11巻4号に、本稿に関連の深い「現代チベット語方言の分類」と称する小稿を発表したが、その後入手した資料等により、若干の訂正を要する部分明らかになった。以下にそれらの訂正箇所を示す。

- ① 中国国内の地名中の2地名がアリ地区=ガリ地区、アバ・チベット族自治州=ガバ・チベット族自治州のように読み方が不統一になっているが、いずれも前者は漢字読みで、後者がチベット語読みである。
- ② p. 859, 1. 9: インドの地名 Kyelang/Kyelong は、Keylang/Keylong とともに綴られるが、通常ケロンとこの地方の人々は呼んでいるようである。
- ③ p. 859, fn. (31), 1. 1: トットケ (stod-skad) → トエケー (.....)
- ④ p. 862, 1. 9: C3=r/lj/w → C3=r/lj/w
- ⑤ p. 864, fn. (33), 1. 12b:でも [j] →でも [j]
- ⑥ p. 860, 1. 20: サンクワシャバ (Sankhuwa Shabha) → サンクワサバ (Sankhuwasabha)
- ⑦ p. 886, 1. 6b: 「髪」 *dbu-skra>u:ta (高調) →> utra (高調)

- ⑧ p. 900 の「チベット語方言名」の3.18. : キロン方言…… (チベット自治区山南地区) → ……
 (チベット自治区シガツェ地区)
- ⑨ p. 900 の 5.20: ニンティィ …… 方言 (同上【雲南省デチェン・チベット族自治州】) → ……
 (チベット自治区ラサ地区)

謝 辞

本稿は、国立民族学博物館共同研究 (60~61年度) アッサム地域研究 (代表者: 栗田靖之) の成果の一部である。本稿を書くにあたり、①石井 溥氏 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授) (1970年以降、長年にわたり、ネパールに関する資料や情報を提供して頂いた)、②長野泰彦 (国立民族学博物館助教授) (資料を提供して頂いただけでなく、本稿を『研究報告』に掲載して頂くにあたり、面倒をお掛けした)、③ Professor Dr. W. Winter (キール大学) 及び④ Dr. G. Hansson (現在刊行中の『言語学大辞典』(三省堂) の「ヒマラヤ諸語」の諸項目及び本稿を執筆するにあたり、東ネパールの「言語調査」プロジェクト (本文第3節参照) の主任言語学者を務められた Winter 教授にライ・リンブ語系の諸言語に関する情報提供をお願いしたところ、1年ほどかけて Hansson 博士がまとめたヒマラヤ諸語の分布と分類に関する詳細な情報を提供して下さった)、⑤ Dr. S. R. Sharma (デカン・カレッジ大学院助教授) インドのヒマチャル・プラデシュ州のヒマラヤ諸語とチベット語方言の資料と情報を惜しみなく提供して頂いた) と⑥ Professor K. P. Malla (トリブワン大学) (ネワル語辞典編纂プロジェクトやその他のネパールのヒマラヤ諸語に関する情報を提供して頂いた) の諸氏に特にご助力頂いたことを記して深甚の感謝の意を表したい。

文 献

以下1960年代後半以降の文献を中心に挙げてある。それ以前の文献は、本文及び註で特に取り上げたものだけを挙げてある。1985年までのヒマラヤ諸語の文献を含む網羅的文献目録としては、Shafer [1957, 1963], Hale [1982] と Huffman [1986] 等があり、特に Huffman が詳しい。

略称:

- BSOAS:** *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. London.
- BDC:** *Bulletin of the Deccan College Research Institute*. Poona [=Pune], India.
- GSDPSLN:** Hale, E. A. (ed.), *Clause, Sentence and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal* (4 parts) (SILP 40). Kathmandu: SIL and Tribhuvan Univ.; Norman: Univ. of Oklahoma. 【Part II は D. E. Watters と共編】
- GNS:** *Contribution to Nepalese Studies*. Journal of the Institute of Nepal and Asian Studies 【(改称) Research Centre for Nepal and Asian Studies】. TU, Kirtipur, Kathmandu.
- GTN:** *Guide to Tone in Nepal*. SIL, Kathmandu.
- GLSN:** *Conference of the Linguistic Society of Nepal* 発表論文.
- CVLN:** *Comparative Vocabularies of Languages of Nepal*.
- INAS:** *Institute of Nepal and Asian Studies*. Kirtipur, TU.
- JAOS:** *Journal of the American Oriental Society*. New Haven.
- JASB:** *Journal of the Asiatic Society of Bengal*. Calcutta.
- JRAS:** *Journal of the Royal Asiatic Society*. London.

- Kailash*: *Kailash, A Journal of Himalayan Studies*. Kathmandu.
LSTA: Thurgood, G., J. A. Matisoff and D. Bradley (eds.), *Linguistics of the Sino-Tibetan Area: The State of the Art* (Papers presented to Paul K. Benedict for his 71st birthday). PL ser. C 87, 1985.
LTBA: *Linguistics of the Tibeto Burman Area*. Univ. of California, Berkeley.
NL: *Nepalese Linguistics*. Linguistic Society of Nepal, TU, Kirtipur, Kathmandu.
NSL: Hale, E. A. (ed.), *Nepal Studies in Linguistics*. Kirtipur: SIL and INAS, I (1973) and II (1975).
PBLS: *Proceedings of the Berkeley Linguistic Society*. Univ. of California, Berkeley.
PL: *Pacific Linguistics*. Canberra, The Australian National Univ. 【Ser. A: 論文, Ser. B: 単刊, Ser. C: 著書 (含論文集, 辞書), Ser. D.: 特別刊行物 (地図, 資料)】
PLIN: Trail, R. L. (ed.), *Patterns in Clause, Sentence, and Discourse in Selected Languages of India and Nepal* (4 parts). Kathmandu: SIL and TU; Norman: Univ. of Oklahoma, 1973.
POD: Grimes, J. E. (ed.), *Papers on Discourse* (SILP 51). Arlington: SIL, 1978.
SILP: SIL Publications in Linguistics and Related Fields.
SIL: Summer Institute of Linguistics.
STC: Sino-Tibetan Conference: International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (国際漢蔵学会) 発表論文。
TBPS: Tibeto-Burman Phonemic Summaries.
TSTBLN: Hale, E. A. and K. L. Pike (eds.), *Tonal Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal* (4 parts) (Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics 3). Urbana: Univ. of Illinois, 1970.
TU: Tribhuvan University.
ZDMG: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*. Wiesbaden.

ALLEN, N. J.

- 1959 *Sketch of Thulung Grammar, with Three Texts and a Glossary* (*East Asia Papers* 6). Ithaca, New York: Cornell Univ. China-Japan Program.
 1975 Byanshi Kinship Terminology: A Study in Symmetry. *Man* (n.s.) 10: 80-94.
 1978 Sewala Puja Bintilla Puja: Notes on Thulung Ritual Language. *Kailash* 6(4): 237-256.

ATKINSON, E. T.

- 1981 *The Himalayan Gazetteer* (3 vols.). New Delhi: Cosmo Publications. (復刻版)【原本: *The Himalayan Districts of the North Western Provinces*, Vol. XI of the *Gazetteer N. W. P.* Allahabad: Government Publications, 1882】

BAILEY, T. G.

- 1908 *The Languages of the Northern Himalayas* (*RAS monograph 12*). London: RAS.
 1909 A Brief Grammar of the Kanauri Language. *ZDMG* 63: 661-687.
 1910 Kanauri Vocabulary in Two Parts: English-Kanauri and Kanauri-English. *JRAS*: 695-705.
 1911 Kanauri Vocabulary in Two Parts: English-Kanauri and Kanauri-English. *JRAS*: 315-364. 【1911年に同名のタイトルで (*RAS monograph 13*) として再刊 (London, RAS)】
 1920 *Linguistic Studies from the Himalayas* (*RAS monograph 18*). London: RAS.

BAJPAI, S. C.

- 1987 *Lahaul-Spiti, a Forbidden Land in the Himalayas*. New Delhi: Indus Publishing Co.

BAUMAN, J. J.

- 1974 Pronominal Verb Morphology in Tibeto-Burman. *LTBA* 1(1): 108-155.
 1975 Pronouns and Pronominal Morphology in Tibeto-Burman. Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley.

- 1976 An Issue in the Subgrouping of the Tibeto-Burman Languages: Lepcha and Mkir. 9th STC.
- 1979 A Historical Perspective on Ergativity in Tibeto-Burman. In F. Plank (ed.), *Ergativity: towards a Theory of Grammatical Relations*, New York: Academic Press, pp. 419-433.
- BENEDICT, P. K.
- 1972a *Sino-Tibetan: a Conspectus (Princeton-Cambridge studies in Chinese linguistics 2)*. New York: Cambridge Univ. Press. 【編集協力者: J. A. Matisoff】
- 1972b The Sino-Tibetan Tonal System. In J. Barrau, et al. (eds.), *Langues et techniques, nature et société* (2 vols.), Paris: Klincksieck, Vol. I, pp. 25-34.
- 1976 Sino-Tibetan: another look, *JAOS* 96(2): 167-197.
- BIERI, D.
- 1975 Is Sunwar a Pronominalized Language?. Kathmandu: SIL. (油印)
- 1978 Covariance Relations in Sunwar. *POD*, pp. 369-379.
- BIERI, D. and Marlene SCHULZE
- 1970a Sunwar Tone and Higher Levels. *TSTBLN* I: 70-85.
- 1970b Sunwar Segmental Synopsis. *TSTBLN* I: 328-344.
- 1970c Sunwar Texts. *TSTBLN* IV: 283-292.
- 1971a *Sunwar Phonemic Summary, Revised Edition (TBPS 9)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
- 1971b *A Guide to Sunwar Tone (GTN 4)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
- 1971c Independent Declarative Clause Types in Sunwar. Kirtipur: SIL. (油印)
- 1971d *A Vocabulary of the Sunwar Language (CVLN)*. Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
- BIERI, D., M. SCHULZE and E. A. HALE
- 1973 An Approach to Discourse in Sunwar. *CSDPSLN* I: 401-462.
- BISTA, D. B.
- 1972 *People of Nepal*. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- 1976 Encounter with the Raute: The Last Hunting Nomads of Nepal. *Kailash* 4 (4): 317-328.
- BODMAN, N. C.
- 1987 On the Place of Lepcha in Sino-Tibetan. 20th STC.
- BRANDRETH, E. L.
- 1878 On the Non-Aryan Languages of India. *JRAS* (n. s.) 10: 1-32.
- BUHDA, H. R., D. E. WATTERS and N. WATTERS
- 1973 Kham Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- BUHDA, T. T. and J. F. FISHER
- 1973 Kaike Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- BYNON, T.
- 1986 *Historical Linguistics (Cambridge textbooks in linguistics)*. Cambridge/London/New York/New Rochelle/Melbourne/Sydney: Cambridge Univ. Press.
- CAMPBELL, G.
- 1874 *Specimens of Languages of India, Including those of the Aboriginal Tribes of Bengal, the Central Provinces and the Eastern Frontier*. Calcutta: Bengal Secretariat Press. 【復刻: New Delhi, Asian Educational Services, 1986】
- CAUGHLEY, R. C.
- 1969 *Chepang Phonemic Summary (TBPS IV)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
- 1970a Pitch, Intensity, and Higher Level in Chepang. *TSTBLN* I: 143-157.
- 1970b Chepang Segmental Synopsis. *TSTBLN* I: 279-299.
- 1972 *A Vocabulary of the Chepang Language (CVLN)*. Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
- 1978 Participant Rank and Verbal Cross-Reference in Chepang. *POD*: 163-178.
- 1981 The Syntax and Morphology of the Verb in Chepang. Ph. D. dissertation, The Australian National Univ.
- 1982 Information Flow and the Development of Pronominal Affixation in Tibeto-Burman.

- In T. Kansakar (ed.), *Occasional Papers in Nepalese Linguistics*, Kirtipur, Kathmandu: TU, Linguistic Society of Nepal, pp. 63–73.
- 1983 Patterns of pronominalization in the Tibeto-Burman area. *NL* 2: 23–30.
- 1989 Chepang a Sino-Tibetan language with a duodecimal numeral base? In D. Bradley, et al. (eds.), *Prosodic Analysis and Asian linguistics to Honor R. K. Sprigg*, PL ser. C 102, pp. 189–190.
- CAUGHLEY, R. C. and K. CAUGHLEY
1970 Chepang Texts. *TSTBLN* IV: 1–130.
- CHEMJONG, I. S.
1962 *Yakthun-pene-mikphu? la Pochekwā* [*Limbu-Nepali-English Dictionary*]. Kathmandu: Royal Nepal Academy.
1970 *Lepcha-Nepali-English Dictionary*. Kathmandu: Royal Nepal Academy.
- CHEPANG, B., R. C. CAUGHLEY, and K. CAUGHLEY
1973 Chepang wordlist. *CSDPSLN* IV.
- COMRIE, B.
1981 *Language Universals and Linguistic Typology*. Oxford: Basil Blackwell.
- CUNNINGHAM, J. D.
1844 Notes on Moorcroft's Travels in Ladakh, and on Gerard's Account of Kunawar. *JASB* 13: 172–153.
- DELANCEY, S.
1980 Deictic Categories in the Tibeto-Burman verb. Ph. D. dissertation, Indiana Univ.
1981a The Category of Direction in Tibeto-Burman. *LTBA* 6(1): 83–101.
1981b An Interpretation of Split Ergativity and Related Patterns. *Language* 57: 626–657.
1981c Parameters of Empathy. *Journal of Linguistic Research* (Indiana Univ. Linguistic Circle) 1(3): 40–49.
1984a Etymological Notes on Tibeto-Burman Case Particles. *LTBA* 8(1): 59–77.
1984b Notes on Agentivity and Causation. *Studies in Language* 8.
1985 The Analysis-Synthesis-Lexis Cycle in Tibeto-Burman: A Case Study in Motivated Change. In J. Haiman (ed.), *Iconicity in Syntax (Proceedings of a Symposium on Iconicity in Syntax, Stanford, 1983) (Typological Studies in Language 6)*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Co., pp. 367–389.
1987 Sino-Tibetan Languages. In B. Comrie (ed.), *The World's Major Languages*, London and Sydney: Groom Helm, pp. 798–810.
1988 On the Evolution of the Kham Agreement Paradigm. *LTBA* 11(2): 51–61.
1989 Verb Agreement in Proto-Tibeto-Burman. *BSOAS* 52(2): 315–333.
- DRIEM, G. L. van
1987a *A Grammar of Limbu (Mouton Grammar Library 4)*. Berlin/New York/Amsterdam: Mouton de Gruyter.
1987b The Verbal Morphology of Dumi Rai Simplicia. 20th STC.
1989 Reflexives of the Tibeto-Burman *-t Directive Suffix in Dumi Rai. In D. Bradley, et al. (ed.), *Prosodic Analysis and Asian Linguistics to Honor R. K. Sprigg*, PL ser. C 102, pp. 151–162.
- EBERT, K. H.
1986 Reported Speech in Some Languages of Nepal. In F. Coulmas (ed.), *Direct and Indirect Speech*, Berlin/New York/Amsterdam: Mouton de Gruyter, pp. 145–189.
1988a Verb Agreement in Chamling. 21st STC.
1988b Further Evidence for the Relationship Kiranti-Rung. 21st STC.
- EGEROD, S.
1973–74¹⁵ Sino-Tibetan Languages. *Encyclopedia Britannica*, Vol. 16, pp. 796–806.
- EVERITT, F.
1973 Sentence Patterns in Tamang. *PLIN* I: 197–234.

- FERGUSON, C. A.
1959 Diglossia. *Word* 15: 325-340.
- FISHER, J. F.
1971 A Vocabulary of the Kaike Language. Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
1987 *Trans-Himalayan Traders, Economy, Society, and Culture in Northwest Nepal*. Delhi/Varanasi/Patna/Madras: Motilal Banarsidass.
- FISHMAN, J. A.
1972 *The Sociology of Language: An Interdisciplinary Social Science Approach to Language in Society*. Rowley (Mass.): Newbury House. 【日本語訳(抄訳): 湯川恭敏訳『言語社会学入門』東京:大修館書店, 1974】
- FRANCKE, A. H.
1909 Tabellen der Pronomina und Verba in den drei Sprachen Lahouls: Bunan, Manchad und Tinan. *ZDMG* 63: 65-97.
1917 Vokabular der Manchadsprache. *ZDMG* 71: 137-176.
- FÜRER-HAIMENDORF, Ch. VON
1956 Ethnographic Notes on the Tamangs of Nepal. *Eastern Anthropologists* 9: 166-177.
1975 *Himalayan Traders, Life in Highland Nepal*. London: John Murray.
1983 Bhotia Highlanders of Nar and Phu. *Kailash* 10(1/2): 63-117.
- GAUCHAN, NARENDRA, NILA GAUCHAN, and A. M. HARI
1973 Thakali Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- GAUCHAN, S. and M. VINDING
1977 The History of the Thakaali According to the Thakaali Tradition. *Kailash* 5: 97-184.
- GENETTI, C.
1986a The Grammaticalization of the Newari Verb *tol-*. *LTBA* 9(2): 53-70.
1986b The Grammatical Development of Postpositions to Subordinators in Bodic Languages. *PBL* pp. 387-400.
1986c Scope of Negation in Newari Clause Chains. 19th STC.
1986d Juncture, Nexus, Operators and the Newari Non-Final Construction. *Proceedings of the Second Annual Meeting of the Pacific Linguistic Conference*, Eugene, Univ. of Oregon.
1986e A Syntactic Correlate of Topicality in Newar Narrative. to appear in S. A. Thompson and J. Haiman (ed.), *Clause Combining in Grammar and Discourse*, Amsterdam/Philadelphia.
1986f The Syntax of the Newari Non-Final Construction. MA thesis, Univ. of Oregon.
1987a A Contrastive Study of the Dolakhali and Kathmandu Newari Dialects. 20th STC.
1987b Newari Verb Classes. 20th STC.
1988 Notes on the Structure of the Sunwari Transitive Verb. *LTBA* 11(2): 62-92.
- GERARD, A.
1842 A Vocabulary of the Kunawar Languages. *JASB* 11: 485-551.
- GIVÓN, T.
1983 Ergative Morphology and Transitivity Gradients in Newari. 16th STC.
- GLOVER, J. R. and D. B. GURUNG
1979 *Conversational Gurung*. PL ser. D 13.
- GLOVER, W. W.
1969 *Gurung Phonemic Summary (TBPS I)*. Kirtipur: SIL. (油印)
1970a Gurung Tone and Higher Level. *TSTBLN* I: 52-73.
1970b Gurung Segmental Synopsis. *TSTBLN* I: 211-236.
1970c Cognate Counts Via the Swadesh List in some Tibeto-Burman Languages. *TSTBLN* II: 23-26.
1970d Gurung Texts. *TSTBLN* III: 1-131.
1971a Register in Tibeto-Burman Languages of Nepal: A Comparison with Mon-Khmer. *PL* ser. A 29: 1-22.

西 ヒマラヤ諸語の分布と分類 (上)

- 1971b Swadesh List Calculations on Thirty Tibeto-Burman Languages. Kirtipur: SIL.
(油印)
- 1972 *A Vocabulary of the Gurung Language (GVLN)*. Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
- 1974 *Sememic and Grammatical Structures in Gurung (Nepal) (SILP 49)*. Norman: Univ. of Oklahoma.
- GLOVER, W. W. and J. R. GLOVER
1972 *A Guide to Gurung Tone (GTN 6)*. Kathmandu: SIL and TU (油印)
- GLOVER, W. W., J. R. GLOVER and D. B. GURUNG
1977 *Gurung-Nepali-English Dictionary with English-Gurung and Nepali-Gurung Indices*. PL ser. C 51).
- GLOVER, W. W. and J. K. LONDON
1980 Gurung Dialects. PL ser. A 53: 29-77.
- GORER, G.
1967² *Himalayan Village, an Account of the Lepchas of Sikkim*. London/Melbourne/Johannesburg/ Ontario: Thomas Nelson and Sons Ltd. 【改訂版, 初版: 1938】
- GOVERNMENT OF HIMACHAL PRADESH DIRECTORATE OF LAND RECORDS
n.d. *Village Directory of District Lahaul-Spiti*. 【1981年国勢調査に基づく村別人口】
- GREENBERG, J. H.
1957 *Essays in Linguistics*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
1987 *Language in the Americas*. Stanford: Stanford Univ. Press.
- GRIERSON, G. A. (ed.)
1909 *Linguistic Survey of India* Vol. III, part I. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing 【復刻版: Delhi/Varanasi/Patna, Motilal Banarsidass, 1967】.
- GRIMES, B. F. (ed.)
1984¹⁰ *Languages of the World: Ethnologue*. Huntington Beach: Wycliffe Bible Translators.
- GUMPERZ, J. J.
1971 *Language in Social Groups (Language Science and Development Series)*. Stanford: Stanford Univ. Press.
- GURUNG, D. B., W. W. GLOVER, and J. R. GLOVER
1973 Gurung Wordlist. GSDPSLN IV.
1976 *Gurung-Nepali-English Glossary*. Kathmandu: SIL and INAS, TU.
- GURUNG, H. B.
1980 *Vignettes of Nepal*. Kathmandu: Sajha Prakashan.
- GURUNG, N. J.
1976 An Introduction to the Socio-Economic Structure of Manang District. *Kailash* 4(3): 295-308.
1977 An Ethnographic Note on Nar-Phu Valley. *Kailash* 5(3): 229-244.
- GVOZDANOVIC, J.
1984 Numerical Change and Decay in Bantawa Rai. *NL* 3: 1-10.
- HAARH, E.
1959 The Lepcha Script. *Acta Orientalia* (Copenhagen) 24: 107-122.
1960 *A Limbu-English Glossary*. Copenhagen: Danish Asiatic Research.
1968 *The Zhang Zhung Language: A Grammar and Dictionary of the Unexplored Language of the Tibetan Bonpos*. (Humanistisk Series 47) København: Universitetsforlaget I Aarhus Einar Mundsgaard.
- HAAS, M.
1969 *The Prehistory of languages*. The Hague/Paris: Mouton.
1978 *Language, Culture, and History (Language Science and Development Series)*. Stanford: Stanford Univ. Press.
- HAGEN, Toni
1971³ *Nepal, the Kingdom in the Himalayas*. New Delhi/Bombay/Calcutta: Oxford and IBH Publishing Co.

HALE, E. A.

- 1970a A Phonological Survey of Seven Bodic Languages of Nepal. *TSTBLN* I: 1-33.
 1970b Newari Higher Levels. *TSTBLN* I: 158-169.
 1970c Newari Segmental Synopsis. *TSTBLN* I: 300-337.
 1970d Notes on Newari Texts. *TSTBLN* IV: 131-151.
 1971a *Person Markers: Conjunct and Disjunct Forms (Topics in Newari grammar I)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
 1971b *Newari Nouns: A Guide to Vocabulary Entries (Topics in Newari grammar II)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
 1971c *Newari Verbs: A Guide to Vocabulary Entries (Topics in Newari grammar III)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
 1973a On Classification. *CSDPSLN* IV: 2-11.
 1973b On the Forms of Verbal Bases in Newari. In B. B. Kachru, et al. (eds.), *Issues in Linguistics: Papers in Honor of Henry and Renée Kahane*, Urbana: Univ. of Illinois Press, pp. 279-299.
 1973c On the Systematization of Box 4. In M. B. Ruth (ed.), *Advances in Tagmemics (North Holland linguistic studies 9)*, Amsterdam: North Holland, pp. 55-74.
 1973d Toward the Systematization of Display Grammar. *CSDPSLN* I: 1-38.
 1974 Syntactic Matrices: an Approach to Syntactic Comparability. In L. Heilmann (ed.), *Proceedings of the 11th International Congress of Linguistics, Bologna-Florence, 1972*, Bologna: Societe editrice il Mulino (2 vols.), Vol. I, pp. 259-271.
 1976 Grammar for the Lay Reader. In P. R. Sharma and L. C. Friedman (eds.), *Seminar Papers in Linguistics, Problems and Perspectives*, Kirtipur: INAS, pp. 53-82.
 1980 Person Markers: Finite Conjunct and Disjunct Verb Forms in Newari. *PL ser. A* 53: 95-106.
 1982 *Research on Tibeto-Burman Languages (Trend in linguistics, state of the art report 14)*. Berlin/New York/Amsterdam: Mouton Publishers.

HALE, E. A. and W. W. GLOVER

- 1970 A Note on Glides, Syllabicity and Tone in Gurung. *TSTBLN* I: 49-51.

HALE, E. A. and M. HALE

- 1970 Newar Texts and Notes on Newari texts. *TSTBLN* IV: 131-281.
 1975 *A Systematization of Newari Orthography: A Sketch of Newari Phonology*. Kathmandu: SIL. (油印)

HALE, E. A., A. M. HARI, and B. SCHÖTTELNDREYER (eds.)

- 1972 Comparative Vocabularies of Languages of Nepal (Swadesh 100-word list). (1st installment) Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)

HALE, E. A. and T. MANANDHAR

- 1973 Case and Role in Newari. *NSL* I: 39-54. 【*PL ser. A* (1980) 53: 79-93 じ再掲載】

HALE, E. A. and I. SRETHACHARYA

- 1973 Is Newari a Classified Language? *CNS* 1(1): 1-21.

HALE, E. A. and D. E. WATTERS

- 1973 A Survey of Clause Patterns. *CSDPSLN* II: 175-249.

HALE, M. and E. A. HALE

- 1969 *Newari Phonemic Summary (TBPS 5)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
 1971 *A Vocabulary of the Newari Language (CVLN)*. Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)

HANNEMAN, C. B.

- 1971 Predicate Metaphors in Limbu. Kathmandu: SIL. (油印)
 1972 On the Form of Verbal Bases in Limbu. Kathmandu: SIL. (油印)
 1983 Limbu Phonemic Summary. Kathmandu: SIL. (油印)

HANSSON, G.

- 1988 On the Grouping of the Indigenous Tibeto-Burman Languages and Dialects in the Eastern Hills of Nepal: a Brief Classification, Based on Field Research of the 'Linguistic Survey of Nepal' (草稿)

- HANSSON, G. and W. WINTER
 1985 Some Rai Numerals of Indo-Aryan Origin. *Indian Linguistics* 46(1/2): 33-35.
- HARGREAVES, D.
 1983 Evidentiality in Newari. M. A. thesis, Univ. of Oregon.
 1984 Case Marking and Nominalization in Classical Newari. 17th STC.
 1986a Independent Verbs and Auxiliary Functions in Newari. *PBLS* 12: 401-412.
 1986b Overlapping Coding Systems in a Newari oral narrative. In *Proceedings of the 2nd Annual Meeting of Pacific Linguistics Conference*, Eugene: Univ. of Oregon.
- HARGEAVES, D. and K. TAMOT
 1985 On the Prehistory of Some Newari Verbs. 18th STC.
- HARI, A. M.
 1969 *Thakali Phonemic Summary (TBPS III)*. Kirtipur: SIL. (油印)
 1970a *A Guide to Tamang Tone (GTN 1)*. Kathmandu: SIL and TU. (油印)
 1970b Thakali Tone and Higher Levels. *TSTBLN* I: 125-142.
 1970c Thakali Segmental Synopsis. *TSTBLN* I: 158-178.
 1971a *A Guide to Thakali Tone (GTN 2)*. Kathmandu: SIL and TU. (油印)
 1971b *A Vocabulary of the Thakali Language (CVLN)*. Kiripur: SIL and INAS, TU. (油印)
 1972 *Preliminary Instructions for a Phonological Survey Report*. Kathmandu: SIL. (油印)
- HARI, A. M. and A. MAIBAUM
 1970 Thakali Texts. *TSTBLN* III: 165-306.
- HARI, A. M., D. TAYLOR, and K. L. PIKE
 1970 Tamang Tone and Higher Levels. *TSTBLN* I: 82-124.
- HASHIMOTO, M.
 1977 *The Newari Language: A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect (Monumenta Serindica 2)*. Tokyo: ILCAA.
- HENDERSON, E. J. A.
 1965 The Topography of Certain Phonetic and Morphological Characteristics of South East Asian Languages. *Lingua* 15: 400-434.
- HEPBURN, J.
 1978 Linkage at High Levels of Tamang Discourse. *POD*, pp. 331-341.
- HITCHCOCK, J. T.
 1966 *The Magars of Banyan Hill*. New York/Chicago/San Francisco/Tront/London: Holt, Rinehart and Winston.
- HODGSON, G. H.
 1847 On the Aborigines of the Sub-Himalayas. *JASB* 16: 1235-1244. 【Hodgson (1874) 第2部に再掲載】
 1848 On the Chépáng and Kúsúnda Tribes of Nepal. *JASB* 17(2): 650-58. 【Hodgson (1874) 第2部に再掲載】
 1849 On the Aborigines of the Eastern Frontier. *JASB* 18: 967-975.
 1853 On the Indo-Chinese Borderers and their Connexion with the Himalayans and Tibetans. *JASB* 22(1): 1-25. 【Hodgson (1874) 第2部に再掲載】
 1857a Comparative Grammar of the Languages of the Broken Tribes of Nepal. *JASB* 26: 317-32. 【Hodgson (1880) 第1巻に再掲載】
 1857b Comparative Vocabulary of the Several Languages (dialects) of the Celebrated People Called Kirántis, now occupying the eastern-most province of the kingdom of Népal, or the basin of the river Árun, which province is named after them Kiránt. *JASB* 26(5): 333-371.
 1857c Váyu Vocabulary. *JASB* 26(5/6): 372-485.
 1857d Báhing Vocabulary. *JASB* 26: 486-522.
 1858a Báhing Vocabulary. *JASB* 27: 393-442.
 1858b On the Kiranti Tribe of the Cental Himalaya. *JASB* 27(5): 443-446.
 1858c On the Vayu Tribe of the Central Himalaya. *JASB* 27(5): 443-446.

- 1874 *Essays on the Language, Literature, and Religion of Nepal and Tibet*. London: Trübner.
【復刻版: Varanasi, Bharat, Bharati Publishers, 1971; (Bibliotheca Himalayica) New Delhi: Mānjuśrī Publishing House, 1972】
- 1880 *Miscellaneous Essays Relating to Indian Subjects*. (2 vols.) London: Trubner.
- HOENIGSWALD, H. M.
1960 *Language Change and Linguistic Reconstruction*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
1966 Criteria for the Subgrouping of Languages. In H. Birnbaum and J. Puhvel (eds.), *Ancient Indo-European Dialects*, Univ. of California Press, pp. 1-12.
- HÖFER, A.
1981 *Tamang Ritual Texts: Preliminary Studies in the Folk-Religion of an Ethnic Minority in Nepal* (Beiträge zur Südasiens-Institut Universität Heiderberg). Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
- HOSHI, M.
1984 A Prakaa Vocabulary—Dialect of the Manang Language. In *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, Vol. II (Monumenta Serindica 12), Tokyo: ILCAA, pp. 133-202.
1986 An Outline of the Prakaa Grammar—A Dialect of the Manang Language. In *Anthropological and Linguistic Studies of the Kathmandu Valley and the Gandaki Area in Nepal* (Monumenta Serindica 15), Tokyo: ILCAA, pp. 187-317.
- HOLZHAUSEN, Andreas
1973 Phonological Survey Report of the Kulunge Language. Kathmandu: SIL. (油印)
- HOLZHAUSEN, Anna
1973 Kulunge Rai Clause Types. *NSL* I: 15-26.
- HUDSON, R. A.
1980 *Sociolinguistics* (Cambridge Textbooks in Linguistics). Cambridge/London/New York/New Rochelle/Melbourne/Sydney: Cambridge Univ. Press.
- HUFFMAN, F. E.
1986 *Bibliography and Index of Mainland and Southeast Asian Languages and Linguistics*. New Haven/London: Yale Univ. Press.
- HUTT, M. J.
1986 Diversity and Change in the Languages of Highland Nepal. *CMS* 14(1): 1-24.
1988 *Nepal, A National Language and its Literature*. London: School of Oriental and African Studies; New Delhi: Sterling Publishers Priv. Ltd.; Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- 石井 溥
1980 『ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容』(アジア・アフリカ言語文化叢書 14) 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
1987 「ネワール語」(草稿), 『言語学大辞典』第3巻(世界言語編(下)) 東京: 三省堂, 1991年刊行予定。
- 石井 溥(編)
1986 『もっと知りたいネパール』東京: 弘文堂。
- 飯島 茂
1982 『ヒマラヤの彼方から——ネパールの商業民族タカリー生活誌』(NHK ブックス くカラー版) 東京: 日本放送協会。
- JÄSCHKE, H. A.
1865 Note on the Pronunciation of the Tibetan Language. *JASB* 34: 91-100.
- JEFFERS, R. J. and I. LEHISTE
1979 Principles and Methods for Historical linguistics. Cambridge/London: The MIT Press.
- KANSKAR, T. R.
1972a A Linguistic Survey of Nepal: A Proposal. *Journal of the Tribhuvan Univ.* (Kirtipur, TU) 735-748.

西 ヒマラヤ諸語の分布と分類(上)

- 1972b Linguistics and the Study of Newari Language. *Journal of the Tribhuvan Univ.* 7: 49-56.
- 1977 Rhythm and Intonation in Colloquial Newari. *CNS* 1(1): 1-14.
- 1979 A Generative Phonology of Kathmandu Newari. Ph. D. dissertation, TU.
- 1980a A Note on the Phonological Representation of Newari Segments, a Working Paper Prepared for the Nepala Bhasa Dictionary Project Committee Meeting, Kathmandu.
- 1980b The Treatment of Glides in Newari Phonology. *NL* 1: 9-16.
- 1982 Morphophonemics of the Newari Verb. In T. Kansakar (ed.), *Occasional Papers in Nepalese Linguistics*, Kirtipur, TU: Linguistic Society of Nepal, pp. 12-29.
- 1983 Syllable Structure in Newari. *NL* 2: 63-75.
- 1984 *A Basic Course in Colloquial Newari*. Kathmandu: Campus of International languages. (Monograph)
- KHALING, S. M., S. TOBA, and I. TOBA
- 1972 *A Vocabulary of the Khaling Language*, Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
- 1973 Khaling Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- KÖLVER, U.
- 1976 *Satztypen und Verbsubkategorisierung der Newari (Struktura, Schriftenreihe zur Linguistik, 10)*. München: Wilhelm Fink Verlag.
- 1977 *Nominalization and Lexicalization in Modern Newari*. Arbeiten des Kölner Universalien, Projekts no. 30.
- 1978 On Newari Noun Phrases. In H. Seiler (ed.), *Language Universals*, Tübingen: Gunter Narr Verlag, pp. 277-300.
- KÖLVER, U. and B. KÖLVER
- 1975 On Newari Noun Inflection. *Zentral-asiatische Studien* (Bonn) 9: 87-117.
- 1978 Classical Newari verbal morphology. *Zentral-asiatische Studien* 12: 273-316.
- KUMAR, B. B., P. S. SUBBA, and B. B. SUBBA
- 1980 *Hindi Limbu Dictionary*. Kohima: Nagaland Bhasa Parishad.
- LEWIS, T. T. and D. R. SHAKYA
- 1988 Contributions to the History of Nepal: Eastern Newar Diaspora Settlements. *CNS* 15(1): 25-65.
- LIENHARD, S.
- 1962 *Dal Sanscrito All'hindi. Il nevari (Le civiltà asiatiche Quaderno 5)*. Roma: Istituto per la collaborazione culturale.
- 1977 *Newari: the Ancient Language of Nepal*. Kathmandu: Cosā Pāsā.
- MACDONALD, A.
- 1984 The Tamang as Seen by One of Themselves. In his *Essays on the Ethnology of Nepal and South Asia I*, Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar, pp. 129-167.
- MÄDEN, J.
- 1983 *Easy Learning Book of Kirat Language*. Darjeeling: Kirāti Sāhitya Bikāś Samiti.
- MAGAR, K. B. T., G. SHEPHERD, and B. SHEPHERD
- 1973 Magar wordlist. *CSDPSLN* IV.
- MAINWARING, G. B.
- 1976 *A grammar of the Rong (Lepcha) language as it exists in the Darjeling and Sikkim Hills*. Calcutta: B. B. Lewis, Baptist Mission Press. 【復刻版 *A Grammar of the Lepcha Language (Bibliotheca Himalayica, ser. II, 5)*, New Delhi: Mānjuhūri Publishing House, 1971】
- 1898 *Dictionary of the Lepcha Language* (, rev. and completed by Albert Grünwedel). Berlin: Unger Bros. 【復刻版: (*Bibliotheca Himalayica, ser. II, 6*), Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar, 1979】
- MALLA, K. P.
- 1973a Language. In J. B. Rana Pashupati and K. P. Malla (eds.), *Nepal in Perspective*, Kathmandu: Centre for Economic Development and Administration, pp. 101-108.

- 1973b A Preliminary Note on the Linguistic Archeology of the Nepal Valley. 6th STC.
- 1978 *Sika:miya Swane*【ネワル語とネワル文学に関する論文集】, Kathmandu: Nepāla Bhāṣā Paṛiṣad.
- 1979 *Dhwānā saphu:ya dhala: I*【A bibliographical essay on books (in print in Newari 1909–1977)]. Kantipur: Lāeta Dabu.
- 1980 Amrita: Nanda's Grammar A.D. 1831. *NL* 1: 41–49.
- 1981a Linguistic Archeology of the Nepal Valley: A Preliminary Report. *Kailash* 8(1/2): 5–23.
- 1981b The Newari Language in the Medieval Epigraphy of Nepal【in Newari】. *Khluitā* 3: 5–16.
- 1982a The Syntax and Semantics of Newari Verb Sequences. 2nd GLSN.
- 1982b *Classical Newari Literature: A Sketch*. Kathmandu: Educational Enterprise Pvt. Ltd.
- 1983 Suppletive Causatives in Newari. 3rd GLSN.
- 1984 *Dhwānā saphu:yā dhala: II*【A bibliographical essay on books (in print in Newari 1978–1984)]. Kantipur: Pāsā Munā.
- 1985a *The Newari Language: A Working Outline (Monumenta Serindica 14)*. Tokyo: ILCAA.
- 1985b A Glossary of Newari Words Used in the *Gopālārājavamśāvali*. In *Gopālārājavamśāvali: a facsimile edition (Nepal Research Centre Publication 9)*, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
- 1989a A Glossary of Newari Words Used in *Nāradasmṛti* NS 500/AD 1380. In *Nāradasmṛti: a facsimile edition*, Kathmandu: Nepal Text Society.
- 1989b The Classical Newari Dictionary Project: Problems and Prospects.
- 1989c Language and Society in Nepal. In K. P. Malla (ed.), *Nepal: Perspectives on Continuity and Change*, Kirtipur: CNAS, pp. 445–466.
- MANANDHAR, T., M. HALE and E. A. HALE
- 1973 Newari Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- MANZARDO, A., D. R. DAHAL and N. K. RAI
- 1976 The Byanshi: An Ethnographic Note on a Trading Group in Far Western Nepal. *CNS* 3(2): 83–118.
- MASICA, C. P.
- 1976 *Defining a Linguistic Area: South Asia*. Chicago and London: Univ. of Chicago Press.
- MASPERO, H.
- 1952 Les Langues Tibéto-Birmanes. In A. Meillet and M. Cohen (eds.), *Les Langues du Monde*, nouv. ed., Paris: Centre National de la recherche scientifique.
- MATISOFF, J. A.
- 1978 *Variational Semantics in Tibeto-Burman: the 'Organic' Approach to Linguistic Comparison (Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics VI)*. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.
- 1985 The Languages and Dialects of Tibeto-Burman: Alphabetic/Genetic Listing, with Some Prefatory Remarks on Ethnonymic and Glossonymic Complications. In J. McCoy and T. Light (eds.), *Contributions to Sino-Tibetan Studies*, Leiden: E. J. Brill.
- MAZAUDON, M.
- 1973a Comparison of Six Himalayan Dialects of Tibeto-Burman. *Pākha Sanjam (Patiala)* 4: 78–91.
- 1973b *Phonologie tamang (Étude phonologique du dialecte tamang de Risiangku, langue Tibéto-Birman du Népal) (Langues et civilisations à tradition orale 4)*. Paris: Société d'Étude Linguistiques et Anthropologiques de France.
- 1974 Note on Tone in Tibeto-Burman. *LTBA* 1(1): 17–54.
- 1975 Tonal Developments in the Tamang Sub-family of Tibeto-Burman. 8th STC.
- 1976 Typological Sketch of Tamang (Sino-Tibetan, Nepal). (草稿)
- 1977 Tibeto-Burman Tonogenetics. *LTBA* 3(2). (単刊)
- 1978 Consonantal Mutation and Tonal Split in Tamang Subfamily. *Kailash* 6: 157–179.
- 1985 Proto-Tibeto-Burman as a Two-Tone Language? Some Evidence from Proto-

- Tamang and Proto-Karen. *LSTA*, pp. 201–229.
- 1988 The Influence of Tone and Affrication on Manner: Some Irregular Manner Correspondences in the Tamang Group. 21st STC.
- McDOUGAL, Ch.
- 1979 *The Kulunge Rai, a Study in Kinship and Marriage Exchange*. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- MESSERSCHMIDT, D. A.
- 1976 *The Gurungs of Nepal: Conflict and Change in Village Society*. New Delhi/Bombay/Calcutta: Oxford and IBH Publishing Co.
- MICHAILOVSKY, B.
- 1974 Hayu Typology and Verbal Morphology. *LTBA* 1(1): 1–26; Errata, *LTBA* 2(2): 215 (1976).
- 1975a On Some Tibeto-Burman Sound Change. *PBLS* 1: 322–332.
- 1975b Notes on the Kiranti Verb (East Nepal). *LTBA* 2(2): 183–218.
- 1975c A Case of Rhinoglossophilia in Hayu. *LTBA* 2(2): 293.
- 1980 Grammaire de la langue hayu (Nepal). Ph. D. dissertation, Univ. of California, Berkeley.
- 1985 Tibeto-Burman Dental Suffixes: Evidence from Limbu (Nepal). *LSTA*, pp. 363–375.
- 1988 Phonological Typology of Nepal Languages. *LTBA* 11(2): 25–50.
- MICHAILOVSKY, B. and M. MAZAUDON
- 1973 Notes on the Hayu Language. *Kailash* 1(2): 135–152.
- MILLER, R. A.
- 1969 The Tibeto-Burman Languages of South Asia. In T. A. Sebeok (ed.), *Current Trend in Linguistics*, The Hague and Paris: Mouton, pp. 431–449.
- 南真木人
- 1989 『中部ネパール・マガル族の生業複合の変容——水田稲作化に着目した生態人類学的研究』(修士論文, 筑波大学)。
- MINISTRY OF DEFENCE
- 1965 *Nepal and the Gurkhas*. London: Her Majesty's Stationary Office.
- MODI, B. V.
- 1967 The Phonemes of Newari. *Journal of the Maharaja Sayajirao Univ. of Baroda* 16(1): 103–134.
- MÜLLER, M.
- 1861 *Lectures on the Science of Language* (, delivered at the Royal Institution of Great Britain in April, May, and June, 1861). London: Longman, Green, Longman, and Roberts,
- 長野泰彦
- 1986 「チベット・ビルマ系諸語における能格現象をめぐって」『言語研究』90: 119–148。
- 1989 「レプチャ語」(草稿), 『言語学大辞典』第3巻(世界言語編(下)) 東京: 三省堂, 1991年刊行予定。
- NAGANO, Y.
- 1984 A Manang Glossary. *Monumenta Serindica* 12: 203–234.
- 1986 A Checklist of Newari Ergativity. *Monumenta Serindica* 15: 167–185.
- 1990 A Classified Lexicon of the Syang Language. 崎山 理・他編『アジアの諸言語と一般言語学』東京: 三省堂。
- 長野泰彦・立川武蔵(編)
- 1987 『チベットの言語と文化』東京: 冬樹社。
- NAKANE, C.
- 1978 A Plural Society in Sikkim, a Study of the Interrelations of Lepchas, Bhotias and Nepalis. In Ch. von Fürer Haimendorf (ed.), *Caste and Kin in Nepal, India and Ceylon, Anthropological Studies in Hindu-Buddhist Contact Zones*, New Delhi: Sterling Publishers Pvt. Ltd., pp. 213–263.

- NATIONAL PLANNING COMMISSION SECRETARIAT
 1988 *Statistical Pocket Book: Nepal 1988*. Kathmandu: Central Bureau of Statistics.
- NEETHIVANAN, J.
 1976 *Survey of Kanauri in Himachal Pradesh (Language monograph 3)* (Census of India 1971, 1961 ser. 1). India: Language division, Office of the Registrar General.
- NEGI, K. L.
 1982 *Kinnaur District* (District Census Handbook, Himachal Pradesh, ser. -7, Census 1981).
- NEGI, T. J. S. B.
 1987 *Himalayan Travels*. Delhi: Mittal Publication. (復刻版)【初版 1920】
- NIGAM, R. C.
 1972 *Language Handbook on Mother Tongues in Census (Census Centenary Monograph 10)* (Census of India 1971). New Delhi: Office of the Registrar General, India, Ministry of Home Affairs.【主要母語以外は1961年の国勢調査の人口を挙げる】
- 西 義郎
 1977 「Tamang 祖語の再構をめぐるいくつかの問題について(第1部)」『鹿児島大学教養部史学科報告』26: 53-68。
 1981 「GHALE 語調査旅行報告」*YAK* (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 5: 1-55。
 1986 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11(4): 837-900。
 1989 「タマン語群」『言語学大辞典』第2巻(世界言語編(中))東京:三省堂, pp. 653-666。
- NISHI, Y.
 1972 Remarks on Reconstructions of Some Proto-Tamang Rimes. 第18回日本西蔵学会発表論文。
 1982 Five Swadesh 100-word Lists for the Ghale Language—A Report on the Trek in the Ghale Speaking Area in Nepal. *Monumenta Serindica* 10: 158-194.
 1983 A Brief Survey of the Linguistic Position of Ghale. 『愛媛大学法文学部論集(文学科編)』16: 27-50。
 1990 Can Fowls Fly Hundreds of Miles over the Himalayas? 20th STC, 崎山 理・他編『アジアの諸言語と一般言語学』東京:三省堂。
- 西田龍雄
 1970 『西番館譯語の研究: チベット言語学序説』(華夷譯語研究叢書 I), 京都: 松香堂。
 1986 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・他編『チベットの言語』東京: 冬樹社, pp. 108-169。
 1989 「チベット・ビルマ語派」『言語学大辞典』第2巻(世界言語編(中))東京:三省堂, pp. 791-822。
- NISHIDA, T.
 1987 Linguistic Position of the Kham Language. *Studia Phonologica* 21: 1-9.
- 瞿霽堂
 1988 「中国的民族与語言」『民族語文』(1): 23-36。
- PIGNÈDE, Bernard
 1966 *Les Gurungs, une Population Himalayenne du Nepal (École pratique des hautes études, Sorbonne, 6^e section: sciences économiques et sociales. Le monde d'outremer passé et présent, 3^e ser., Études XXI)*. Paris: Mouton.
- PITTMAN R. S. and J. R. GLOVER
 1970 Proto-Tamang-Gurung-Thakali. *TSTBLM* II: 9-22.
- RĀI, Agam Simṅ Devasā
 1944 *Asalacchi Siksā, Thulung Rāi Bhāṣā*. Darjeeling.
- RAI, K. P., Anna HOLZHAUSEN, and Andreas HOLZHAUSEN
 1975 Kulung-Nepali-English Glossary. Kirtipur: SIL and INAS, TU.
- RAI, N. K.
 1984 Reduplication in Bantawa. *CNS* 12(1): 15-22.

西 ヒマラヤ諸語の分布と分類 (上)

- 1985 A Descriptive Study of Bantawa. Ph. D. dissertation, Post-Graduate and Research Institute, Deccan College, Univer. of Poona.
- RANDHAWA, M. S.
1970 *The Kumaon Himalayas*. New Delhi/Bombay/Calcutta: Oxford and IBH Publishing Co.
- REGMI, R. R.
1985 *Cultural Patterns and Economic Change (Anthropological Study Dhimals of Nepal)*. Delhi/Varanasi/Patna/Madras: Motilal Barnasidass.
- REINHARD, J. G.
1974 The Raute: Notes on a Nomadic Hunting and Gathering Tribe of Nepal. *Kailash* 2(4): 233-271.
- RISLEY, H. H.
1891 *Tribes and Castes of Bengal*. Calcutta.
- SCHULZE, M.
1978 Rhetorical Questions in Sunwar. *POD*, pp. 349-361.
1987 Intense Action Adverbials in Sunwar: A Verbal Intensifier System. *LTBA* 10(1): 63-85.
- SCHULZE, M. and D. BIERI
1973 Chaining and Spotlighting: Two Types of Paragraph Boundaries in Sunwar. *GSDPSLN* I, pp. 389-399.
- SEAWARD, L. L. and C. B. GHALE
1974 A Preliminary Survey of Ghale Tone. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
- SENIOR, H. W. R.
1908 *A Vocabulary of the Limbu Language of Eastern Nepal*. Simla: Government Monotype Press. 【復刻版: (*Bibliotheca Himalayica*, ser. II, 13) Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar, 1977】
- SHAFFER, R.
1950 Classification of Some Languages of the Himalayas. *Journal of the Burma Research Society* 34: 192-214.
1952 Newari and Sino-Tibetan. *Studia Linguistica* (Lund) 6: 92-109.
1953 East Himalayish. *BSOAS* 15: 356-374.
1955 Classification of the Sino-Tibetan Languages. *Word* 2: 94-111.
1957 *Bibliography of Sino-Tibetan Languages*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
1963 *Bibliography of Sino-Tibetan Languages*, Vol. 2. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
1966 *Introduction to Sino-Tibetan*, Part I. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
1967 *Introduction to Sino-Tibetan*, Part II. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- SHARMA, D. D.
1982 *Studies in Tibeto-Himalayan Linguistics: A Descriptive Analysis of Paṭṭani (a Dialect of Lahaul)* (Punjab Univ. Indological ser.-28). Hoshiarpur: Vishuveshvaran and Vishva Bandhu Institute of Sanskrit and Indological Studies, Punjab Univ.
1988a *A Descriptive Grammar of Kinnaur (Studies in Tibeto-Himalayan Languages-I)*. Delhi: Mittal Publications.
1988b Kumauni Language and Dialects. In K. S. Valdiya (ed.), *Kumaun: Land and People*, Nainital: Gyanodaya Prakshan, pp. 119-136.
- SHARMA, S. R.
1979 Phonological Structure of Spiti. *LTBA* 4(2): 83-110.
1982 Loan Words in Patani—Problems and Mysteries. *BDC* 41: 160-163.
1985 Yaks and Months in Paṭṭani. *BDC* 44: 169-172.
1987 Non-Tibeto-Burman Features in Paṭṭani. *LTBA* 10(1): 126-129.
1988 Tibeto-Burman Languages of North-Western India. (草稿)
1989 Word Formation in Machad and Onge. *BDC* 49: 411-415.

- SHEPHERD, G.
1982 *Life among the Magars*. Kathmandu: Sahayogi Press.
- SHEPHERD, G. and B. SHEPHERD
1971 *Magar Phonemic Summary (TBPS VII)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
1973 *Magar Texts. GSDPSLN III*, pp. 301-434.
- SHERRING, C. A.
1974 *Western Tibet and the Indian Borderland, the Sacred Country of Hindus and Buddhists*. Delhi: Cosmo Publications. (復刻版)【初版: *Western Tibet and the British Borderland*, London: Arnold, 1906】
- SHRESTHA, R. L.
1989 Verb Inflection in the Dolakha Dialect of Nepal Bhasa. *Rolamba* 19(2): 40-50.
- SNELLGROVE, D. L.
1961 *Himalayan Pilgrimage, a Study of Tibetan Religion by a Traveller through Western Nepal*. Oxford: Bruno Cassirer.
- SPRIGG, R. K.
1959 Limbu Books in the Kiranti Script. In *Akten des XXIV Internationalen Orientalisten Kongresses, München, 1957*, Wiesbaden: Deutsche Morgenländische Gesellschaft, pp. 490-492.
1966a Phonological Formulae for the Verb in Limbu as a Contribution to Tibeto-Burman Comparison. In C. E. Bazell, et al. (eds.), *In memory of J. R. Firth*, London: Longmans Green and Co., pp. 431-453.
1966b The Glottal Stop and Glottal Constriction in Lepcha, and Borrowing from Tibetan. *Bulletin of Tibetology (Gantok)* 3(1): 5-14.
1966c Lepcha and Balti-Tibetan: Tonal or Non-Tonal Languages?. *Asia Major* (n.s.) 12(2): 185-201.
1982 The Lepcha Language, and Three Hundred Years of Tibetan Influence in Sikkim. *Journal of the Asiatic Society (Calcutta)* 24: 16-31.
1983a Hooker's Expenses in Sikkim: An Early Lepcha Text. *BSOAS* 46(2): 305-325.
1983b Newari as a Language without Vowel Systems: A Firthian Approach to the Bhaktapur and Kathmandu Newari Verb. *NL* 2: 1-21.
1984 The Limbu s-Final and t-Final Verb Roots, After Michailovsky 1979 and Weidert 1982. *NL* 3: 54. 【*LTBA* 8(2): 1-35 (1985) ㄣ再掲載】
1985a Alphabet or Syllabary in South East Asia: 'New Wine into Old Bottles'. *LSTA*, pp. 105-115.
1985b Bantawa Rai s-, t- and z- Final Verb Roots: Transitive, Intransitive, Causative and Directive. 18th STC (to appear in Proceedings of the 18th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Bangkok).
1986 The Syllable Finals of Tibetan Loan Words in Lepcha Orthography. *LTBA* 9(1): 27-46.
1987 "Rhinoglottophilia" Revisited: Observations on "the Mysterious Connection between Nasality and Glottality". *LTBA* 10(1): 44-62.
1989a *The Root Finals of Bantawa Rai Verbs, and the Congruence of Phonology with Grammar and Lexis* 52(1): 91-114.
1989b Oral Vowels and Nasalized Vowels in Lepcha. In J. H. C. S. Davidson (ed.), *Contributions to South East Asian Linguistics: Essays in Honor of Eugénie J. A. Henderson*, London: School of Oriental and African Studies, pp. 219-235.
1989c The Review of G. L. van Driem, A. Grammar of Limbu. *BSOAS* 52(1): 163-165.
1989d The Nepali Language with Reference to its Relationship with the Rai, Limbu, and Lepcha Languages. *Indian Linguistics* 48: 87-100.
- SHRESTHACHARYA (=Shresthacharya), I.
1963 *Dhukū pikū, nepāl bhāśāyā, mukha kriyāyā dhukū* 【*An Inventory of the root verbs in Newari*】,

- Kathmandu: Ganesh Man Srestha, Him-harati Press.
- 1964 *Mūlukhā, bahḍamgu vajjñānika bhāylacāṁ* [The main gate, a treatise for the promotion of scientific language habits]. Bhaktapur: Janaki Lal Pradhan,
- 1967 *Calamca, cikicādhāngu byālacāṁ* [A small path, a miniature grammar]. Kathmandu: Asian Printing Press.
- 1976 Some Types of Reduplication in the Newari Verb Phrase. *CNS* 3(1): 117-127.
- 1977 Newar Kinship Terms in the Light of Kinship Typology. *CNS* 3(1): 111-128.
- 1981 *Newari Root Verbs (Bibliotheca Himalayica, ser. II, 1)*. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- 1987 *Concise Dictionary (Newar-English)*. Kathmandu: KNP (Kaanibhāa Publication).
- SRESTHACHARYA, I., J. N. MASKEY and E. A. HALE
- 1971 *Conversational Newari*. Kirtipur: SIL and TU. (油印) 【改訂版 (2 vols.): Vol. 1, Kathmandu: Kaanibhāa Publication, 1987 (テープ1巻付き)】
- SRESTHACHARYA, I. and I. G. FRIEDMAN
- 1987 A Phonological Justification of Newar Child Vocabulary. *Kailash* 13(1/21): 101-125.
- SRESTHACHARYA, I. and N. M. TULADHAR
- 1976 *Jyapu Vocabulary (preliminary report)*. Kathmandu: INAS.
- SRIVASTAVA, R. P.
- 1967 Tribe-Caste Mobility in India and the Case of Kumanon Bhotiyas. In Ch. von Fürer-Haimendorf (ed.), *Caste and Kin in Nepal, India and Ceylon*, Bombay: Asia Publishing House, pp. 161-212.
- STHAPIT, S. K.
- 1978 English, Nepali and Newari: A Comparison and its Pedagogic Applications. Ph. D. dissertation, Univ. of Poona.
- SUBBA, B. B.
- 1980 *Limbu Nepali English Dictionary*. Gantok: Text Book Unit, Directorate of Education, Government of Sikkim.
- SUBBA, S.
- 1972 Descriptive Analysis of Magar, a Tibeto-Burman Language. Ph. D. dissertation, Post-Graduate and Research Institute, Deccan College, Univ. of Poona.
- 1976 The Languages of Nepal. In P. R. Sharma and L. C. Friedman (eds.), *Seminar Papers in Linguistics*, pp. 139-152.
- 1984 Census and the Linguistic Survey of Nepal: Perspectives on Language Use. *NL* 3: 82-91.
- 孫 宏 開
- 1988 「試論中国境内蔵緬語の譜系分類」, *Language and History in East Asia: Festschrift for Tatsuo Nishida on the Occasion of His 60th Birthday*, 京都: 松香堂, pp. 61-73.
- SUNWAR, G. S., D. BIERI, and M. SCHULZE
- 1973 Sunwar Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- TAMANG, K. B., D. TAYLOR and F. EVERITT
- 1973 Tamang Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- TAMOT, K.
- 1984 Changing Labial Glide into Palatal Glide in the Early Classical Newari. 5th CLSN.
- 1985 Notes on the History of some Newari Verbs: Preliminary Evidence. 18th STG.
- 1987 Presence of Tibeto-Burman Prohibitive Prefix in Dolakha Newari. 8th CLSN.
- 1988 Notes on Proto-Newari Numeral. 9th CLSN.
- TAYLOR, D. M.
- 1969 *Tamang Phonemic Summary (TBPS VI)*. Kathmandu: SIL and TU. (油印)
- 1970a Tamang Segmental Synopsis. *TSTBLN* I, pp. 237-257.
- 1970b Tamang Texts. *TSTBLN* III, pp. 132-164.
- 1973 Clause Patterns in Tamang. *CSDPSLN* II, pp. 81-174.
- 1978 Topicalization in Tamang Narrative. *POD*, pp. 149-156.

- TAYLOR, D., F. EVERITT and K. B. TAMANG
 1972 *A Vocabulary of the Tamang Language (CVLN)*. Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
- THURGOOD, G.
 1982 A Comparative Note on the Indian Linguistic Area. *South Asian Review* 4(3): 23-29.
 1985a Pronouns, Verb Agreement Systems, the Subgrouping of Tibeto-Burman. *LSTA*, pp. 376-400.
 1985b The 'Rung' Language: Notes on Their Proto-Morphosyntax and Subgrouping. *Acta Orientalia* 46: 79-99.
- TOBA, I.
 1973 The Khaling Verbs. *NSL* II, pp. 1-14.
- 鳥羽季義
 1972 「ネパールにおける諸言語の研究状況——とくに The Summer Institute of Linguistics の活動について」『東洋学報』55(1): 01-012。
- TOBA, S.
 1975 Plant Names in Khaling: A Study in Ethnobotany and Village Economy. *Kailash* 3(2): 145-169.
 1978 Participant Focus in Khaling Narratives. *POD*, pp. 157-162.
 1983 *Khaling (Asian and African Grammatical Manual 13d)*. Tokyo: ILCAA. (改訂版)
 1989 The Pronominal Affixation System in Khaling. In D. Bradley, et al. (ed.), *Prosodic Analysis and Asian Linguistics to Honor R. K. Sprigg*, PL ser. C 102, 191-194.
- TOBA, S. and I. TOBA
 1972 *Khaling Phonemic Summary (TBPS XI)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
 1975 *A Khaling-English English-Khaling Glossary*. Kirtipur: SIL and TU.
- TOFFIN, G.
 1976 The People of the Upper Ankhu Khola Ualley. *CNS* 3(1): 34-46.
- TOMLIN, R. S.
 1987 *Basic Word Order: Functional Principles*. London/Sydney/Wolfeboro (New Hampshire): Groom Helm.
- TRUDGILL, P.
 1983 *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society*. Penguin Books. (改訂版)
 1986 *Language in Contact*. Oxford and New York: Basil Blackwell.
- TURNER, R. L.
 1980 *A Comparative and Etymological Dictionary of the Nepali Language with Indexes of All Words Quoted from Other Indo-Aryan Languages, Compiled by D. R. Turner*. New Delhi/Bombay/Calcutta/Madras/Bangalore/Hyderabad: Allied Publishers Private Ltd. (インド版)【初版: London: Routledge and Kegan Paul Ltd., 1931】.
- VALEIX, Pierre
 1974 Marpha, aspects humains et économiques d'un village du Pâc Gâu. *Objets et Mondes* 14(4): 269-278.
 1975 La terminologie de parente newar. Analyse descriptive et comparative. *L'homme* 15(3/4): 129-153.
- VINDING, M.
 1979 A Preliminary Report on Kinship Terminologies of the Bodish Section of Sino-Tibetan Speaking People. *Kailash* 7(3): 191-225.
- VOEGELIN, C. F. and F. M. VOEGELIN
 1977 *Classification and Index of the World's Languages*. New York: Elsevier.
- WARDHAUGH, R.
 1986 *An Introduction to Sociolinguistics*. Oxford and New York: Basil Blackwell.
- WATTERS, D. E.
 1971a *Kham Phonemic Summary (TBPS X)*. Kathmandu: SIL and TU. (油印)
 1971b *A Guide to Kham Tone (GTN III)*. Kathmandu: SIL and TU. (油印)
 1973 Clause Patterns in Kham. *CSDPSLN* III, pp. 39-202.

西 ヒマラヤ諸語の分布と分類 (上)

- 1975 The Evolution of a Tibeto-Burman Pronominal Verb Morphology: A Case-Study from Kham (Nepal). *LTBA* 2(1): 45-80.
- 1978 Speaker-Hearer Involvement in Kham. *POD*, pp. 1-18.
- 1985 Emergent Word Tone in Kham: a Tibeto-Burman Halfway House. *LTBA* 8(2): 36-54.
- WATTERS, D. E. and N. WATTERS
- 1972 *A Vocabulary of the Kham Language (CVLN)*. Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
- 1973 *An English-Kham and Kham-English Glossary*. Kirtipur: SIL and INAS, TU.
- WEIDERT, A.
- 1982 Verb Class Morphology of Limbu: Reconstructability Problems in Evolutionary Morphology. 3rd CLSN.
- 1983 Indeterminacy in Phonology (or Consonant Lengthening vs. Consonant Voicing in Limbu). 4th CLSN.
- 1984 The Classifier Construction of Newari and Its Historical Southeast Asian Background. *Kailash* 11(3/4): 185-210.
- 1985 Paradigmatic Typology and its Application to Verb Agreement System. In Pieper and Stickel (eds.), *Studia Linguistica Diachronica et Synchronica*, Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 903-936.
- WEIDERT, A. and B. SUBBA
- 1985 *Concise Limbu Grammar and Dictionary (Concise Limbu Grammar, Nominal Paradigms and Verbal Paradigms, Concise Limbu-English Dictionary, English-Limbu Vocabulary)*. Amsterdam: Lobster Publications.
- WINTER, W.
- 1987 Differentiation within Rai: Non-Lexical Isoglosses. In D. D. Laycock and W. Winter (eds.), *A World of Language: Papers Presented to Professor S. A. Wurm on His 65th Birthday*, PL. ser. C, 100, pp. 729-734.
- WYLIE, T.
- 1970 *A Tibetan Religious Geography of Nepal (Serie Orientale Roma, XLII)*. Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- ZOLLER C.
- 1983 *Die Sprache der Rang pas von Garhwal (Raṅ Pə Bhāsa): Grammatik, Texte, Wörterbuch*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.